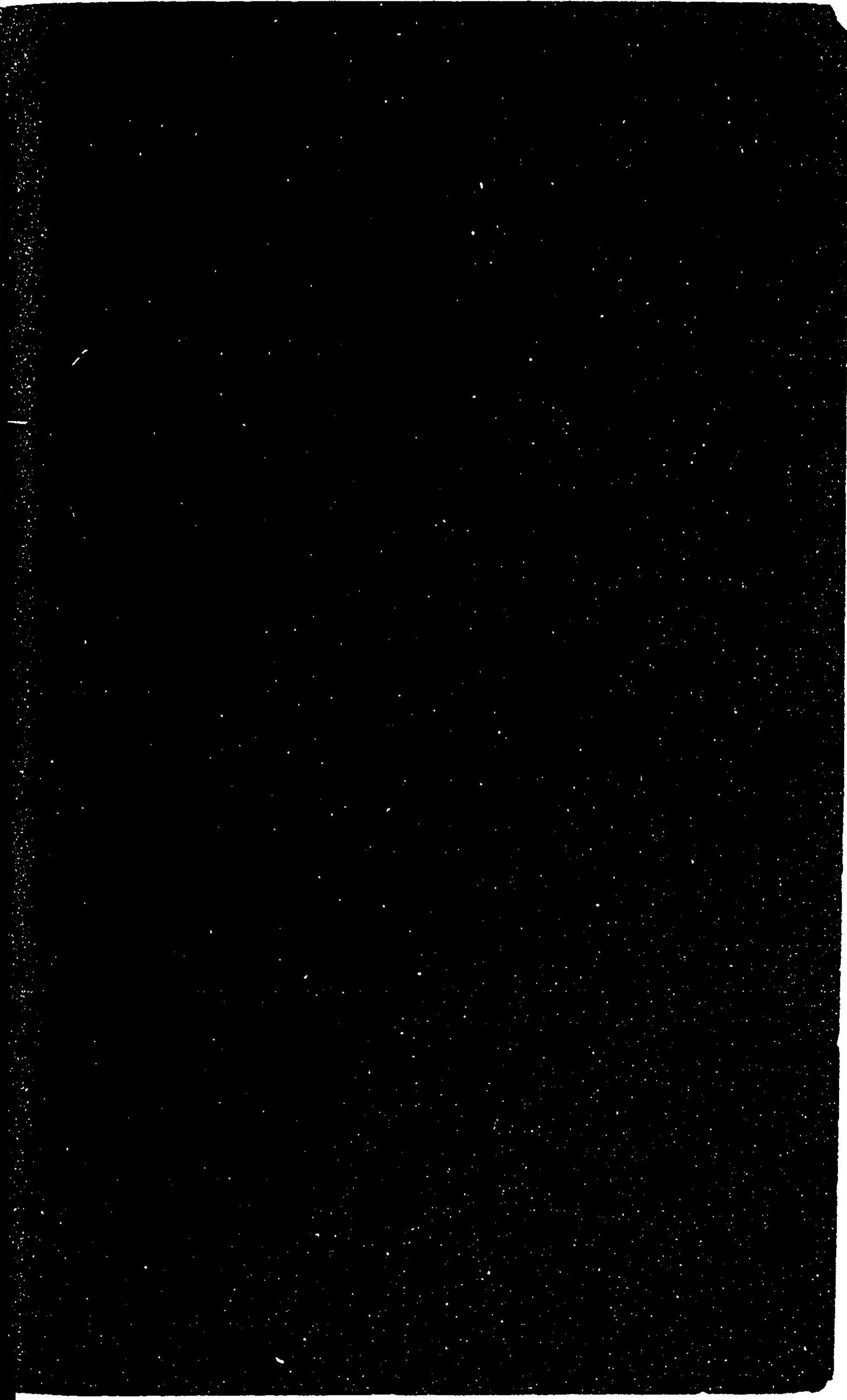
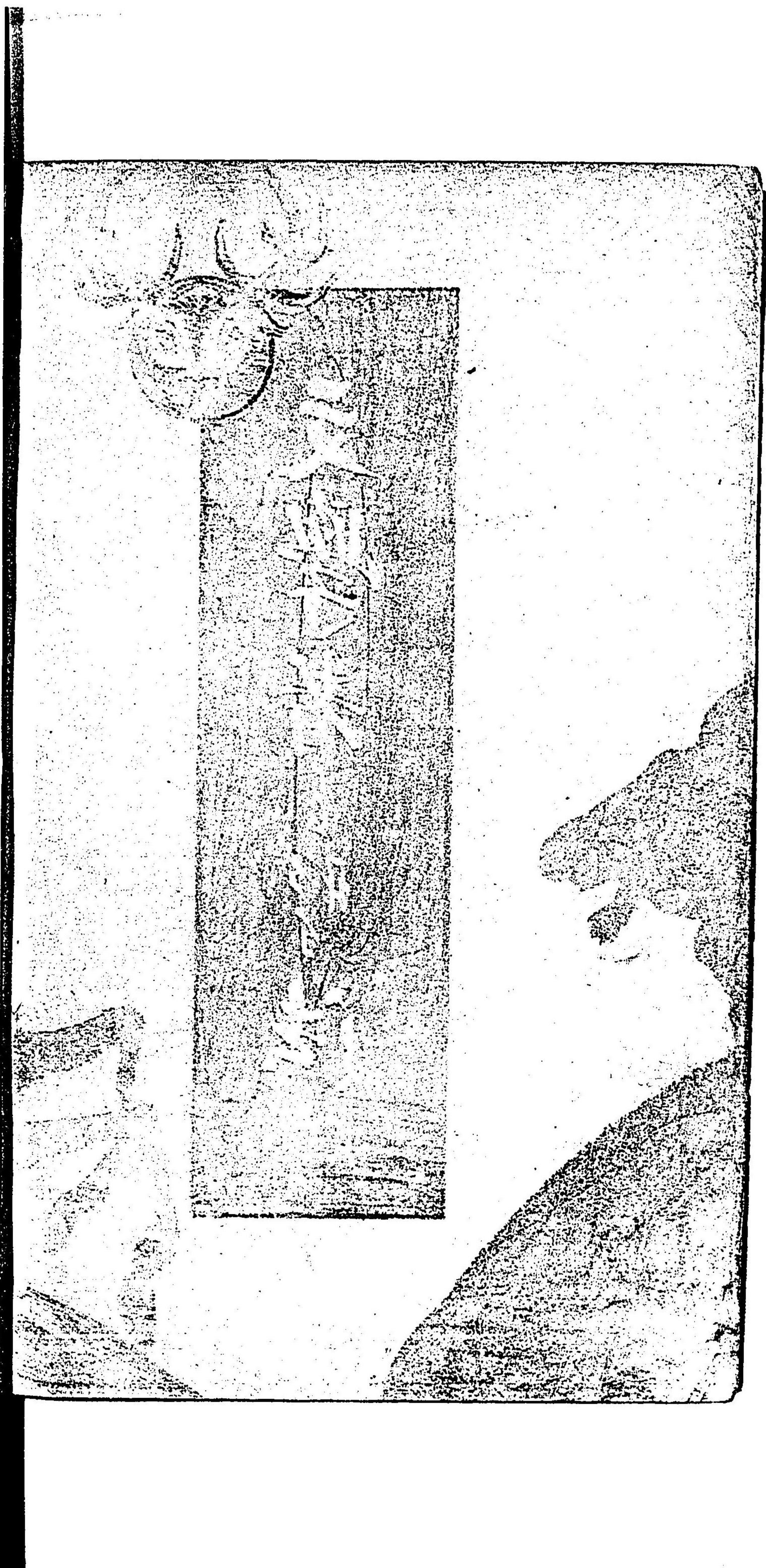
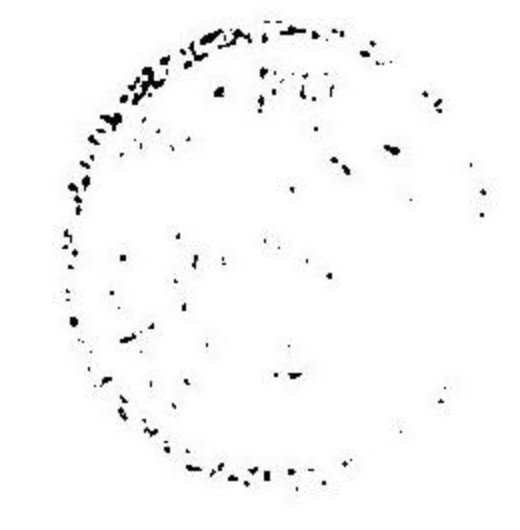




文學者と形法

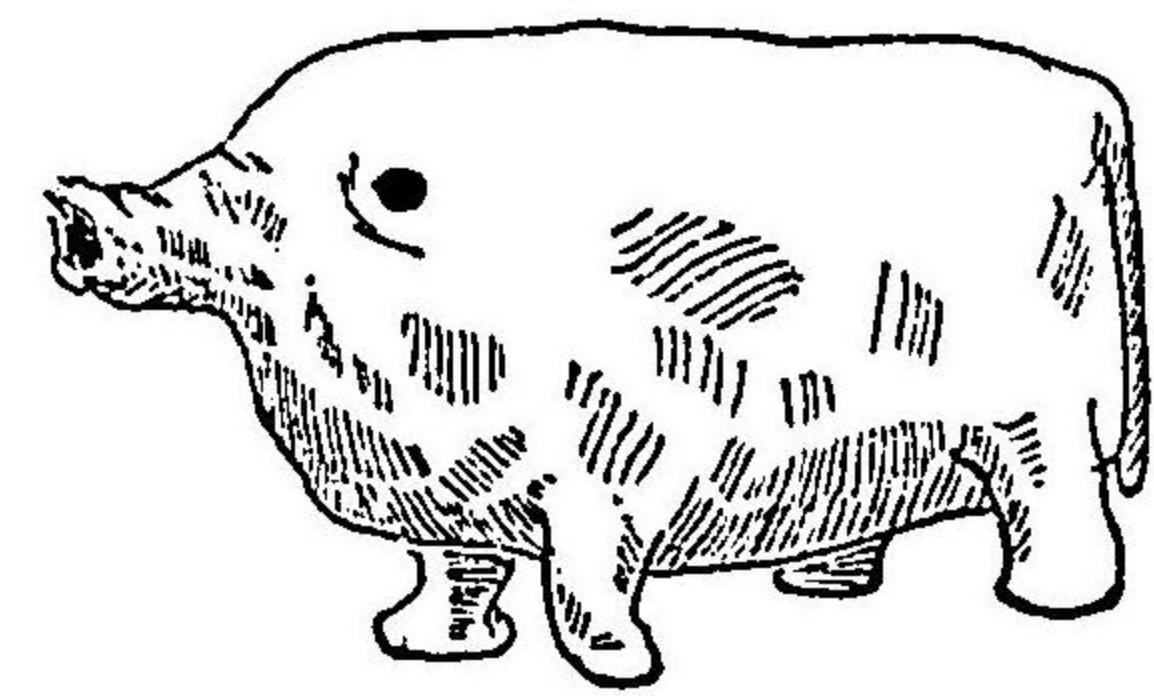






Lo! Those Ōbaku to  
belles-lettres fly!  
In vain! They dip, turn  
giddy, rave and die!

謹みて遼東の  
豚の子  
一匹を  
今の文  
學者各  
位の前に呈す



序

こゝ神田錦町の麥酒屋に寄合ふ。『*Kit-Cat Club*』に折々顔を見せる三尺八寸の大  
 入道あり。團栗眼を光らして濃厚粧の姉さんを凝視めながら廣くもなき部屋  
 隅々を九十度の角を作りて上下するは飛んだ氣紛れなスウキフトのど、我れ  
 一文字屋風帯恐るゝ、席を進んで先生の高名幸ひに聞くを得んとアチソンの二  
 代目を極込めば、入道尻目に掛けて冷然として云へらく、『何と申す……己の名  
 が聞きたいか、己はナ、三文字屋金平ぢやア』と。聲『ニコライ』の鐘よりも  
 大なり。『さては金平のどでおぢやるか……』と申して聞いた事もなき名なれども  
 我より二文字屋多きだけにて晴天當世無双の大豪傑とお見受申す。何か一ツ教  
 えて下され。先生ハッ、と痰を吐いて大喝すらく、『退け、退け！ 何奴もこいつ  
 も青瓢箪よろしくだ……』とそんな野暮ハ云はぬから安心しろ。己も岡崎兵衛殿  
 御内にゐた頃は武勇拔群の譽を得たもンだが、斯う太平が續いた日には力瘤が  
 抜けて何の役にも立たぬ。そこで、實はナ、近日のうちに髪を刈込み鬚を剃り  
 「ボマドンヌール」でも塗ちらしてハッ、と當世にゐる考だ。見掛は恐ろしい天

入道でも、昔し取った杵柄で諸事萬事の魂膽に行渡つてゐる已様なればこそ時勢を見て直ぐ宗旨を變へる。貴様たちのやうな頑童にはこの調子が合點行くまい。堂ぢや教えて呉れうか……ヤイ、何と返事をしろ、木葉野郎め！」

一座叱驚仰顔して眼ばかりバチつかせる中に我れ漸くガタ、く、慄へる身を堅め、『先生願はくは怒鳴り給ふな。御講釋は随分辛抱して聞きませう』と仕方がないしに下から出れば、『然らば説法して呉れう』と上座に直りてニタリ、と笑ひ、呆れた顔の姉さんを横目で睨み濫茶をぐつと引掛けて、『是の眞言秘密の教だが、辛抱して聞かうといふ殊勝にめて、説法して呉れる。耳をはッ立て、能く聞け』と。初めは饒のヌラケヲするが如く、中頃は颯風砂礫を捲くの勢にて、終りの澗水涓々として石竅を穿つの辯をもて饒舌りたつる事凡う四時間。姉さんは呆氣に取られて心の内に、『きつと天鉄羅を喰べて来たんだよ』我れ汗を流して一心にさら／＼と筆記したれど何の事やら更に分らず。

二十六年の大晦日前三日

弟子分

一文字屋風帯

識す

## 目次

### 緒言

一頁

### 第一 文學界の動靜を知る法

十四頁

先づ文學界の動靜を知らざるべからず○新聞及び雑誌を讀むべき事○大家の解○大家の區分表○文學大家の作を讀む法○文學界の通となる法○文學通の獨語○文學通の心得○豊川様のお狐と文學者○民友社派○早稻田派○女學雜誌社派○文學界派○三籟派○硯友社派○朝日新聞社派○柵草紙派○博文館派○文人派と政社○注意

### 第二 文學者となり得る資格

二十九頁

文學者の風貌○醜男の禁物あり○四文豪の風采○文學者の心性○怠慢○無精○放浪○無頓着○大風流人○『情』の怪物○文學者となり得べき經歷○履歴の一例○文學者の幼時○パスカルとドストエーフスキイ○履歴製造○文學者と婦人○婦人社會を研究する必要○戀愛の經驗○文學者の學者にあらす○シエークスビーヤの

無學○知識は詩・勝を腐らす○無學者デフォー○無學文盲の文學者の本色○國文學○漢文學○外國文學○歴史學○徳川文學○明治の文學者は餘りに學者過ぎたり○文學者となり得べき四條件

### 第三 文學者として學ぶべき一般の見識及び嗜好並

に習癖

六十三頁

文學者及び准文學者○文學者の守るべき三ヶ條○『俗』○『通』○『粹』○『號』○文學者としての見識○『ブル』○英雄崇拜○文學者の衣食住器具調度○文學者は流行を追はぬ振して追ふ○衣服附たり俗中之雅○文學者は贅澤にあらす○文學者のこしらへ○羽折○帶○室内裝飾○作者風の書齋○鳥丸光廣と山東京傳○造作及び建具○美術に於ける嗜好○「シヨンズキ」と「シヤウズキ」○落款あれば賈にてもよし○書畫屋第一の顧客○美術の評語○西洋美術に於ける趣味○洋癖文學者却て日本品を珍重す○美術嫌ひ○食物○名刺○雅印○流行

### 第四 交遊に於ける文學者の心得

九十九頁

倫敦の社會○日本の社會○文學者の小黨派○文學者は必らず小黨派を作るべし○黨派の表面及び裏面○黨派の利益○黨派に加はる秘訣○文學界の師弟○文學者の争○絶交○嫉妬偏執○商賈忌敵○交友は消炭の如くあるべし○不在と詐るの必要○如何にもウソらしく留守を遣ふべし○文學者は人を尋訪せず○文學者の小天地○文學者と淺草の觀世音○文學者と平家の落武者○ゲーテ及びドストエーフスキイ○文學者の交友は物質的あり○シヨンソン○文學者は飽くまでも冷淡浮薄なるべし○乞食増殖策と怠慢獎勵法○文學者は平凡道徳を顧みず○棄てし友は宜しく罵るべし○婚姻の心○友に棄てられしものゝ愚痴○今の文學界には眞の交友なし○樂天的醉生夢死主義の結合○樂天的醉生夢死主義の解○文學者は絶對なる醉生夢死主義を奉すべからず○談話○宴遊並に飲酒○益田鶴樓と十返舎一九○文學者には藝人多し○茶番○朗讀○藝は他を

四  
娯楽しめんとするにあらずして自らを樂ましむる也○太宰春臺と  
今の文學者○文學者の交際には眞心を吐く事なし○十七世紀及び  
十八世紀の英國文學者○信用なき愛好と友愛なき親密○ウキツヤ  
ム、ブラックの交遊○ポーブの交友○文學會○ジョンソンの文學會  
○日本人の交遊組織○文學界の景況○バックソンの言○文學界  
名士の口吻

### 第五

著述に於ける心得并に出版者待遇法……百三十七頁

著書を出板せざれば未だ文學者といふを得ず○如何にして著述す  
べきや○人物評及び史論○『渠は』の使用法及び其例○人物評は  
文章を專一とす○聲色遣は癖を具似るが肝心なり○『開國始末』  
と『新日本史』○『江湖傳』の一節○人物評を爲る者は民友社の調  
子を飲込めば可也○詩人哲學者の傳を序する心得○湖處子先生の  
『ウォルツウォルス』○田舎牧師と人物評の著者○人物評の別派  
○批評○「ドラマ」及び新詩○「インスピレーション」○新詩

人の三病○叙事詩の復興○意味の分らぬが「ドラマ」及び新詩の  
極意なり○小説○氣骨小説家某の說○悲劇○女主人公○男主人公  
○男が惚れる時は女も惚れる○戀愛小説の順序○實際派小説○戀  
愛小説家たらんとする者の心得○張扇小説○悪人と善人との不必  
要○狭○江戸ツ子の見本○講釋を聞く事○拙速の工風○某先生の  
大著述○チヨイと工風してチヨイと筆を奮ふ○ウキリアム、ブラッ  
ク及び其他の作者○チッケンズとスコットとサツカレー○お手輕  
主義○幸福先生の操觚事業○外山大先生○著述家たらんとする者  
は幸福先生を學ぶべし○著述の順序○先づ雜誌或は新聞に寄書す  
べし○初めて新聞に載りし時は嬉しがるべし○新聞或は雜誌に載  
りし後ハ主筆に面會すへし○無暗矢麩に投書すへし○如何にして  
書肆と關係を結ぶべきや○ポーブが書肆を咏める詩○カールと大  
橋佐平氏○和田篤太郎氏○出版人の大氣量○書肆の主人と操觚者  
○英國の出版人○お店廻りの職人○人氣○書估は人氣の保護者な

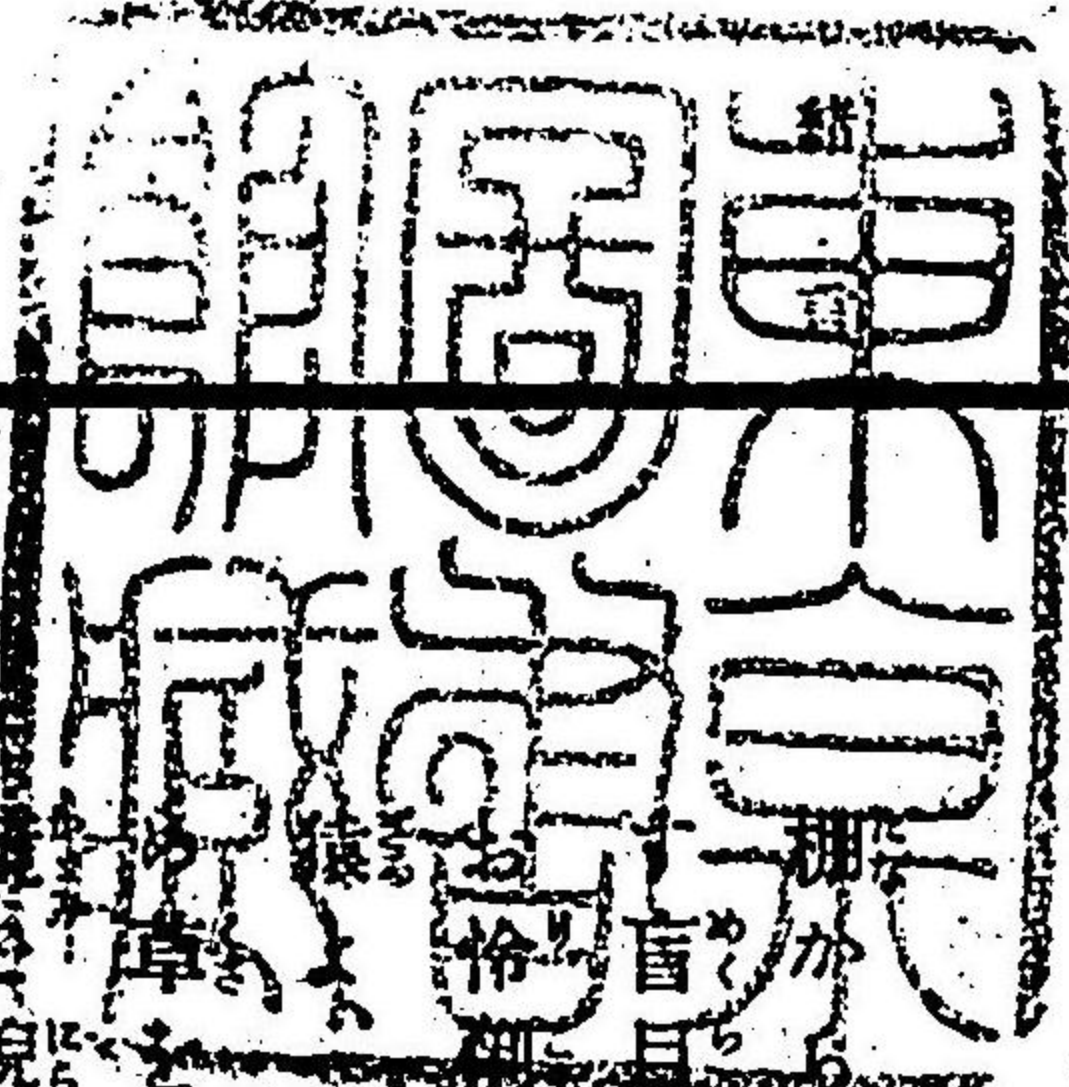


り○營養不充分の病人○買れツ子の原稿料○書肆の黒幕宰相○ヨ  
カノの館賣と文學者○卓錫文學者○社會の報酬

爲文學者經

三文字屋金平述

落ちる牡丹餅を待つ者よ、唐様に巧みなる三代目よ、浮木をさが  
る魚よ、人參呑んで首縮らんとする白癡漢よ、鯛の頭を信心する  
連よ、雲に登るを願ふ蚯蚓の輩よ、水に影る月を奪はんとする山  
無藝無能食むたれ總身に智慧の廻りかぬる男よ、木に縁て魚を求  
むるを打て蛇に驚く狼狽者よ、白粉に咽せて成佛せん事を願ふ艶治郎よ、  
鏡と腕め競をして願をなでる唐琴屋よ、懲て世間一切の善男子、若し遊  
んで暮すが御執心ならば、直ちにお宗旨を變へて文學者となれ。  
我が所謂文學者とは、*Unklar, die Messen des Gehirns* に述べたてし  
七ひづかしきものにあらず。内新好が『一目土堤』に穿りし通仕込の御



作者様方一連を云ふなれば、其職分の更に重くして且つ尊きは豈に夫の  
扇子で前額を鍛へる野鬪間の比ならんや。  
夫れ文學者を目して豫言者ありといふは生野暮一點張の釋義にして到底  
咄の出来るやつにあらす。我が通仕込の御作者様方を尊崇し其利益のい  
やちこなるを欽仰し、其職分をもて重く且つ大なりとなすは能く俗物を  
教え能く俗物に渴仰せらるゝが故なり、(衆等が通の原則を守りて俗物を  
斥罵するにも關らず)然しながら縦令俗物に渴仰せらるゝといへども路  
傍の道祖神の如く渴仰せらるゝにあらす、又賞で喜ばるゝと雖ども親の  
因果が子に報ふ片輪娘の見世物の如く賞で喜ばるゝの謂にあらねば、決  
して心配すべきにあらす。否な、俗物の信心は文學者即ち御作者様  
方の生命なれば、否な、俗物の鑑賞を辱ふするの御作者様方即ち文學者  
が一期の榮譽なれば、之を非難するは畢竟當世の文學を知らざる者とい  
ふべし。  
此故に當世の文學者は口に俗物を斥罵する事頗る甚だしけれど、人氣の

前に枉屈して其奴隸とあるは少しも珍らしからず。大入だ評判だ四版だ  
五版だ傑作ぢや大作ぢや豊年ぢや万作ぢやと口上に咽喉を枯らし木戸鏡  
を半減にして見せる線日の見世物同様、薩摩蠅蠅てらゝと光る色摺表  
紙に誤魔化して手拭紙にもならぬ厄介物を賣附けるが斯道の極意、當世  
文學者の心意氣がかし。さりながら人氣の奴隸となるも畢竟は俗物濟度  
といふ殊勝らしき奥の手があれば強ち無用と叫ばるゝにあらす、却て之  
れ中々の大事決して等閑にしむたし。俗人を教ふる功德の甚深廣大にし  
てしかも其勢力の強盛宏偉なるは熊膽寶丹の販路廣きをもて知る。洞  
窟の聲は囁呪として蘇子の腸を断りたれど終にトテンチンツトンの上調  
子仇つばきに如かず。カントの超絶哲學や餘姚の良知説や大は即ち大な  
りど雖ども臍栗錢を牽摺り出すの術の遙かに生臭坊主が南無阿彌陀佛に  
及ばず。されば大恩教主の先づ阿含を説法し志道軒は隆々と木陰を揮回  
す、皆之れこゝの呼吸を呑込での上の咄なり。  
流石に明治の御作者様方は通の通だけありて俗物濟度を早くも無二の本

願となし俗物の調子を合點して能く邦間を叩きとお髯の塵を拂ふの工風を大悟し、向ふ三軒兩隣りのお蝶丹次郎お染久松よりやけにひねつたダンスの *Moss B. A. Die*、瓦斯系織に綺羅を張る印刷局の貴婦人に到るまで随喜満仰せしむる手際開關以來の大出来なり。聞けば聖書を糧にする道徳家が二十五錢の指環を奮發して「エンゲルジメント」綾羅錦繡の姫様が玄關番の筆助君にやらの、くを極め込んだ果の「エロイブメント」、皆之れ小説の功德なりといふ。よしや一斗の「モルビ子」に死なぬ例ありとも月夜に笠を扱かれぬ工風を廻らし得べしとも、當世小説の功德を授かり少しも其利益を蒙らぬ事曾て有るべしや。冒險譚の行はれし十八世紀には航海の好奇心を煽し、京傳の洒落本流行せし時の勘當帳の紙數増加せしとかや。抑も迂行燈應れて電氣燈の光明赫灼として闇夜なき明治の小説が社會に於ける影響の如何。「戯作」と云へる襤褸を脱ぎ「文學」といふ冠着けしだけにても其効果の著るしく大なるは知らる。

英吉利は野暮堅き眞面目一方の國なれば、人間の元來醜惡なるにお氣が附かれずして、ゾネラが偶々醜惡のまゝを寫せば青筋出して不道徳文書なりと罵り叫ぶ事さりとば野暮の行き過ぎ餘りに業々しき振舞なり。さりなむら論語に唾を吐きて梅磨を六箱三略とする當世の若檀那氣質の其れどの反對にて愈々頼もしからず。東京の或る固執派教會に屬する女學校の教師が曾我物語の挿畫に男女の圖あるを見て猥褻文書なりと飛んだ感違ひして爐中に投込みしといふ一ツ咄も近頃笑止の限りなれど、如何考へても聖書よりは小説の方が面白いには違ひなく、教師の眼を騙んで「よくってよ」派小説に現を抜かすは此頃の女生徒氣質なり。例へば地を打つ槌は外るとも青年男女にして小説讀まぬ者なしといふ鑑定は恐らく外れっこなるべし。俗界に於ける小説の勢力斯くの如く大なれば隨て小説家即ち今の所謂文學者のチヤホヤせらるゝは人氣役者も物の數ならず。此故に腥き血の臭失せて白粉の香鼻を突く太平の御代にては小説家即ち文學者の數次第々

々に増加し、鯛は花は見ぬ里もあれど、鯉寄る北海の濱邊、鰯積堀る九州乃山奥に到るまで石版書と赤本は見ざるの地なしと鼻うごめかして文學の功德無量廣大なるを説く當世男殆んど門並あり。寄れば觸れば高慢の舌爛してヤレ沙翁は造化の一人子である。鯛羅羅羅を振染り西鶴は九阜に爲す口を舞ふと飛ぶ通を抜かし、何かにつけては美學の受賣をして田舎者の緋メレンスは鮮かだから美で江戸ツ子の旨綱はシミだから美でないといふ滅法の大議論に近所合壁を騒がす事少しも珍らしからず。好奇な統計家の概算に依れば小遣帳に元祿を括る通人迄算入して凡そ一町内に百「ダース」を下る事あるまじといふ。

夫れ壺所に於ける鼠の勢力の法外なる飯焚男が升落しの計略も更に討滅しむたきを思へば、社會問題に耳傾くる人いかで此一町内百ダースの文學者を等閑にするを得べき。若し惣ての文學者を驅て兵役に従事せしめば常備軍は頗る三倍して強兵の實忽ち擧がるべく、惣ての文學者に仕拂ふ原稿料を算れば一萬噸の甲鐵艦何艘かを造るに當るべく、惣ての文學

者が消費する筆墨料を徴収すれば慈善病院三ツ四ツを設る事決して難きにあらず、惣ての文學者が喰潰す米と肉を蓄積すれば百度饑饉來ることも更に恐るゝに足らざるべく、若し又惣ての文學者を一時に殺戮すれば其死屍は以て日本海を埋むべく其血は以て太平洋を變色せしむべし。

文學者は一の社會問題なり、貧民が、僧侶が、娼妓が社會問題となれる如く。

熟々考ふるに天に爲ありて油揚をさらひ地に土鼠ありて蚯蚓を喰ふ目出度き中に人間は一日わくせくと働きて喰ひかぬるが今日此頃の世智辛き生涯あり。學校の卒業證書が二枚や三枚有つたとして鼻を拭く足にもならねば高が壁の腰張か屏風の下張が關の山にて、偶々荷厄介にして筆管に藏へば縦合へば蟲に喰はるゝとも喰ふ種には少しもならず。學士でい何のど云つた處で味附摺の法を知らずお辭義の禮式に熟せざれば何處へ行ても敬して遠ざけらるゝが結局にて未だしも敬さるゝだけを得にして責めてもの大出来といふべし。ミルトンの詩を高らかに吟じた處で饑渴

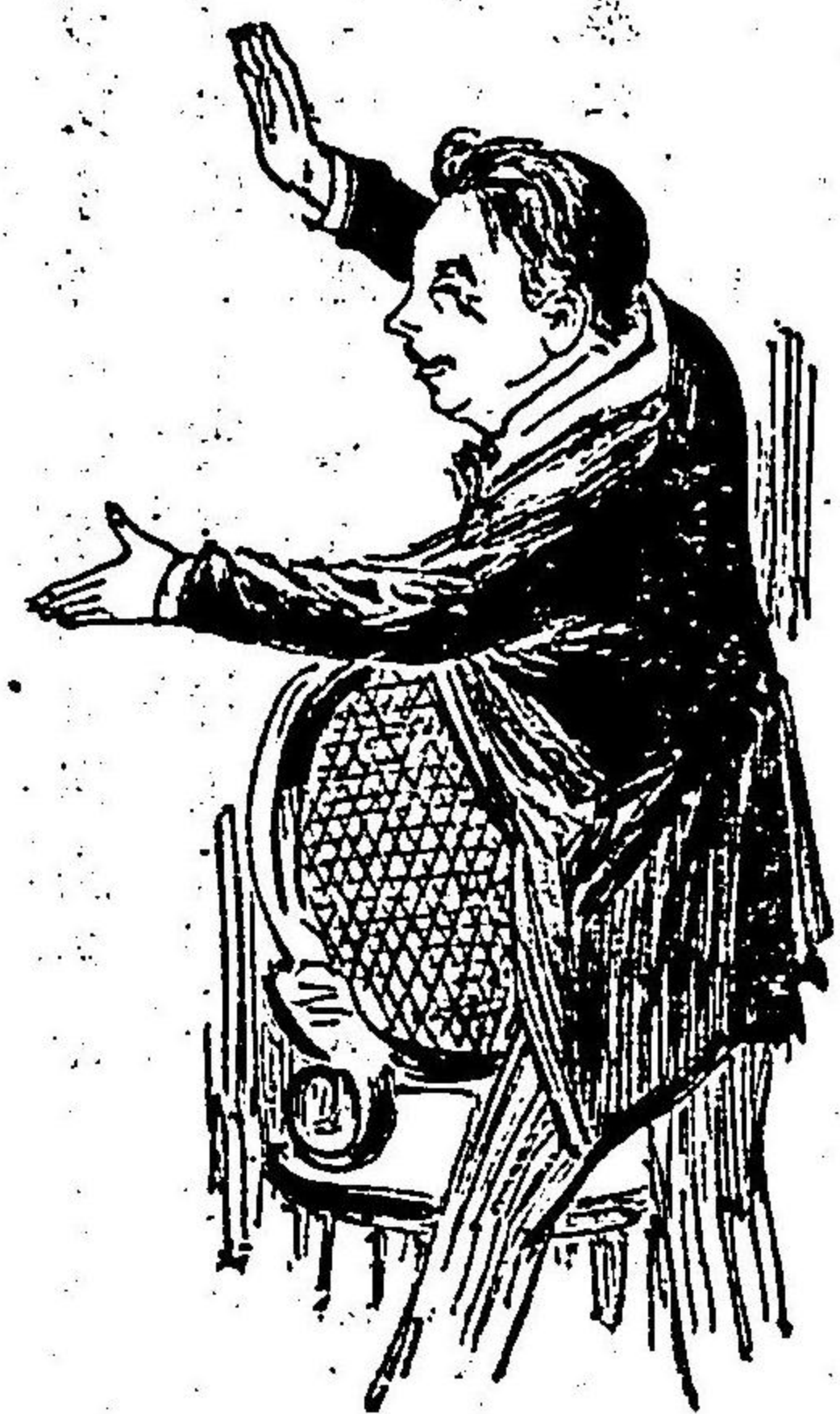
は中々に醫しむたぐカントの哲學に思を潜めたどて嚴冬單衣終に凌ぎ  
たし。學問智識は富士の山ほど有つても麵包屋の眼に啞錢一文の價値  
もあければ取ツけエ、エの中々以ての外なり。トハの結局が博物館に乾  
物の標本を殘すか左なくば路頭の犬の腹を肥すが世に學者としての巧名  
手柄なりと愚痴を覆す似而非ナツシユは勿論白癡の下、詰りなれど、さ  
るにても笑止なるハ世の是沙汰、飯粒に釣らるゝ鮒男がヤレ才子ぢや恰  
惻者ぢやと褒めろやされ、偶さか活きた精神を有つ者あれば却て木偶の  
あしらひせらるゝ事沙汰の限りあり。騙詐が世渡り上手で正直が無氣力  
漢、無法の活潑で謹直が愚圖、泥龜は天に舞ひ爲は淵に躍る、さりとは  
不思議づくめの世の中がかし。斯る中にも社會に大勢力を有する文學者  
のハ平氣の平三で行詰りし世を尻にも思はず。春うらく蝶と共に遊々や花の芳野山に玉の  
厄を飛ばし、秋は月でらくと漂へる潮を觀て繪島の松に猿なさを怨み、嚴冬に  
ハ炬燵を奢の高樹と閉籠り、盛夏にハ蚊帳を榮露の陣小屋として、米は

俵より涌き錢は莖口より出る結構な世の中に何が不足で行倒れの茶番狂  
言する事かどハ、ハキに太平樂云ふて、自作の小説が何十遍摺とかの色表  
紙を付けて賣出され、二號活字の廣告で披露さるゝ外は何の愁もあき氣  
樂三昧、あつたら老先の長い青年男女を墮落せしむる事は露思のすして  
筆費え紙費え、高が大家と云はれて見たさに無暗に原稿紙を書きちらし  
ては屑屋に忠義を盡すを手柄とは心得るお目出たき商賣なり。月雪花は  
魯か犬が子を産んだとてハ一句を作り猫が肴を竊んだとてハ一杯を飲み  
何かにつけて途方もなく嬉しがらる事おかめが甘酒に酔ふと全ハ、  
斯くの如く文學者の身分不相應に勢力を有し且つ身分不相應に、ハ、  
り。世に氣樂なるものハ文學者なり、世に羨ましき者は文學者なり、  
待の酒を飲まぬ者も文學者たらん事を欲し、落ちたるを拾はぬ者も文學  
者たるを願ふべし。然るに世にすねたる阿呆ハ痛く文學者を斥罵すれども是れ中々に識見の  
狹陋を現示せし世迷言たるに過ぎず。冷靜なる社會的の眼を以て見れば、

等しく之れ土居して土食する一ツ穴の蚯蚓蟻の徒なれば何れを高しとし何れを低しとなさん。濁醪を引掛ける者大福を頼張る者を笑ひ賣色に現を抜かす者が女房にデいる鼻垂を嘲る、之れ皆他の鼻の穴の廣さを知て我が尻の穴の窄さを悟らざる鳥游の白者といふべし。窮理決して迂なるにあらず實踐何ぞ淺しと云はんや。魚肴は生臭きが故に廉からず蔬菜の土臭しといへども尊とし。馬に角なく鹿に鬚なく犬は嗜と啼いて、やれず猫のフンと吠えて夜を守らず、然れども自ら馬なり鹿なり犬なり猫なるを妨げず。稼ぐものあれば遊ぶ者あり覺める者あれば酔ふ者あるが即ち世の實相されば已れ一人が勝手な出放題をこねつけて好い子の顔をするは云はふ様なき歿分曉漢言語同斷といふべし。縦令石橋を叩いて理窟を拈る頑固黨が言の如く、文學者を以て放埒遊惰怠慢痴呆社會の穀潰し太平の寄生蟲となすも、兎に角文學者が天下の最幸福なる者たるに少しも差問なし。然るを愚圖々々と賢しらだちて罵るは隣家のお茶を考へる獨身者の繰言と何ぞ擇まん。

加之、文學者を以て怠慢遊惰の張本となすおせツかいは偶々怠慢遊惰の却て神の天啓に協ふを知らざる白癡なり。謹んで慮かるに神の御惠治かりし太古創造の時代には人間無爲にして家業といふ七ひづかしきものもなければ稼ぐといふ世話もなく面白おかしく喰て寝て日向ぼこりしてゐられたものゝ如し。アダムの二本棒が意地汚さの撮み喰さへ爲すば開闢以來五千年の今日まで人間は樂園の居候をしてゐられべきに、いんだ飛ツ塵の働いて喰ふといふ面倒を生じとは扱も迷惑千萬の事ならずや。神が創造の御心の人間を樂ましめんとするにありて苦ましめんとするにあらず。無爲は天則なり、無精は神慮に協へり。正直の頭に神宿る——嫌み思をして稼ぐよりは眞ッ正直に遊んで暮すが人間の自然にして祈らずとも神や守らん。文學者を以て大のんきななり大氣樂なり大阿呆なりといふ事の當否の兎も角も眼ばかりバチクリとして心の藻脱の売とされる木乃伊文學者は豈に是れ人間の精粹にあらずや。且つ又聖經の教ふる處に依れば天國に行かんとすれば是非とも小兒の心

を有たざるべからず。小兒の如く、タフ、小なく、意氣地なく、薄白で、ダ  
い、をこねて、遊び好で、無法で、夜分曉で、或時はお山の大将となりて  
空威張をし、或時ハレハレ、茫然としてお半の煮えたも御存じなきお目出  
たき者は當世の文學者を置いて誰ぞや。  
文學者なる哉、文學者なる哉。天變地異を笑つて済ますものは文學者な  
り。社會人事を茶にして仕舞ふ者は文學者なり。否な、神の特別なる最  
負を受けて自然に hypnotize さるゝものは文學者なり。文學者なる哉、文  
學者なる哉。  
我れ三文字屋金平風に救世の大本願を起し、終に一切の善男善女をして  
悉く文學者たらしめんと欲し、百で買つた馬の如くのたらくとして工  
風を凝し、虱を捫る事一萬疋に及びし時酒屋の厮童がキンライ節を聞い  
て豁然大悟し、茲に椽大の権實筆を揮て治く衆生の爲に爲文學者經を説  
解せんとす。  
右から見ても左から見ても文學者は最幸最福なる動物なり。我ら拔苦與



樂の説法を疑ふ事なく一圖に有むたのツて盲信すれば此世からの極樂性  
生決して難きにわらず。銀價の下落を心配する苦勞性、月給の減額に氣  
を揉む神經先生、若くは身軀にもてわます食もたれの豚の子、無暗に首  
を掉りたがる張子の虎、來つて此説法を聴聞し而してのち文學者となれ。  
朝飯前の仕事にして天下を驚かす事虎列刺よりも甚だしく天下に評判さ  
るゝ事蜘蛛男よりも隆なるは唯其れ文學者あるのみ、文學者あるのみ。

先づ文學界の動靜を知るべからず

新聞及び雑誌を讀むべき事

大家の解

大家の區分表

(第一) 文學界の動靜を知る法

文學者となる前に先づ文學界の「通」即ち觀測者となるを要す。例へば飽を賣らんとするに臨みて豫じめ飽賣の支度萬端並に「よか」の踊り振を心得るの肝要なる如く今の文學界を一通り見渡して始終其天氣模様を觀察し其内幕を洞視するの明を養はざるべからず。若し此邊の心得なくしてお先眞暗に文學界に飛込めば、恰も八幡乃鐵に入りしが如く到底有漏無漏の間に彷徨して根柢れがする計りならん。

さて如何にして文學界の「通」となり得るかといふに極めて容易なる一法あり。先づ新聞は國民、讀賣、朝日の三種にて澤山なれば政治や何や彼は捨置いて、國民なれば湖處子愛山生並に停春樓主人の小説紀行文若くは隨筆、讀賣なれば小説及び雜報、朝日なれば小説の外題浪六の口上及び竹の屋の紀行文或は劇評を油断なく讀むべし。又雜誌は國民之友、女學雜誌、早稻田文學、三續、文學界、柵草紙等を讀むべし。讀まざるも可なり。廣告の目錄だけ見れば澤山なり。

斯くて一ト月も新聞雜誌を研究すれば文學社會に泳ぐ人の名だけは覺えらるゝ。而して度々名の出るを大家なりと心得べし。二號活字にて廣告せらるゝを愈々立派ある大家なりと合點する事肝心なり。例へば山路愛山先生は一週間に三四度位宛、時に依れば毎日續きて國民新聞に名が出る事すらあれば勿論大家なり。又江見水蔭中村花瘦等諸先生の小説はいつでも二號活字で讀賣新聞に披露せらるゝの故に正札附の大家といふべし。

大家といふは役者の登の如く活板の舞臺に出る時は如何しても被らねばならぬものあり。夫故ミストル何某は大家にあらずとすも全じ其人が何々居士或は何の屋何と名乗つて活字に上る時は既に「大家なりと心得べし。大家を尊ぶものゝ如く考ふるは非なり。誰も彼も等しく皆大家なりと自他平等に考へて少しも偏頗あるべからず。

昔の咄に世事の好き髪結床の親方が何人を見るも必ず「イヨ、色男!」と呼びし如く、如何なる文學者を見るも「イヨ、大家!」とあしらふ事は第一の秘訣也。大家の名を覺え終れば概略の區分を爲して忘れぬ様に腦に刻むべし。今初心の



者の爲め假に分類して一目瞭然たらしめば、

民友社派

- (1) 十二文豪大家
- (2) 日曜附録大家
- (3) 人物評及び史論大家

女學雜誌社派

- (1) 「ドラマ」大家
- (2) 武道兼座禪大家
- (3) 「隨感」大家一名「涙」の大家若くは聖書及び古文切抜大家とも云ふ
- (4) 俳諧切抜大家

三籟派

- (1) ……の大家
- (2) 圓環大家一名法語切抜
- (3) 爛熳大家附唱棒大家

讀賣新聞社派

- (1) 史譚大家一名反古紙張繼
  - (2) 月曜附録大家附「ガク」
  - (3) 雜報大家一名樂屋落製造
- 朝日新聞社派一名樂々會とも云ふ

- (1) 旅行大家
- (2) 劇評大家
- (3) 樂屋吹聴大家
- (4) 茶番大家

硯友社派

- (1) 詞海大家
- (2) 小櫻絨大家
- (3) 口上茶番大家
- (4) 引札大家

文學大家の作を讀む

この外早稲田派柵派等數へ上ぐれば中々多けれど、ざつとこゝらを飲込めば充分なり。少し位の分類法正鵠を得ざるも差支なし。唯記憶の便宜を計りて區分せしなれば名目の如きは各々の勝手にて、或る一派を目して跡引大家、他の一派を稱して駄洒落大家と名附くるもよし。

兎にかく都合好き様に工風して諸大家の名を飲込めば、主として早稲田文學の文界現象を基礎となし、次第々々に揣摩を逞ふすべし。少々位間違つた處で毒にならぬ事は、いくら「通」を極めても大事なし。

近頃歐羅巴の批評法は其著作と其著者の傳紀とを併觀するを以て一般の通別とす。蓋し境界の勢力は人の製作に影響を與ふる事極めて大なればなり。

今の文學者が作を讀むに當つて此邊の覺悟があれれば愈々妙なりといふべし。例へば愛山生の新婚後鎌倉に遊びし紀行を國民新聞に載せられし時、僅かに一欄半に過ぎざる文中に「妻君」なる文字を凡る二十有餘數ふるを得たるなど愛情の濃やかなる容子中々に與ゆかし。又女學記者が關西に旅行せし日記中に「かの」なる文字を發見する事頗る夏蠅さ程ありき。「かの」人が縫ふて呉れし下着

文學界の通法

「かの」人が酌んで呉れし茶」「かの」人が笑ふて呉れし失策」等の如し。又近頃國民新聞に連載せられし「小生涯」を讀めば湖處子が *Sweet home* ありくと眼前に見はるべし。こゝらに目を附けるが極めて肝要なればゆめ、油斷あるべからず。

惣て文學社會の天氣觀測者たらんとするに、一を聞いて十を吹聴する勇氣と是非に關はず雷同する公共心を蓋へざるべからず。例へば誰れが妻を買つたと聞けば直様「あの妻君には中々の曰くありだ」と吹聴し、二十五座の新狂言は面白いと云へば見ても見ないでも面白いと雷同するを可しとす。殊に文界知名の人は成るべく親密である如く振れ回るは昔も今も變りなく三馬時代の犬悅馬骨の心意氣と同じ。

一寸見本を擧ぐれば、

「イヤモウ文人交際も恐れるよ、此夏小石川へ行って駄法螺と澁つ茶でいぢめられた時の嘔吐を催ふした子。又此間は向島へ行つたら用が有るといふのに無理に引留められて三日三晩飲通して五臟六腑を酒浸しにしちまつた。昨日は昨日

文學界の通法

で根岸のやッて来て何でもかんでも交際へと云はれて到頭三崎座へ引摺られた。イヤハヤ樂隠居なら好からうが忙がしい身軀ぢやア少と閉口する。だが文人の何だか嬉しいよ。今年の月見に大勢呼んだ時にも牛込連中は茶番をする、根岸一まきは洒落の掛合をする、とんなに陽氣だつたか知れぬエ。君なんぞも少と交際をして見給へ、藝人さんぞと違つて飛んだ高尙で面白い事がある。第一世間に廣く名が賣れて欲得づくから云やア廣告料の出すに濟むといふもんだ。ソレ君も見たらう、此間の讀賣新聞に僕の新婚を祝した牛込の狂文が出てゐたらう。其中には古藤庵が十五六頁の「ドラマ」を作つて呉れると云ふはづだ。君なんぞは俗物だから鯉節を買つた方が好いといふかも知れんが、此お影で僕の名が後世に残るから有むたいよ。ホイ忘れた、是から小梅の忘年會に行かざるめエ。イヤハヤ何んの彼のと面倒で堪らぬ。」

此位の太平樂は以上の修行にて充分自由自在に吐く事を得べし。

文學の「通」と云はるゝには——小説を書けとか「ドラマ」を作れとか勸められるが其の面倒臭い事は嫌ひだ——と吹聴するの肝心にて、「已が筆を採れば

天下の文學相場が狂ふ」と云はぬ計りの容子を煙草の煙の中に見せるが奥の手あり。新聞雑誌の修行を充分積んで此奥の手を心得れば天晴文學の「通」と云はれて管待さるゝ事請合なり。

まかしおら文學者を罵るは無用なり。好き程に罵るは愛敬おれども餘りに手厳しく云ふ時は出世の蔓を失ふ恐れおれば謹むべし。苟にも文學者どあらんとする所存あるものにして先輩を罵るは禮を知らざるばかりか身の程を怠れたりといふべし。

豊川様のお狐を見よ。八方よりためつすがめつ、瞻視めた處で紛れもなき獸跡なれば尊ぶに足らぬは勿論なれど、之を稻荷の使はしめなりと思へば有がたがるの當然なり。今の文學大家が如何程にエラキかエラクなきかは別問題として兎も角も「アポルロ」神の權化なれば信心渴仰決して怠るべからず。況んや今乃文學大家は豊川様のお狐よりも更に大々恰惻なるに於てれや。

然れども猶は初心なるウブの文學通が輕卒に先進の諸大家を批判する事の却て錯誤に落ち易きを危みて爰に今の文學の偉大なるを告ぐべし

(1) 民友社派の平民文學の代表者なり。平民主義とは「Commonism」の義なれば此社の特色は往々「Angloism」と混同するにあり。平民文學とは必ずしも淺薄浮賤を意味するにあらねど、廣き範圍に説法するには勢ひ平凡にして入り易き思想と文字を以てせざるべからず。此故に此派の人は詩若くは哲學に耽る人を嘲つて高踏と呼び仙人と目す。深奥なる思想は白雲以上ありと笑はれ、玄妙なる言詞は蛇行文字なりと罵らる。誠に千古の卓見と云ふべし。

此派の文學大家の既に此卓見を抱懐するが故に其博宏なる學識を藏し其高深なる思想を曲げて慙々俗人に投じ易き文字を作る。其大深切心は我等凡々社會厚く感謝せざるべからず。若し又『十二文豪』其他を以て淺膚なりといふ不心得者あらば、其蒙を啓かしむるが爲に平民主義の凡俗主義に等しきを講釋して以て民友社擁護を勤むる事文學熱心家の義務といふべし。

(2) 早稲田派は發理想の本家本元なり。古人曰く一字の恩念るべからずと。『發理想』なる破天荒の學語を教へし此派の大恩は決してく忘るべからず。

早稲田派はシエークスビーヤの氏子なり。若し強將の下に弱卒あしといへる言

を信すればシエークスビーヤの氏子が中々の豪傑なる事は信せざらんと欲するも世に得べけんや。

早稲田派は勸工場文學のお祖師様なり。若し勸工場が明治の商業を發達せしものならんに早稲田の文學が今日の文界に長足の進歩を與へん事決して疑ふべからず。

早稲田派の「Tutorship」のお護符授與所なり。此お護符は定見もなく斷識もなく惣ての事物を判するに矛盾衝突撞着を生じて常に迷宮に彷徨する我々鈍物に安心立命を與ふる利益あれば、之を授與する早稲田派の大慈悲心は飽くまでも崇仰せざるべからず。無法なる感違ひをなし向ふ不見の議論をなす屁暮理窟家は此派の馬標「パラドックス隨分結構如來」を仰ぎ見てホットト息したるは更に疑ひなし。

兎も角早稲田派は明治文學の先覺なれば之を尊み奉つる事土でつくねた天神様に於けるが如く白木のお三寶の上に安置するは後進文學生の義務なりとす。殊に此派は能く見識を落として諸方に雜兵を派遣し我々に御注進を勤むる事近頃

御苦勞千萬なれば毎朝此泥の天神様にお水を供へる心をもて謝恩のお祈禱をなすの頗る妙なりといふへし。

(3) 女學雜誌社派と文學界派及び三類派は萬更他人にわらず。縦令兄弟にわらずとするも隣同士位の關係あるへし。其證據には益や彼岸に牡丹餅の取遣をするが如く三派の豪傑は互に文章の交換をなして各々機關雜誌に掲載す。此派の人は一般に基督教社會の大通なり。就中女學雜誌社派は能く自ら大通なる事を知るが故に恰もポロの宣言する如く謂々の辯を亦すをもて長處とす。此派を以てして頑迷ありと云ふは極めて非なり、此派の頑迷らしきは宗派心厚きに依る、(但し此宗派心とは例の "Secularism" の如き狹隘あるものにあらずといふ)。

此派は禁酒廢娼の大名家なり又教會論の大特色を有てり——一言すれば社會改良の大先生あり。獨り改良する必要ある社會を改良するに止まらずで改良せざるも毫末の差問なき社會をも改良せんとし、自然に改良されべき順序をも關はす人爲的に改良し得へき至能あるものと信じ、改良の方法若くは効果は更に研究せずして直ちに改良せんとする大決斷力を有し、社會に同情する如き面倒を避

けて強て自己に同一ならんしめるとする大勇氣凛々たる豪傑あり。

三類派も又中々の大通なり。此派の人爲の「クリード」を奉ずるを屑とせずして全然基督教と背反する大哲論を発表する勇氣を有てるほどの大通あり。之を嘲つて "Heaven Christian" など云ふものあれど三類派のさる烏辯なるものにあらずして今日最も進歩したる所謂 "Jumilichio daisy" を主張する大達眼者也。又此派の長處は法語語録様の佛書切抜にあり。佛書を切抜くは佛書を以て文語粹金と見做すにあらずして基督教徒の宏量を示すにあり、否な基督教徒と目されんより寧ろ一層進んで宗教哲學者と稱せられんとを希望するなり。誠に道に熱心なる篤學の君子といふべし。

三類派の人は教育上神學上文學上哲學上等の問題を嗽々するを以て天下の最も迂濶なるものとなし、其研究の功は捨置いて直ちに社會を救濟するを以て本願と心得るテモ勇ましき大 "Saviour" なり。

文學界には大評論家あり、大「ドラマ」作者あり、大叙情詩人あり、大人物論者あり、大俳諧學者あり、大六號活字記者あり、いづれも大々づくしの名士類

々々濟々たり。此故に世人は文學界に依て「ドラマ」なるものを悟り文學界に依て浪六が大小説家なるを知り文學界に依て歴史以外即ち歴史上の人物とは全く相違せる他の一休阿佛尼鳩掬校等を教えられたりき。文學界は兎に角異色、恰も鶯色に似たる大異色を有てり或人は評しぬ。何の事なるやを知らず。

(4) 硯友社派は大々通人の大一座なり。古今無比の大自然を畜へたる頗るエラキ御連中様なり。此派の秀拔敏明なるは既に定評あれば賁語を費すを要せず。

(5) 朝日新聞社派一名舊根岸黨は今日の老練株なれば我等乳臭の徒は之を奉つて拜伏するのみ。

(6) 柵草紙派は學者肌なれば我々凡人は之を仰望して其堂奥に入る能はず。此派の本尊様は藥師或は不動の如く澤山の童子を携帶せり。此童子はいろくさまさまなれども皆是れ見事管秀才のお身代となり得べき玉簾の中の御育ちばかりなり。

此派は派と名くべきほどのものにあらずして實は國外漁史一人といふて可なり。他の者は恰も腰弱き大臣が衰龍の下に隠れて其位に居る如く國外の光明の下に

コソ、名を賣るに過ぎず。國外先生は日本のハルトマンなり國外先生は日本第一の審美哲學者なり國外先生は日本第一の物識なり。國外先生は「權」を辨するに四百二百行餘を費し芝罘園を退治するに前後二十餘頁を無駄にせしはどの大家也。若し一言の粗忽をして先生の御機嫌を損する事あれば忽ち二三十頁のお世話を掛くる恐あればゆめ謹んで決して危きに近寄るべからず。

(7) 博文館派は八宗兼學の大々智識のお揃ひなり。

此外に正太夫といふハ子男なり學海居士といふハ第一番の老人なりと知らば充分澤山なり。

早譯りする爲め之を政黨に譬ふれば早稻田派は自由黨なり、民友社派は改進黨なり、舊根岸派は國民協會なり、政教社派は同盟俱樂部なり、柵草紙派ハ國家學會なり、其他は大抵壯士の連中なりと心得べし。勿論壯士といふも放浪なる日雇取のみにあらずして、中にハ役者もあり「おッペケ」節の名人もある事と承知すべし。今に大政事家になれると思ふハ壯士の常にして浪人的文學者も決して之に異らず。先づ此位を合点すれば恐らくヒケを取る事なかるべし。

新聞雑誌を讀む事は必ず「怠る勿れ。縦令面白からざるも、否な面白くなきは勿論なれども面白くなきを辛抱して讀むの文學通の修行法なり。面白くなしどて退くる様なる不心得にては所詮出世は覺束なし。

大家の名を覚え込みて後は廣告だけ見れば足れり。春陽堂或は博文館の新刊物の繪双紙店の店先にて表紙だけを瞥と見て置くべし。

此繪双紙店のメ、キといふ事は文學通となる一の修行なり。誰の小説は面白いとか何の雑誌は賣れるとかいふ當世文學の評判を繪双紙店の主人より傳習受くるも極めて早道なるべし。

先づ此邊の調子具合萬端心得るが文學者となる第一の階段なり。若し斯く下らぬ事はいやだといふ見識がなければ逆も今日の文學者になれぬといふわきらぬるがよし。飽くまでも下らなくなる辛抱なくんば如何で雷名轟き渡る文學者となるを得べき。何事にも辛抱が肝心なれば随分クワイなく下らなくなるが當世文學者となる第一の秘訣あり、既に文學の通とやらんと欲するもの豈是れだけの辛抱なくして可ならんや。

斯くて人既に略ぼ今日の文學に通じ早稲田文學の文界現象を讀みて大勢を揣摩するを得るほどの大觀測者となれば果して自己が……

### 第二 文學者となり得る資格

文學者となり得る資格

文學者の風貌

を有するや否やを究めざるべからず。

(1) 先づ身軀上より云へば文學者は成るべく美丈夫、寧ろ美少年たらざるべからず。稀にはポーブの如き不具者もあれど恐らく無意氣の骨頂とも云ふべきスウキフトすら若き時は随分美しくしかりしと聞けば文學者の到底美しくしからざるべからず。夫故に若し美しくしからざる時は精々身嗜みを能くして例へば「ボマドンヌール」或は「ボスタ、マツク」の類を使用する心掛あるべし。

詩人バイロン曾て一佳人に思を寄せし時「醜男め、潜上の沙汰なり」と罵られ

て厭世の芽を萌せしといふ。這箇大詩人既に一瑣言に憤ふる事斯くの如し。「醜

醜男は禁物なり

男」は文學者に取りては能くくの禁物といふべし。但し美男子なりとて已惚るゝは極めて智慧のなき咄なれば口先では「己の様な彦徳の二代目が……」と際立ッて力を入れていふも文里然として面白し。尤も素振では何處までもハルの肝心なり。

ウオルツウオルスは眉目露然として自ら仁厚篤信の風あり。シルレルは雄髮陸準英姿颯爽として古豪傑の容を具ふ。カアライルは蓬頭突鬢常に閑黙鬱結して深く思を潜めるもの、如し。ゲーテは魁岸奇偉其強硬なる腦蓋骨以て宇宙を支ふるに力餘りあるを示す。然れども是等の風貌を備ふるものは今の文學界には不向にして賣口思はしからず。飽くまでも開麗清雅にして柔情弱態を極めたる者ならざれば不可なり。一見洒落なる十返舎一九或は傲岸眉宇の間に滔るゝ曲亭馬琴に肖たらんよりは寧ろ艶媚妖嬈婦人に近き粹で高尚で深切らしい唐琴屋丹次郎先生に髣髴たるを以て合格なりとす。

となす。

怠慢はゴールドスミツスの如くなるべし。例へば此可憐なるノオルの親戚に泣いて算段せし亞米利加行の旅費を賭博に抛棄せし程に怠慢なれば面白し。式亭三馬が無理遣に本屋の二階に上げられて著作を強制せられし如く怠慢なれば天晴大家の資格ありといふべし。

今の大家が前取の原稿料を飲棄てにし或は一月の義務を三日の劇評で済ますを罵る者まゝあれども、是れ怠慢が文學家の通有性たるいはれ因縁を知らざる僻言にして是等の大先生は畢竟怠慢の秘奥を搜り得たるならん歟。

無精はゴンチャロフの域に達するをよしとす。渠の嘗て仰向けに長椅子に倒れ扁額を釣るせし糸の將に断れんとするを瞻視めつゝありしかば傍なる人痛く驚きて君が頭上に墜ち來らんとするを避けずやと注意せしにゴンチャロフは平然として答ふらく否な驚く勿れ余は其角度より測定して余が頭を去る凡そ一尺の地に落つるを知ると。

ウキルキイ、コリンズも中々の無精者にして其書齋は旁午狼籍して塵積る事常に



一寸なりしといふ。我が國の小野蘭山の如きも無双の無精家にして古典珍籍羅列する中に瘡藥奇品碎玉怪石より古書畫古器玩物標本洋船諸物等雜然として殆んど足を容るゝの地を餘さず僅に尺寸の間に身を置きて微醜低唱以て樂みしと聞く。

是等の無精は鳥渡稽古して出来る無精にあらず。且つ當世仕込の文學者は至極清潔好きの衛生家なれば斯くの如き無精は以ての外なり。然れども文學者の一分として無精を極めざれば協はぬ故、『イヤモウ面倒臭くて』位の口癖を附けるがよし。二層奮發して京傳の虎子を坐右に置きし猿真似をせば其れこそ一足飛に大々家なりと其處ら中に評判噴々たるべし。

放浪も亦文學者の一特性なり。サヴエージ或はゴールドスミツスの如き傑才すら此二點を矯正する事を得ずして生涯を敢果なく終りたりき。就中サヴエージが生涯は悲酸中の悲酸にして之を借財の歴史といふも可なるほどに憐れなれど渠とても人間の現世及び未來の福利を得るに必要なるは至善なる事を知らざるにあらず。しかも最も道德眞實若くは正義を説くこと頗る熱心なりしがたゞ文士の

通有性たる放浪病に罹りて終に首も廻らぬ程の大患に陥りしなりき。

今の文學界にのジョソソンの如き世話燒もなければ、是等の連中の放浪を學べば忽ち棄てられて大失策を仕出かす事勿論なれども、或は友人の所有品を借りて返済を怠り或は下宿屋の賄料を滞らせ或は小買物の拂を水に流すなども亦妙なりといふべし。

まかしながら放浪に陥るほど磊落あるは今の文學界には乏しく、却て放浪に過ぎたるは多少嫌はるゝ氣味合あるが故に諸事愛敬を專一とする當世には逆も相應せぬ情性と云ふべし。

第四に文學者が無頓着とは寛厚なるが故に、若くは恬淡あるが爲に無頓着なるにわらずして一ト口に云へば無神經なるが故に無頓着なる也。

文學者が文學なるものゝ外更に頓着せぬは可なり。然れども文學に執着する人の文學に無頓着なるは極めて妙ならずや。之が即ち文學者となるに中々の思案を要す——といふは今の文學者志願の者は本と文學に執着するにわらずして唯文學執心を口にすればかりなれば其心の奥底に探を入れば意想外に文學に無

頓着なるを知るべし。例へば文學の定義或は文學の歴史などは一向無頓着にして如何有らうと關はず、隨て文學上の議論には少しも注意する事なくして一向平氣あるは局外にて迎も想像しかねるほどの無頓着なり。

衣服調度等惣ての嗜に無頓着なるハ英國のアン時代の文學者の普通性なりしが日本の今の文學界にては文明開化のお影にて古への襤褸的は到底見るを得ずして何れも美裝盛服の貴公子なり。然れども『無頓着』が文學者に缺べからざる情性なるを知つて『一向に頓着なしサ』といふ套語を八方に振播く事少しも珍らしからず。

惣じて文學者は不規則にして絶えて秩序を守らざるを尊とします。秩序を守るは俗物なり、横の物を縦とあさす百で買つた馬の如くハソリハ、として怠惰者で横着者で且つツウハ、しきを以て神懷虚恬清曠飄逸の大風流人といふ也。

今の文學者の大半ハ大通人に屬するをもて『秩序』——諸事萬事キチンとして姉妹をならべし如き『秩序』の奴隷となれば幸ひにも或は不幸にも自然天然と

此不規則的生活に遠し。然るに不思議なるは、(文學者として)は當り前かも知れぬ(姉妹的秩序を守るに適したる文學者が無暗に不規則的大風流人を氣取り、如何しても摸擬し能はざる時は左も大風流人らしく、『昨夜十時頃ふツと思立つて傳通院の墓場の中を歩行いた』とか、或は『何心なく新橋迄行くとツイふら〜』と瀛車に乗て鴨立澤に行つた)とか、鳥渡聞くと狂人の沙汰らしく思はれる事をいふ癖をつける。文學執心の輩はこゝら能く飲込むべし。

哲學者をもて『智』の精靈とすれば文學者は『情』の怪物にして通となるも風流となるも根底に蟠まる道理あるにあらざして何だか『——なツて見たい』といふ位の謀叛氣よりフ、フ、と浮氣になるの何寄の證據なり。夫故後進の文學熱心家も一切の『智』の作用は悉く拋棄して何事を爲すにも『情』の命する處唯々として是れ避ひ其奴隷となるをもて名譽とす。從て後日に惡結果を生じ來る時は自己の『情』に盲從せし過失あるを忘れて慚悔怨恨の烟を何の罪もなき外界に吐き散らすこと少からず。昔しトーマス・ナッシュといふ英阿呆の『失意の操觚者の愁訴』と題せし詩を作つて八方に當りちらし此圓満無垢なる社會を

文學者より得べき歴史

極悪無道鬼魅魍魎の魔窟とあしぬ。今の文學界にもまゝ此ナツシユに似たる泣男多くして我が識量の狹隘なるを一生懸命に吹聴する事さりとて面白おかしき限り予がし。一面には賊放落の氣象を見せびらかして一面には綿愛纏哀の泣言を洩す事古今稀有の痴珍ブ、いゝならずや。

是れまかしならん文學者の何者たるを知らざる癖言にして此「バラドキシカル」が文學者をして鬼神を泣かしむる大文字を作らしむるものといふべし。恐らくカウレイの如き大矛盾の生涯を送りたる事蹟を讀まば偶さかの小矛盾に喫驚する事の却て世間に狭さを證明するに似たるを悟らん。

情は玄陰に隨て滯り心は回臆と與に俱にす、文學志願者は浮草のうねくどして昨日は東今日は西とあちらこちら岸邊に漂ふ如くフウワリとしたる情性の典型の中に自己を鑄入するをもて肝要なりとす。

(c) 文學者となり得る経験は、

(1) 小説好きなりし事

(2) 學校にて怠惰者の名を博せし事

- (3) 芝居ゴツゴツ火事ゴツゴツに名譽ありし事
- (4) 曾て女と男と豆入りの浮名を立てられし事
- (5) 借馬楊弓位の武術を鍛錬せし事
- (6) 少くも一度の戀煩を爲せし事
- (7) 一度位はアツサリと女に振られし事
- (8) 酒間の取持にもてはやされし事
- (9) 点取俳諧に功者なりし事
- (10) 歌骨牌或は「トランプ」に名人なりし事
- (11) 清樂若くは謡曲に評判ありし事
- (12) 大磯興津等の海水浴場或は熱海箱根等の湯治場に通なりし事
- 等皆必要條件なり(文學者となりし後すらも)。
- 之を概括すれば文學者となるには無邪氣にして且つタワいなき経験あれば足れりとなす。
- 一例を擧ぐれば、

五才にして草双紙をナスリ、八才にして蜘蛛の魔法を遣ひ、十才にして踏臺に跨り拂塵を揮て一の谷の狂言を臺處に演じ、十三歳にして初て艶書を認め、十五歳にして楊弓場にシケ込み、十七歳にして戀煩に呻吟し、十八歳にして首尾よく戀に失敗し、十九歳にして學校に落第し、二十歳にして懇親會の席上にて酌人より寫眞を貰ひ受け其お禮として名字讀込みの都々一を雑誌に投じ、二十一歳にして妄想をテツチあげた才子佳人小説を作り初めて大家となる。先づ普通一遍の履歴書は大抵こんなものにて澤山なり。兎に角幼少の時神童とまで云はれざるも有望をもて目ざるゝは必し恰憫ならざるべからず。言換ゆれば鼻先の事に小賢しく振舞ふて買被らるゝほどに猿利根なるを最も妙なりとす。シルレルは三才の時電光の閃々たるを見て『母よ何ぞ其眸々として美しくしきや』と云ひし事ありと聞けど、斯様なる小間しやくれた事實は無きも更に差支なし。唯むかしの名僧智識が四五才にして出家得道の志ありしが如く天智天皇を詣んじ神稻水滸傳に現を抜かせば文學者の幼時としては既に吞牛の象ありといふを得べし。

パスカルは幼時「ユークリッド」の解説に時を潰しドストエーフスキイは森林に徘徊し植物採集に餘念なかりしといふ。又我が國現時の文學者にして今は跡を俗界の中に踏踏する某氏は一度陸軍大將となりて東亞に威武を張らん事を欲し某氏は常に天象を窺つて更の關はるを念れしと聞く。然れども是等は文學者としては餘りに野暮に過ぎて妙ならず。寧ろスコットが競争者たる小兒の常に胴衣の鈕鈕を拵りながら質問に答ふるを見て潜かに其鈕鈕を斷つて狼狽せしめ終に勝利を得たりといふ罪なき逸事の面白さに如かざるなり。天才といふ者は必履歴の眞面目ならざるはなし。此故に眞面目ならざる履歴を有する者は天才らしくて人の聞えもよし、(Converse in nob. line) など云ふべからず惣ての論理は文學者に取りては禁物なり。文學者とならんとするものはこゝを能く合點して——若し自己の履歴が餘りに平凡なれば、成るべく眞面目に遠き事實を製造して先進大家の門に入る時面白おかしく之を吹聴すべし。『私は小供の時から普通の人は變りまして……』といふ咄し具合なり。チッケンスの如きラムの如き皆幼時より艱難辛苦を試めしものなれども、是は

誠にお氣の毒さまの事にて今の文學界に乘出すには却て乳媪日傘のお坊様育ちの方が蟲氣がなくてア、ド、カ、かくて評判は一層好し。艱難辛苦をせざるが故に浮世の味を知らずと罵る迂濶者おれを全し論法を用ゆればお坊様育ちを知らざる貧乏人は美衣美食の上等生活に暗しといふを得べく畢竟どちらにしても全し事なれば寧ろ不自由せぬ丈けが結構なるべし。此の「遊んで」の「遊」は「遊」の遺跡を尋ね「君は今」のお名號を頂戴し若くは面白くもなき基督教を信心し讚美歌を唄つて束髪を斷るに苦辛するは皆強ちに色道修行の爲のみにあらずして世態學研究の一端ともなりぬべければなり。

俗人の俗眼より見て惣てかいなで「道樂」なりと斥けるものは文學的「タドボ」ル」に取りては是非とも喰べて見ねばならぬ養分なり。不道德ありといふ「通」の通たる所以を知らざる言草にして一度は踏んで見るべき檜舞臺を等閑にするは以ての外なりといふべし。

名妓おにがし曰へらく、此廓に來て色男となれね程の者が社會に出て勢力を得

らるゝものですかト。天晴なる金言なる哉。文學界に乘出して勢力を得んとする野心おつて「此廓」に遊ばざる者は大馬鹿の素頂邊にあらすや。又若し「此廓」に遊んで随分色男ありと自認し得る程の者は一篇の小説を作らざるも既に大文學者なりと自惚れて少しも差岡なし。

既に「此廓」に遊ぶも差岡なしとすれば束髪美人雲の如く集まれる教會に參列するも何ぞ碍ぐる事あるべき。會堂は聖典を講じ福音を傳へ惣ての人の罪を悔改める最も清く最も嚴かなる正しき場なれば其神聖なる空氣に觸れ主イエスキリストの恩と神の愛と聖靈の交際すべの聖徒と供に在らん事を願ふて明君萬彩雲に乗じて紫皇の殿に行くの思あるべし。文學志願者の教會堂に行くは畢竟此敬虔の念を養ふ爲なれば恐らく此一點には純潔外道も難を入るゝの地なかるべし。然れども晴雷の前に頓首して阿香に流し目を遣ひ玉帝の目を窺んで瑤姫の手を握らんとするは文學者が義理にも街ふべき特性なれば此清き會堂に列して束髪結び方に氣を附けざらんと欲するも豈得べけんや。之を以て直ちに其心を汚れたりと爲す者あらば恐らく朽木の窩より生れたる無類の唐變木と

いふべし。  
 兎にも角にも近頃の實際派と云ふは社会の活寫具なれば文學者となるには勢ひ  
 社会を知らざるべからず。社会を知るには随分諸方に出入せざるべからず。而  
 して我が興味を有たざるものは自然觀察の行届かぬがちなれば最も大なる興味  
 を有つ婦人社会を一心に研究する當時の文學志願者の心掛は極めて感心ある事  
 ならずや。若し之を非なりと云はば酒店が試酒をなし菓子屋が餡を嘗めるも勿  
 論排斥せざるべからず。文學志願者の斯くの如き木訥漢の言を顧みず一心に勉  
 強して上は鹿鳴館の貴婦人より下は寸燐の箱を張る内職女に到る迄目の届くだ  
 けはあらゆる婦人社会を研究すべし、文學界の婦人科専門も又大に必要のもの  
 なればあり。  
 加之實地踏んで見ぬこと分らぬものなれば一度の戀煩をしたり惚れた女に  
 振られたりする経験も極めて必要なり。餘り度々に過ぐる時は多少男を廢る恐  
 めれば二三度位にして止めすべし。まかし世の俗人原と違ひ飽くまでも磊落  
 たるが即ち文學者あれば之を大業に披露するの好し。随分三度女に振附けられ

て世を味氣なく思ふなど云ふ逸事はお持向なれば影にて障さるゝほどに吹聴す  
 るが働きなり。バイロンやシヨオペンハウエルの如き大豪傑が厭世となつたは  
 一ツには女が原因なりと云へば女に振られて厭世となるは文學者一代に特筆す  
 べき大出来といふべし。  
 男女の戀を知らざる者を叱せぬ奴と斥けし兼好は流石に大文學者なり。傲岸不  
 羈一世を睥睨せしスウキフトすらステルラが愁黛啼紅に魂を消したは人情の不  
 思議な處あり。文學者及び文學志願者は思切て女に惚れるべし女にデレるべし。  
 振附けられても關はずに惚れるべし。振付けらるゝを恐るゝは俗人にして平氣  
 の平三で落語家の所謂貸家を索す氣で惚れる男らしくて好し、十人を口説い  
 て一人承知すれば結局一割の得にして金利廉き今日にては此上もなき儲物なら  
 ずや。

グレイは生涯獨居して終りし人なり。曾て若き婦人と同住して共に讀書し共に  
 食事して殆んど夫妻の觀ありしが終に結婚せずして勿論清淨に暮したりといふ。  
 パスカルにも較や似たる履歴ありて其結果はパスカル全集中の有名なる戀愛論

となりなき。然れども是等は餘りに淡泊過ぎて「情」の奴隸たる文學者には不相應なりといふべし。文學志願者が學ぶべきは寧ろ此にあらざして「戀」爲永春水が理想の「戀」にありとす。「情」の分量の多少は以て文學者の價值を下するに足る。而して此「情」の分量を示すの法は唯一つの法——女に惚れる一法あるのみ。

文學志願者は女に惚れるべし。若し夫れ反對に女に惚れらるゝに到つては恰も上帝より文學卒業證書を賜はるに全じければ十倍二十倍大に之を廣告する事極めて可なり。

何處までも文學志願者は下らなく、マシなく子供らしき期間染みたる履歴を作るを要す。少時に於ける歴史は飽くまでも婦人と關係を結ばざるべからず、探偵小説家が所謂「大なる犯罪の下には婦人あり」と云へる常套語を借りて「大なる文學者の履歴には必ず婦人あり」と云ふを得べし。

(d)最後に、文學者とならんと欲するに幾何の學識を要すべきや。兎も角も文學者と云へば學者の一なるべければ此智識の分量こそ文學者の關守

文學者には學者にあらず

に喰はせる最大の竜草なるが如し。然るに文學者が更に學者ならぬころ中々に可笑しき限りなれ、例へば泣蟲とい

も眞の蟲族にあらざるが如くに。文學者は詩人なり、美術の人なり、何ぞ深宏該博なる智識を要せんや。たゞ文

字、云の字ツナギの類に長すれば則ち可なり。特に非常なる智識の必要ある如く感ずるは畢竟文字の何物たるを審かにせずして生中に今の文學者を學者と

誤認すればあり。文學は豈哲學と全じからんや。否な、哲學すら偏に考究を重んじて讀書を尊ばざるにあらざるや。

文學の本尊シエークスビーヤを見よ。渠は "Small Latin and less Greek" と嘲罵せられたりき。然れども斯く渠を嘲りし人よりは遙に勝れたる名譽を得て今に於

て隨喜渴仰せらるゝは何故ぞ。智識は文學者に取っては車夫馬丁の口髯の如し、生えしどて終に何の役に立たず。

文學者が要する智識は小學科の程度にて澤山なり。博物生理物理等の科學に到つては猶ほ少しく進み過ぎたるの感あり。惣じて學問——取別け科學上の智識

シエークスビーヤの無學

知識は詩人腐らす

は多く有れば有るほど詩腸を腐らすと大マカウレイは説法したるを以て、今の  
文學者は學問を見る事山犬の如く敬して遠ざくるを常とす。見ずや、三馬の源  
氏物語の講釋を唾棄したれども其皮肉に入るの文字は之が爲に價値を減せず馬  
琴は却て「ベダントリイ」の爲に幾分か其見識を下落したり。文學者に學問あ  
りて何かせん、文學者は無學文盲を以て尊とせしむるなり。

無學者  
デフオー

「ロビンソン、クルソー」の著者デフオーは曾てスウキフトより「其名は冷  
れたれど或る無學者……」云々と冷罵せられし男なるが、後年其不平を洩して  
云へらく、「余は曾て當時の風流社會より無學者ありと嘲られし一記者を訪ひし  
に、恰も渠は西班牙文にて著りされしプロオの地理書よりボリスセニース河の  
紀事を翻譯しつゝありき。其のち余は渠が羅甸文より譯せし彗星論を讀みて其  
古語に熟通するを知りぬ。斯くて暫時の中に渠が羅甸西班牙伊太利希臘及び佛  
蘭西の五國語に通曉するを知りたれども——猶ほ渠は學者にあらざりき。科學  
上の智識を云へば余は曾て渠が天躰の運行、行星の距離大小循環、就中彗星の  
性質等を談するを聴きたることあり、然れども渠は學者にあらざりと云ふ。若し

無學文盲  
色學者の本

夫れ地理と歴史の造詣を問はば渠は其指頭に殆んど全世界を集めしかの如く何  
れの都市山川を説くも人をして其地に生れたるやの感あらしむる程極めて精細  
に其製造商業風土人情より之に伴ふ歴史を盡さざるはなし。然るに他は此人を  
見るに學者を以てせず。抑も學者と呼べる奇怪の一物の何ぞ。余は大に感はざ  
るを得ず。五國の言語に熟し天文地理歴史に精通し多くの科學上の智識に富め  
る事斯くの如くにして而して人は猶ほ斥けて學者ならずと云ふ」云々。  
スウキフトは滿身冷罵冷嘲をもて溢るる男なれば此デフオーを無學なりと云ひ  
しは當然にしてデフオーは愚痴を覆すだけ野暮といふべし。  
我が國今日の文學者であるに無學文盲にて宜しければ、デフオーの如き無學  
文盲にては餘りに堅過ぎて却て容れられざるべし。  
ミルトンは政治に宗教に侃々諤々少しも假借する事無かりし程學殖造詣頗る深  
宏なりき。ゲーテは物理に動物に植物に潛心苦慮して飽までも智識を貪りぬ。  
然れども此二人は共に文學界の不具者なれば「健全なる文學者」の標本とし見  
るべきものにあらず、何處までも無學文盲なるが文學者の本色にして無學文盲



なればこそ仕方なくも、文學者となるなれ、文學者豈に澤山なる智識を要せんや。

チッケンスは少時よりラベレイ或はゴールドスミスの作を愛好せし外絶えて攻學研究の跡なし。然れども十九世紀のシェークスピアとして名聲を歐米に馳せたる所以何ぞ。文學者の重んずる處自ら有るあり、學問智識の如きハ山車人形の造花の如く有るも無きも大なる關係あるものにあらず。

此故に當世の文學者たらんとするには深宏該博なる智識斷じて無用あり。淡泊と萬事を飲込んで何事も早合點で済まし絶えて研究を爲さざるを以て第一の秘訣となす。

今試に學問の程度を示さば、

(1) 國文學并に歌學

- (a) 枕草子
- (b) 徒然草
- (c) 今昔物語
- (d) 太平記
- (e) 曾我物語
- (f) 源平盛衰記
- (g) 古今集
- (h) 新古今集

先づ此邊を博文館編輯の文學全書にたよりて二三ヶ處拾ひ讀すれば好し。『源氏物語』は大部なれば拾ひ讀だけでも容易ならず『忍草』にて埒明けるを秘訣とすれども之も面倒なれば『田舎源氏』にて大勢の趣向を推量し若し人に聞かれば『ありやアアの……まア今の實際派小説の様なもの……實は詰らない下らんもんでせう』位の返答をすべし。聞く人も讀まぬ人あれば大抵な駄説を吐きしとして反駁さるハ心配は更になし。

『太平記』其他は實録物を讀むと全くと面白ければ忽ち讀み終るべし、文章などには少しも氣が付かざる中に。たゞし雄大莊重なる文學ありと思へばよし。俊基朝臣東下りの一節は小學校の生徒も讀んずる名文あれば、苟にも一世の文學者たるべき豪傑は一心に負けぬ氣になりて誦讀せざれば耻辱といふべし。

國文の文法は數限りなく殊に諸説紛々として定まらざれば之を攻究するは閑澁しなり。況んや今の國文の大先生方にすら充分理解せらるる

少なければ落合先生の『日本文典』位にて澤山なり。又平生『桐草紙』或『文海』等を精讀して『ぬ』『たりき』『あはれ』『あらず』等の用法に注意する心掛肝腎なり。惣じて今の文界に勢力ある文牒は餘りに西洋染みて不熟なる造語をもて溢るゝばかりあれば、少しく古文をひねくりて雅言を交へ成べく廻りくどき文字を作れば忽ち國文家なりともてはやさるゝ事受合也。近き例が國文を唾棄せし無學文盲の三馬すら萬葉に擬へし戯歌に巧みなりしをもて見れば國文家として今の文界に立つ事既に難からず、況んや他の死文法を守る事を爲さずして日本文章の粹を取る開進的國文家となるは眞に飯前の業に過ぎず。歌學は『古今集』『新古今集』を巾箱本となし兼ねて『桐草紙』を油断なく讀めば一寸した咄は出来る。縣居の翁は何うだとか桂園派の斯うだとか云ふ位の事は自然と解る様にあるべし。勿論純粹の歌人となるには自ら他に便利法あれど爰には云はず。廣き意味の文學者としての修養は之にて澤山なり。歌道奥の手の秘本として珍藏すべきは佐々木

漢文學

(2) 漢文學并に漢詩

- (a) 蒙求 (b) 十八史略 (c) 文章軌範
- (d) 唐詩選 (e) 論語 (f) 聯珠詩格

信綱先生の『歌之琴』落合直文先生の『新撰歌典』等其外博文館本數種とす。  
是れだけにても大跡は解るべし。近頃は『漢學速成』と云へる調査なるもの出来たれば漢學者となるは最も容易なり。又科用書の何れも益友社出版の講義本たるべき事。  
漢學者とならんとすれば多少支那哲學を心得ざるべからず。支那哲學と云へば大層難かしさうなれど老子と莊子だけに澤山なり。莊子は内篇だけが『早稲田文學』にあれば之を熟讀すればよし。實に讀まないでもよし。何でも老子や莊子は雲を攫む様な途方もない事を書いてあると思へば充分濟む。例へば中西梅花先生の大の老莊學者であるが故に『梅花詩集』は少しも譯が分らぬ。譯の分らぬものが老莊なりと

(3) 外國文學

心得ればよし。  
 漢學者と目せらるゝには難かしき字をひねる事必要なり。例へば尋常の操觚者が『陶朱猗頓の富』といふべきを『富の陶白に好しく貫は程羅より巨なり』といひ、『驕る者久しからず』といふべきを『鎖落溼沈の速かすして來り池館丘隴は倏忽に滅す』といふ如く惣て日常の言語にて済む事を故らに難かしく畫の多き字を銜ふが漢學的操觚者のエラキ處なり。こゝらの骨を随分辨ふべし。  
 参考書として珍蔵すべきは『圓機活法』なり、近頃新鐫の銅板摺一帙あれば忽ち大漢學先生となるを得べし。『佩文韻府』『五車韻瑞』等も必要なれど是等の大家となつて後の心掛にして修行中のものにあらず。  
 是は全く知らざるも差聞なし。當時の文學者志願の輩にして外國文學の知識を有たば、鬼に鐵棒といふよりは寧ろ蟻に燈心の觀あるべし、加之愛國心厚き我が文學界にては夷狄の文學に降參する卑劣者なく

萬一にも外國文學を讚歎する者あれば日本に大文學あるを知らざる白痴と云はるゝ恐れあるが故に、全く知らざるを以て却て幸ひなりとす。たゞ然しなむら「ランプ」「マッチ」等の普通語となり今日までは皆無盲目なるも不便なれば『七ツ伊呂波』的英語を知る必要あり。例へば詩歌を「ポエトリ」、小説を「ノベル」、政治を「ポリチク」といふ位を心得れば充分なり。若し此上を貪つて大學者とからんとすればブリックリンの『語學獨家内』を関にあかして勉強すべし。又磯部彌一郎先生の『英文學講義録』中の日本文の解釋だけを辛抱して讀めばエライ學者となる事勿論なり。  
 座右に備ふべきは、

- (a) ナショナル第五讀本
- (b) スウイントン氏英文學
- (c) モオレイ "Great Authors."
- (d) ルートレッツ板の六「ペンス」小説二三冊

(e) キヤツセル板の國民文庫二三冊

(f) シエークスビーヤ全集 (イロイアライブラリ)

此外に亞米利加の "Detective series" 二三冊の義理にも備へざるべからず。是等の書物は勿論讀むが爲に備ふにあらざして外國文學に通ずる文學者の牀面として備ふべき也。

次に外國文學者の名を覺ゆる事必要なり。先づ英國にては、

- (1) デッケンス (2) サツカレイ
- (3) リットン (4) ビイコンスフキールド
- (5) マカウレイ (6) カアライル

佛國にては、

- (1) ヴオラ (2) ドオテ
- (3) ユーゴー

獨乙にては、

- (1) ゲーテ (2) シルレル

(3) レツシング  
魯西亞にては、

- (1) トルストイ (2) ツルゲニエフ

(3) ドストエフスキイ

亞米利加にては、

- (1) アーヴキング (2) エメルソン

(3) ロングフエロオ

是れだけの名を飲込んで自在に濫用する勇氣を養成し、例へば十二文豪とか十三文豪とかの目論見あれば、縦令著作は魯か曾て其傳紀の一篇だに讀まざるも直ちに一人を選んで其傳を編む志を起さしむるはど頭腦に浸染せしむべし。さる故に平生使用する時は「デッケンス」と「サツカレイ」をト讀みに「デッケンサカレイ」と呼びユーゴーが宗教の改革者でアーヴキングが大哲學者である位の誤解は大負けにすべし。要するに外國文學の智識は今の大家壇に登第する第一の要件にあ

(4) 歴史學

并に傳紀は也。

所謂硬文學者となるには是非とも研究せざるべからず。又強ち硬文學者とならざるも多少此心得なければ讀賣新聞の歴史小説を書いて百圓の一等賞をせしめ、或る事協はねば平生よりの心掛肝腎あり。今の歴史家若くは人物評論家の資格を得るには勿論大なる知識を要せず、先づ次の書物位を讀めば可也。

(a) 日本外史 (b) 國史略 (c) 讀史餘論

(d) 太平記 (e) 日本開化小史 (f) 常山紀談

(g) 藩翰譜 (h) 軍紀實錄物いろく

是れだけにて、『足利尊氏論』位は出来る。又論文の出来不出来は兎も角も事實を羅列するだけの手際は請合也。

史學上の考證を爲すには井澤長秀の『俗説辨』でもあれば威張つたもの也。古實を知るには貞丈の『雜記』或は『四季冊』の類を涉れば恐

らく負を取る事あらざるべし。

歴史の参考として是非とも机上に置かねばならぬ、

(a) 萬國歴史全書 (b) 日本歴史評林

(c) 世界百傑傳 (d) 日本百傑傳

何れも博文館出版されれば其効益無比なる事疑ひなし。

西洋の智識を得んとするにはスウキントンの萬國史にて澤山なり。之

は教科書なれば幾分がの見識を街ふ者は博文館の歴史に依るを便宜と

す。全ヒ教科書にてもフキツシャヤ若くハスミツスの萬國史或はマツ

カーシイ、マルチノウ等の近世史なれば申分なけれど萬事速成を尊ぶ

今の世の中にはマウンダトの『歴史寶圖』を珍重するが一倍利方なり

とす。人物評論文にはマガレノの翻譯文數多ければ飽くまでも原文

は玉の如きもの也と想像して讀むがよし。民友社は人物評の本家元

なれば其社の出版物は惣て斯道の三墳五典ありと心得て研究意りある

べからず。

(5) 徳川文學

(a) 先哲叢談 并續篇 (b) 先哲像傳  
 (c) 俳家奇人談 并續篇 (d) 戲作者小傳  
 (e) 戲作者六家撰 (f) 物之本作者部類  
 (g) 徳川時代文學の現象 (關根正直先生講述) (早稻田文學にあり)  
 (h) 戲曲叢書 (武蔵屋翻刻の活板淨瑠璃本)  
 (i) 帝國文庫 (博文館翻刻)

右の外近頃は活板本澤山有れば勉強するに都合よし。惣じて徳川文學の中心は西鶴西燕近松の三人なればその心組にて研究するを法則とす。然れども此三人を研究する必要は更になし。たゞ此三人が中心なりと心得てかさへすれば可なり。

平安朝時代或は鎌倉時代は共に文學の盛運を効したれど徳川時代の如く難駁にして廣大なるはなし。此故は少く徳川時代の文學に精しければ忽ち堂々たる大文學者として一方に屹立するを得。櫻庭澁村先生

或は幸堂得知先生の當世の老大家として尊崇せらるるとは共に徳川文學の精神を極めたるが爲にして其小説に精妙なるは蓋し二の次なるべし。今若し文學志願の人にして此愈高き聲名を貪らんとすれば一心に辛抱して八文字屋本黄表紙蒔本等を讀むべし。是等の下らなきは云ふ迄もなけれど大家となる爲に此位の辛抱勿論覺悟あつて然るべし。惣て珍本あるものは世に管待されざるが故に埋歿せしなれば傑出の作にあらざるは云ふまでもなし。然るに此下らなき珍本を涉獵せずば徳川文學の黒人と云はれざるは難義至極なれど根限り出精して反古調をするが此派の極意あり 例へば『風流伽羅人形』とでもいふ延寶板の零本があれば本文の面白味を吟味せず直ちに机上に安置して頓首再拜するほどの心掛を養育するが専一なりと知るべし。

俳諧を研究するには三森幹雄先生の『俳諧自在法』など屈竟なるべし。参考書には『俳諧五百題』或は『俳諧一萬集』等宜しかるべし。『七部大集』は所藏せざれば面目に關はるをもて必ず本箱に収むべし。『七部大

鏡』を巾箱本とすれば、其れこそ、大學者を極め、込みて、硯友社の、大宗匠、連を對手に取る事も出来る。中々難かしさうで意外に容易なるもの也。俳文を稽古するに近頃尤も重寶なるは岸上質軒先生の『俳諧文選』なりとす。其外『鶉衣』『風俗文選』等は六韜三略あればゆめく等閑にすべからず。

淨瑠璃の金櫻堂出版の『三十六佳選』を通讀すれば此上もなければ全じ家にて出版せし『繪入倭文範』にてもよし。之は自身で讀むよりは寧ろ竹本綾之助先生或は竹本越子先生の朗讀を聽聞するが早譯りしてよかるべし。

詞曲の研究も必要なり。まさか「さんらい」節や、「ヤツつけろ」節では素人臭ければ、チヨイと博文館の『新選歌曲集』をひねるも面白し。『由縁江戸櫻』はおつた位の事を云ふには充分なり。又大家となれぬ中は是れだけ心得れば大物識と云はるべし。

猶は以上五科目の外に心得べき事少からぬと餘りに煩はしければ省く。

明治の文  
學者は餘  
りに學者  
過ぎたり

ひかしの文學者——輕文學者は文字の示す如く、驚毛の如き輕妙ある工風あれば何等の智識をも要せざるが故に若し以上の五科目を悉く飲込めは餘りに學者となる恐ありといふ杞人われども。昔は昔、明治の文學者は餘りに學者過ぎるが却て時勢と釣合つて結構なるへし。

本より前にも云ふ如く文學者は大なる智識を要せず。『自然』といふ書物さへ讀めば澤山なり。流石に今日の大先生は能くこゝを飲込んで智識を食るには到て冷淡の方なれども夫れすら以上の五科目に列記せしものより更に一層大なる智識を有し給ひぬ。尺蠖の蟻娘に比して足の疾さを見て驚く者は明治の文學者か more than that の智識に富めるを欽仰せざるべからず。

明治の文學者の文學者として惜しきほどの學者なり。玄かもゲーテ或はデフオーの如く偏固なる研究を爲しよものにあらずして、一圖に奥深く恰も八幡の鏡を詮索するの方針をもて純文學を涉獵したり。夫故文學者は大なる智識を要せざるものとなすも以上に列記せしだけは随分辛抱して勉強せざれば、迎も今の大家の如き大名を賣る事出来ざるべし。

文學者が有てる。蜆貝一杯の智識にて學海を酌み乾せりといふを得ざれども、此一杯の水も蜆貝一斗を包む大きさの唐紙を濡らすに足るを思へば決して之を蔑しらすべからず——こゝが肝腎なり、注意せよ！

- 學者と文學者——決して同一の者にあらず。之を混同して文學者を大學者の如く思ふは非也。但し徳元が『雪は雪を立すものはなし』の論法を用ゆれば知らず。以上を概括すれば文學者とあらんとする者の、
- (1) 餘りに莊重若くは魁岸なる風采を備ふべからず色白にして柔しく上品で若様染みたるがよし然らずんば淺黒くシヤンとして粹を男振をよしとす。
- (2) 氣立は柔しく寧ろ意氣地なくグズで如泥で怒る時は弱弱の如くブ、ハ、として嬉しい時は蓋を掛けた蛸蝸の如くト、ハ、として萬づにタ、ハ、ハ、くボンとして抜けたるを尊としとす、但し又横着で杜魯で無情で怠慢するは愈々妙といふべし。
- (3) 履歴は板で押した如く平調で極り切て無事平和で伊勢物語然たる逸事に富み随分人に持餘されたる厄介咄を作りしものならざるべからず。
- (4) 學識の可成欠乏して兎角に間違だらけの好佳話を傳ふべきはどの勇氣あればよし。無學文盲の世界に仕めば充分合格也。其境を去る僅に一尺なるが適宜ありといふ。

此四條件に相當する者は儘に文學壇に登第すべし。さて首尾よく登第して後の心得は如何。是からが中々の思案もの也。能く研究せよ。

第三 文學者として學ぶべき一般の見識 及び嗜好並に習癖



(甲) 新聞及び雑誌に投書する人  
 (乙) 小説、韻文、脚本、批評等を製造する人  
 (丙) 新聞の雑報即ち鈍種を書く人  
 (丁) 民友社、春陽堂、博文館の廉き本を買ふ人  
 (戊) 文學者めきたる先生と親交ある人  
 の五種に分たる。其中金看板といふべきは前の三種にして後の二種は准文學者  
 ありと知るべし。

文學者の  
三ヶ條

借て文學者若くは准文學者と成り果すれば先づ次の三ヶ條を守らざるべからず。  
 一 成るべく人の眼に付く様に心掛くる事  
 二 成るべく門戸を高ふし狭き城府を設くる事  
 三 一 成るべく自身を廣告するに盡力する事  
 右の條目は皆傳として口授すべき秘密あれば縦令三度の飯を一度忘るゝとも是  
 ばかりは決して忘却すべからず。  
 文學者としての惣ての見識、嗜好、若くは習癖は皆此三ヶ條より割出せしもの

「俗」

されば、能く此一々を嚼分けて身を處せば、恐らく人後に落つる事あるまじく、  
 其評判は忽ち摺鉢山よりも高く、「キンライ」節よりも廣く歌はるゝ事保障附な  
 りといふ。  
 文學者としての見識は先づエラクならざるべからず。エラクなるには人以上に  
 超絶せざるべからず。人以上に超絶せんとすれば勢ひ他を見下ざる可らず。爰  
 に於て自己を雲上界に置き此社會を假に「俗」と名付け、一切の人間を擧げて  
 「俗物」と稱へ、惣て人間のする事業を悉く「俗事」と擯斥す。  
 絶對に斯く惣てを罵りちらして自らはんとすれば、饑渴冷温を感ずる人間は  
 甚だ迷惑千萬あるをもて、文學者は智慧叢を捲出して、「俗に似たる雅」なるも  
 のを發見し之を以て漸く安心立命の基礎とあしぬ。  
 例へば「甘藷を喰ふ」と云ふ事は俗である。まかし狂歌或ハ川柳を作るが爲に  
 喰ふならば目的が雅なる故に俗でない、但し腹が減つたとか直段が廉いとか  
 らば目的が賤しき故に勿論俗であるといふが如し。  
 又例へば「茶番をする」といふ事は俗である。まかし人を樂ましむる爲め或ハ

養生喰をすると同じ心得で爲るなれば目的が眞面目なる故に俗でないといふが如し。

此二例の如きを『俗に似たる雅』と名けて珍重する事一方ならず。元來『俗』といふは普通一般に行へるゝ惣ての事物を冷罵するの語にあらざれども、今の文學界に跳梁跋扈する "Gai-gan" 的の斯诺ツプ先生は之を濫用して特別なる惡意味を附會し却て "Dilettantism" を主義とするは少しく見當のちがひたる咄なれど、此見當の違ひたる處が當世なり。エラクなるには飽くまで惣てを冷罵して人以上に超絶せざるべからず、何ぞ斯る見當ちがひををさすを怪まんや。

尤も當世の眼から鼻へ抜ける文學者先生が此位を道理を知らざるわけなし。充分知り抜いて而して後『俗』字を口にするは、云はゞ話し癖にして意味あるものにわらず。多くの人が必要もなきに『成程』『如何様』等の言葉を重ねると同じ例へば、

『我輩昨夜は俗事ツたが、酒に喰べ酔て、勿論俗氣退散の爲だが、處が甚だ俗な咄だの五度便所へ通つてイヤモウ大開口、便所も五度になると俗です。第

一斯ふなると人間は元來俗だから、我輩も忽ち俗ッぽくさつて、實に厭入るけれど俗物の眞似をして醫者に掛つた。藥ナンテを飲むといふは俗極まるの腹の下るのも俗の甚だしいものだ。そこで我輩頗る俗な事を工風した、俗の大關の藥を飲んで俗の骨頂の下痢を癒すのは十九世紀の俗物の所謂俗を以て俗を消すといふもんだテ、あッは、ハ、ハ、

この數多の『俗』は意味を失ひ、意味なき『俗』字を吐きちらすほど修行が積めばモウ占めたもの也。

此次に覺込むべきは『通』と『粹』也。『粹』も『通』も殆んど同義にして之もむづかしき意味あるにわらず。若し辛抱して八文字屋本并に葑蕀本を讀まば自然と了解すべし。

『粹』道の祖師を井原西鶴と云ひ、『通』學の開祖を山東京傳と云ふ。此二菩薩の遺教經は我が當時の文學界に活氣を添へたる事一ト方ならねば信心渴仰怠らず斯道の紫金經とも云ふべき『一代男女經』若くは『總經』、『絹簾子』等を誦讀凡る三百遍せば必ずや思半ばに過ぎん。

「通」  
「粹」

蓋し此『俗』と『粹』若くは『通』との恰も世人のいふなる『善』と『惡』との常識の上より漠然たる間に猶ほ限界を有する如く自ら劃定せる區域なきにあらねども之を抽象的に説くは中々難かし。其碩の『傾城禁短氣』或は京傳の『京傳餘師』を讀めば略ぼ首肯する處あるべけれど、さりて今の文學社會の大半が一切の動作を支配するほど大勢力ありとは随分怪しかる事ならずや。然れども怪むを止めよ妙法様のお水すら九死の病人を救ふ事ありといへば『粹道』必ずしも効きにあらす。之を善用して能き程に切上ぐれば二階から眼藥程の効能あるべけれど兎角毆登りをしたがるが惡き癖にて『俗』字を振廻すと共に粹の頂遊まで升り詰めるが今の世の作者氣質なり。『通人の發言』といへる本の序に『我は大通と思ふが不通にておれは自讃をあげぬといふ奴が矢張自讃をあげるのなれども日本一痲病の藥とかきし看板にひとしく誰も關はぬが繁華の地の有がたさ也』と聞いた風を事いふ男も同じ大通のはしくれなるべし。『俗』と斥くるは世に超絶せんが爲なり。『粹』と信じて『通』と思ふは狭小なる城堡を作りて立籠らんが故あり。其心事は誠に可愛らしきはを子供らしけれ

『號』

之が當世文學者どもてはやさるゝ秘訣なれば中々馬鹿にすべからず。又或る他の一派にては甚たしく此『俗』と呼び『粹』と稱するを斥罵するものあり。然れども是等の一派自ら套語なきにあらす。『健全』『純潔』『博愛』『天道』『確信』『禪味』『厭世』『義俠』等數へ擧ぐれば頗る多し。何れも皆意味の有りさうで無き言葉なれば商人の符貼の如く心得れり可なり。兎にかく意味の無き言葉を工風して濫りに振回せば忽ち俗界の四辻に金看板を擧ぐるを得べし。爰に必要な事あり。文學者どもれば——否、文學者どもならぬ時すらも——『號』なかるべからず。我が國にて所謂『號』あるものは有つても無くても同じ。然れども町内の遊人すら『グニヤ富』とか『デヨ岩』とか名乗る中は社會の師表とも云べき文學者にして『號』なきは冠履顛倒言語同斷と云べし。アービングが『ニックブローカー』と稱しデッケンスが『ボズ』と名乗り、ホルランドが『テイトトカム』と云ひし如き東西古今の例極めて多し。我が國の佐藤直方が生涯『五郎左衛門直方』と稱せし餘りに野暮堅き律義過ぎたる咄なり。當時の文學者も早くもこの野暮臭きを嫌つて都々逸一ツ作り得ぬ中から號を付け親

が呉れた名は却て忘れて仕舞ふは必ずなり。名刺にまで本名を書かずして號をま  
 るし。何の某といふ立派な名は唯區役所だけの通用を爲すに過ぎず。近頃ゾオ  
 ラが倫敦の新聞記者總會の席にて匿名の必要を演説し假名を用ゆるも又止を得  
 ぬ事ありといひしが、我が國にては「號」と「本名」と其位置を替へて「本名」  
 の方却て人に知られずといふは面白し。例へば思案先生の名ハ宇内に鳴響けど  
 も石橋助三郎氏の名は氏自身の家人すら其誰なるやを訝かるといふが如し。(之  
 は風説なれば其眞偽は知らず)。  
 既に「號」あり、而して「俗」「通」「粹」等の言葉若くは或る他のお題目を振廻  
 せば大願成就正札附の紛れもなき文學者となるを得。  
 是より文學者として有すべき見識を解かん。  
 文學者としての見識は材木屋の蔭でも困る。竹藪の雀位にてよし。許六が下駄  
 を穿いて師翁の腹中に入る者は己ばかりだといつたはエライものなり。浪六先  
 生が堤に茶屋を開いて男の小萬を極込んだもエライものなり。徂徠が將に死せ  
 んとする時雪降れるを見て海内第一流の人物を悼みて天この世界をして銀なら

しむと云ひしはエライものなり。思軒先生が杯を銜んで終生の恨事は徂徠及び  
 山陽と時を同ふせず相見て文を論ずるを得ざるのみと慷慨するもエライもの也。  
 晋其角が江戸は日本橋を渡りしものにて此其角を知らぬ者おしと大津の浮浪人  
 を罵りしはエライもの也。南翠先生が東京は築地一丁目の裏に住む者皆御存じ  
 の肖像入の紀行文を大阪作者の乙夜の覽に供へしもエライものなり。  
 文學者は斯くの如くエライものとなるべし、山は平地より高からざれば山にあ  
 らず、文學者は常人よりエライからざれば終に文學者にあらず。  
 然らば如何にしてエライものとなるべきやといふに文學者の見識ハ「ブル」の  
 第一なり。「ブル」とは英語にていふ牡牛あり。他國人は英國人を嘲りて「ジヨ  
 ン、ブル」といふ。牛は涎を垂らしハロ、ハとして折々半間な聲にてモウ、ハ  
 と吠ゆるものなれば元來勇猛なるにも似ず外観は極めて阿呆らし。此故に「ブ  
 ル」と云ふ接尾語を附すれば英雄豪傑仁人君子等惣ての偉人秀才悉く馬鹿々々  
 しき阿呆けたる形に變ず。「英雄ブル」「君子ブル」「學者ブル」「作者ブル」「大家ブ  
 ル」——「ブル」は一切の俊髦英物を擧げて愚鈍痴漢と化する力を有てり。

然るに此「ブル」が文學者の見識を増すと云ふは可笑しき咄なれど能く考ふれば決して不思議にあらず。夫れ世間は盲目千人盲目千人にして目の明いた奴一人もなければ其の生へた官員様で束髪が女學生と思ふ外何も分らぬが當然にて折角の文學者様を所謂「俗物」と同視する事なきを保せず。萬一誤解せらるゝ曉には悔ゆるも詮なければ文學者は飽くまでも文學者らしからざるべからず。是れ強ちにブルにあらずして天眞爛漫の有の儘をさらけ出すのみ。

ブルは文學者ブル。そこで盲目も文學者だぞと氣が附く故にエライと讃める、(文學者はエライものと盲信するが爲め)爰に於てか文學者大先生は氣八荒を呑み森然たり肅然たり鞅然たり正に是れ豚の子を生温風に馳し土鼠を白糞溝に御するの勢。

然らば如何にしてブルを得べき。崇拜すべき人を崇拜して其眞似をすれば足れり。英雄崇拜を貶す者あれども英雄崇拜は人間の自然にして何人も崇拜せずといふ人すら猶は何人以外の或る理想像を作為して崇拜するが常なり。古哲學者の言を借りて云へば既に人間が自ら不完全なるを認むる以上は焉んぞ「完全」を

忘想せざるを得んや。或る文學者が自ら足らざるを知て他の秀れたる文學者を崇拜するに何の不可なる事やあるべき。又模倣を甚だしく忌むものあれども古への碩儒が云ひし如く首尾よく聖人の眞似を仕果せし者は即ち聖人なり。已れが先進の模倣を爲すに少しも差間あるなし。飽くまでも崇拜すべき人の眞似をするがよい。怒る時に眼の釣上がる具合から喜ぶ時に相好の顔れる度合までも此眞似をするをブルといふ。文學者は大にブルべし。ブツて而して後文學者たるか、文學者となつて而して後ブルか。こゝ莊子が胡蝶に於けると同じく分明ならぬところ面白し。(注意、單に眞似をするをブルと思ふては困る、何でもなき人が何でもある人の眞似をするをブルと云ふ也)。

そこで大にブルんとするに當り古今文學者の嗜好習癖を吟味するの必要あり。先づ衣食住器具調度等に於て見よ。

冬一裘、夏一葛、一盃の食、一瓢の飲。是れ古への文士が陋巷に窮居として猶は樂む所以なり。然れども今日は物質的世界なれば百年乃至二百年前の生活を以て規矩すべきにあらず。有ゆる利便を知て之を用ひざれば兎も角も、既

に利便あるを捨て、顧みざるは迂腐の毀を免かれざるべし  
京都の書工某氏東京に来るに曾て瀛車の便を借らず、常に云ひけらく轉瞬の中  
に五十三次を通過するは旅の哀を忍ぶ道にわらずと。其風流なるや非風流なる  
やは別問題として、今の物質世界に循行する人にわらざるや勿論也。  
今の文學者は斯くの如くヒ、チクハたるを喜ばず。とこまでも物質世界のお供を  
して行く方針を取れり。唯一から十まで流行を外さぬ様にするには勢ひ多くの  
富を要し、且つ俗物の真似をするも餘りに勝甲斐なければ流行を追はぬ振して  
追ふをもて主義となす。  
少しく大人らしく振舞ふには一時の流行を競ひずして二百年來の流行を心掛く  
べし。例へば元録振とか天明仕込とか云ふが如し。若し一切の器具調度惣て今  
様を蔑みて百年前のものならんば用ゐずといふまで眼が高くなれば大の大通  
人と崇めらるゝ事疑ひなかるべし。  
さりながら是は較やへモク、いたる黨派なれば手本にまがたし。第一多少隨筆物  
を研究して後日本橋の中通り或は下谷淺草界限をまどつく苦勞を積まざれば出

來ぬ事なれば當分はあどまはしにして夫よりの寧ろ新聞の雑誌欄内の流行物で  
も切抜いて置いて參考に供するが近道なり。  
衣服は成るべく華美にするがよし。是れ『俗中の雅』にして常識ある俗物が容  
易に學び能はざる處也。紅葉先生曾て友禪の下着を着せし男子を見て箱根以東  
の化物なりと罵られしが、此男子極めて馬鹿なり、若し友禪の襦袢だけにて辛  
抱せしならば『俗中の雅』のお仲間入が出来べきに惜むべし。  
ゴオルドスミツスは伊達を好みし寛濶男なり。「マイル」染の藤色絹の洋袴を穿  
き黄金の頭附きたる杖を持ってハッ、と來る姿二段の見榮なりさと史家は書き  
殘しぬ。あはれ此男も藥屋に駈付けて漸くに麵包にありつき肌衣一枚になつて  
大陸を漂泊ひし事ありと思へば可笑し。人は決して汚れたるを好むものにあら  
ず。清さが上にも清く美しくしきが上にも美しくしからんを願ふはおしなべての人  
情なり。古への文士か垢辭の衣を纏ひて平氣なりしは畢竟瘦我慢の類に過ぎざ  
れば。明治の盛代に生れしもの何ぞ斯る負惜を爲す事を要ひん。大にシヤハ  
べし、一生懸命にシヤハるべし。

文學者は  
贅澤にあらず

十返舎一九は古今に亦不所存者あり。春王の元日賀客に風呂を勧めてソツクハ  
 リ其禮服を着て年始廻りに出掛けしに到ては無法も甚だし。今の文學者は流石  
 に身嗜能く紋附羽織袴は魯か「フロックコート」燕尾服、「シルクハット」の心  
 掛まであれば何時曲馬の口上言ひに頼まるゝも更に差支なし。  
 まだくは是だけにては不足なり。素袍大紋烏帽子直垂等の用意なくんばあらず。  
 文學者としてシヤいるには此位な贅澤は魯かな事なり。其ひかし松木淡々が仕  
 たい放題な榮耀に較ぶれば、純子のてくら錦の鼻拭を用ゆるも決して階上の沙  
 汰にあらず。況してや今の文學者が紗綾縮緬糸織一樂を不斷着となすも、袖裏  
 に異り切を用ゐる吹売の跡を下前に直す丹精あるに於ては、何ぞ之を贅澤なりと  
 答ひるを得んや。  
 勿論！今の文學者は決して贅澤にあらず。たゞ自ら贅澤を盡せりと思ふなり。  
 否、贅澤を盡せりと思ふにあらずして盡さんと思ふあり。否、贅澤を盡し得る  
 の美術心に富めりと思ふなり。否、世の中の贅澤を街ふ俗物めらよりも道に勝  
 れたる贅澤を盡すの道に悟入せる大通人なりと思ふ也。(爰に云へる贅澤とは必

文學者の  
こしらへの

すしも富の勢力にて得らるべきものにあらずといふ。  
 いざ去らば此大通人の文學者が拵を拜見せんに、  
 今の文學者の黒の羽織を着して殿様然たり。其地は斜子織若くは一樂織を用ゆ。  
 然れども未だ賤機織あるを知らず、又未だ無地の結城紬を「しっかい屋」の手  
 に掛ける工風にお氣が付かれざる也。  
 又今の文學者は縞市樂に糸織を重ねて粹士乎たり。然れども未だ風通織或は大  
 高紬若くは縞斜子をひげら加す事を知らず。况んや西陣の織出小紋に到てハ玄

羽折



のまた玄有るものやら無いものやらを知らず。  
 夫れ斯くの如く通にして斯くの如くハルもの如何で岐  
 阜に網織、西陣に掛糸織の最も粹を極めたるものある  
 を知るべき。高が呉服屋の番頭の講釋を聞いて江戸ッ  
 子の顔をみるが頗る大膽也と云ふべし。  
 試に上圖の羽織を見よ。これ今の最も勢力ある文學者  
 の一派が滿腔の美術心を捲りし拵なりや云ふ。胴裏地

に西陣を用ゆれば大出来なり。古純子を用ゆれば夫こそ恐入りし次第あり。又  
 おつにひねって京染の古代更紗の斜子を用ゆれば妙のまた妙なるもの。然るに  
 一尺十三錢切の甲斐絹に『命』『』、若くはお手製の發句を黒々と書かれ、ま  
 かも町内の印判師に十錢の刻料で注文せし駄印を真朱に捺されたるお手際は抑  
 も大の大通おらずや。縦令へば何處の古手屋を捜しても無い處が恐らく珍  
 重する所以あるべし。  
 是等の一派が用ゆる帯を見よ。角帯は博多が廢れしを御存じだけは天晴江戸ッ  
 子おれども編珍の既に時遅れとなりしは一向夢中なるが流石なり。稀には男物  
 に向かぬ邯鄲織を無理にひねらふと云ふ野心家なきにあらぬと焦坡織といふ  
 何處で出来るものか更に知らず。  
 更に又兵兒帯の嗜好を吟味せば其愈々奇絶妙なるは古への馬骨子亞流を踏若せ  
 しむるに足る。今の通は天竺木綿の保の好きを嫌つて八王子の縮緬の切れ易き  
 を尊ぶ。八王子にもせよ、兎に角丹後縮緬といふ名の立派さに惚れて。まかも  
 無地の白にては有觸れて面白からずといふ好奇から歟、或は汚れて困るといふ

心配から歟、更紗或は小紋に染めたるを用ゆ。之も竺仙に注文せし拵へ染なれ  
 ば一寸憎い思附なれど、中幅一尺三十錢見當の染上を氣張るが常あり。それも  
 是も惣て好し、若し染色或は形がジミでシブキものならば。随分甚だしきは十  
 八九の妙齡おらずば婦人の帶上にすら用ゐるまじき柿色入の伊達を見せる凝性も  
 ありといふ。  
 此胴裏の羽織で、この更紗縮緬の兵兒帯で——其上に飛白の石川足袋を穿いて  
 猶ほ其上に香取屋を聞登えて伊勢芳を知らぬ下駄通がオホンといふ黒羅紗  
 の鼻緒を引掛けて——且つ猶ほ其上に野田屋の前を素通りして菱屋に氣の付か  
 ぬ帽子通が「モール」の紐を飾りし鳥打帽を被つて、而して後ぐつと反身にな  
 つて澄ます時ハ之を折紙附の通人的大文學者なりと云はずして何ぞ。  
 文學者の大通既に折紙附となれば、一切萬事の通の極道に達せし物ならざるべ  
 からず。此に於て書齋は云ふ迄もなく茶の間坐敷向の裝飾中々大事となる。  
 文學者の意匠を凝す室内裝飾に千種萬様あり。その最も著じるしく人の注意を  
 曳くに足るものは作者風の書齋なり。



作者風の書齋



鳥丸光廣  
傳 山東京

作者風とは何ぞ。即ち女學者、ブルを云ふ。一般にブルの必要あるは前に述べし如し。書齋に於ても亦大にブラすんばわらず。作者は敢て小堀遠州の風雅を極めたるにわらず、千利休の寂を好むにもわらず、將た又ラスキンが審美的建築の秘奥を掘りしにもわらず、唯わけもなくブラんとするが爲に世間人前に外れたる數奇を盡して、獨身者がお茶を貰ひし如くホク、ハ、悦喜をしますだけの事なり。

作者風の書齋といふ大道の露肆の如く「ゴミ」を飾り立てるを云ふ。今の文學者の見解に依れば天晴美術家が首を捻らふと云ふ物は大抵「俗」に屬する代物にして、眞個乃見識ある者が珍重すべきにわらず。殊に尋常一般の人の如く尋常の器具調度を用ゆる事は大通たる文學者偏に之を爲すを恥づ。

むかし鳥丸光廣卿は扇子箱を硯箱に代用し、山東京傳は生涯天神机を用ゐたりと聞く。今の人、明らさまに云へば曾て我樂多連三人男の一人と仰がれし某先生は婦多川の妓女が名殘の化粧臺を文机とあして引出に白粉の香あるを誇り、巻煙草の箱に硯を入れて「マニラ」の筆に蒸するを樂み給ふ。古人の心を得た

るもの、豈に夫れ恐る感心と云はざるべけんや。  
 今の文學者が好事は概ね斯くの如し。夫故に家の造作木材のあしらひ方は高が  
 お茶屋の座敷向で覺えた位に過ぎざれば猫屋をひやかして番頭に首を捻らせる  
 心配なき代りに、物之本で白檀の尊きを知るばかりで吉野杉の品の好きを知ら  
 ず、一ト口に唐木と呼びて黒檀鐵刀木の値高きに肝を潰せを終に黒部杉屋久島  
 杉の濫きを御存じおし。云はゞ奥山普請で大通を極込ひに過ぎず。  
 普請既に斯くの如し。造作の如何かといふに、桐の骨に神代杉の椽を附け掛川  
 の葛布或は芭蕉布を張るお好を御存じおきは大事なけれど、田舎の旅籠屋から  
 思附いて再板物の歌麿の美人畫、石板摺の古文書、甚だしき俳諧のちらし等  
 を交張りにして天晴の通を極めるに到てはげに、大膽不敵といふべし。  
 文學者は勿論金持にあらねば家の汚なきは更に差問なし。貸長屋的の普請造作  
 もまた頗るよし。唯るれ大通なる文學者にして赤松の床柱、檜の天井板、「ガン  
 セキ」或ハ泥間合の襖にて満足するは妙あり。君子は能く足るを知る。文學者  
 は眞個に足るを知る。

此足るを知る文學者なればこそ器具調度に到る迄惣て足るを知るも無理ならず。  
 強ちに謹儉尙武を主とするにあらす、決して廢物利用を心掛くるにあらす。而  
 して渠は化粧臺を以て机となし煙草の空箱を以て硯箱となす。  
 古往今來文學者の多少美術の嗜好に富む。デフォオーの如きドストエーフスキイ  
 の如き殆んど科學者に類せる者を除くの外美術の趣味を解せざるはなし。グレ  
 イ或は今のラスキン等に到ては専門美術家を以て目するも可なり。美術を解せ  
 ざるハ文學者として第一の耻辱あり、ひねり屋の若檀那の木鉢を被りし美術心  
 にあやかれば一期の面目といふべし。  
 今の文學者は能く美術に通ず。此故に文學者たらんとするものは美術に通ずる  
 顔をせざるべからず。少くも美術が好きだといふ顔をせざるべからず。縦令無  
 理に所望し彫刻料を齎發しても『美術世界』に序文を書き『繪畫叢誌』に投書  
 する覺悟なかるべからず。よしんば一段見識を下げて當世畫工(平手でもよ  
 じ)に交際を求め決心なかるべからず。成るべく展覽會或は共進會を縦覽し  
 て草臥足を引する辛抱なかるべからず。

唯是れだけにては濟まず。此上に古道具屋をひやかして賈物をつかませらるゝを最も妙なりとす。林述齋曾て狂言の大名が太郎冠者に騙されるゝを妙なりとし、就中美術に到つては太郎冠者に騙されるゝ事頗る多し。若し林述齋をして在らしめば必ずや之を以て大の美徳なりと爲さむ。勿論時たまの展覽會に硝子越で研究する美術家なれば、何を見ても妙だ不思議だ能く出来ると讃めるより外評する事の出来ぬは當然にして、却て素ッぽい處が憎氣なくてよし。然るに今の文學者は古道具屋然とエタイの分らぬ代物を煎べちらして、牛鍋をつついで「シヤモ」の味を賞すると全ヒ名評を吐く。まことに人を驚かすの法を知れるものといふべし。徳田や吟松堂を日本一の骨董屋と心得、玉忠、綱宗あるを御存じおき御方あれば、縁日商買に類する中通りで高い物を賣附けらるゝも無理はなく、勿躰らしく「ゴミ」を飾りたてるも當然なれど、種々の講釋をして人を迷惑がらせる事古人に比類なき大通ならずや。「河東節親類」だけに二段聞き。今の文學者に河東

「シヨ  
ンズキ」  
と振

落款あれ  
ば誤りに  
て

を聞かせらるゝ恐なけれども、美術の講釋を聞く覺悟なき時は随分迷惑する事あるべし。爰に面白き逸話あり。某生曾て一文を草し今の最も有名なる牛込の某大家の許に行き剛を乞ひしに、先生讀んで偶々「祥瑞」なる文字に「シヨンズキ」と振假名附けられしを見て喝して曰く、卿が疎爾何ぞ甚だしきやト。即座に朱墨を以て「シヤウズキ」と改めたりといふ。去年哲學界に於て衝突問題喧しかりし時丸山某井上博士を嘲つていへらく、博士は荐りにシオツペンハワーなる人の名を擔ぎ出せども獨乙にシオツペンハウエルありてシオツペンハワーおしト。「シヨンズキ」と「シヤウズキ」との誤認は恰も之と全ヒく識者の責むる價值なしと雖ども、日頃美術の趣味に富めりと噂さるゝ牛込の大先生にして猶ほ斯くの如きを知らば今の文學者が美術心略ぼ推想するに足る。又之も或る有名なる戀愛小説家某、蘆雪の幅を購はんとし俄々其畫に頗る偽物多しと云ふを聞きて曰く、否な腹にてもよし蘆雪と落款だにわらば腹にてもよ

いと。此人落款にて繪を買ふと見えたり。某美術家曾て云ひけらく余は落款の何たるを問はざれば勿論眞偽を辨せず唯その凡と非凡とを鑑別するのみト。前の小説家は則ち然らず、眞偽の如何を問はずして落款だにわらば平凡かいたも之を愛重して置かざるが如し。所謂道風の朗詠集朱板の大明律若し有らば之を愛惜するもの恐らく此人あるべし。

文學者の美術心は先づ此位にて澤山なり。此くの如き興ある好逸事を作るは、に美術心あれば足れり。書畫を商ふもの常に云ふ、最も鑑識に精しき者の困る全く暗き者も困る多少聞囁りて高慢を云ふ者が第一の顧客なりト。文學者は則ち此第一の顧客とあらざるべからず。

墨繪なれば墨色が好いと讚め、彩色畫なれば着色が妙だといひ、支那物なれば雅致があるところやし、日本物なれば古雅だと感服し、足利物が見事な元祿物のオツだと賞讃する。若し試に『美術評語類纂』を編輯せば恐らく新聞半欄位にて今の文學者が用ゆる評語を盡すを得べし。

多くの文學者の中には西洋美術の鑑識をもて任ずる者も亦少からず。是等の人の書齋を覗けば更に風變りがして中々妙を極む。先づ棚間には髮結床然としても開はざれば「クローム」の繪を額とすべし。額縁は純子も高し金縁も嫌味ありといふ處で斑竹或は煤竹を用ゆ。又「クローム」繪も獨乙或は佛蘭西出來のものい高ければ小川町通りの寫眞屋で賣る亞米利加仕入の一枚二十五錢止りの廉物がよし。随分「グラフィック」或は「フキガロ」の附録を夜肆で買出してもし。國民新聞の附録すら額にする人あるを思へば決して「恥かしき事にあらず。況んや大見識あつて眞の美術を愛するの餘りに出でたるに於ておや。又卓子の上には是非とも石碇細工の裸躰美人像を飾るべし。強ち洋行する人に頼んで羅馬の勸工場から買て来て貰ふにも及ばず。三河町邊の西洋道具屋を冷かせば五十錢位にて手頃の品を得る事容易なり。

惣じて椅子卓子卓壇等は杉田或は木平の商店を頼はさずとも萬事和製で濟ますが國への忠義といふものあり。殊に卓座は花紋の更紗で澤山也。(更紗の舶來品なれば廉物なれば大事なし)。

西洋好きで日本品を珍重するは可笑しき様なれば、成るべく日本の品を用ひて



要するに西洋風にしる日本風にしる部屋の狼籍したるを趣味多しと考ふるが故に、煙草屋の店と同じく壁は本より天井まで看板繪びら小説の挿畫學校の卒業證書女の文藝見世開きの引札等を隙間なく張附け、墨には雑誌赤本の散然たる間に人形轉り陣笠投出され瓶子倒れ釜チンとすまし殆んど足の踏所なきまでにちらかり柱には偽作の假面遊乎として睨まへ天井よりハ菲盤ユラリとアラ下がる意匠をもて珍之又珍馬鹿不思議と申す。

中には美術嫌を看板とする大文學者もあり。常に『我輩は更に分らぬ』とズハ抜けるハ家



西洋風を作るが國粹的進歩主義と云ふ有るたきものなる由。此故に或る派の頑固連は甚だしく排斥すれども例の一口に『濱物』と呼ぶ見掛の奇麗なテカ〜ビカ〜ゴテ〜したる辨天通りの雜貨店で賣捌く日本美術品を重んずる事一ト方ならず。九谷有田の賈物を恭やしく陳列す。之れ西洋癖文學者の特色也。

壯活達にして面白し。縦令其人は半熟美術家の珍重する南宗の書山水を床の間に懸けるも。

むかし熊澤蕃山は常に天神様の繪を書齋の床に掛けたりといふ。天神様の掛物面白し、權兵衛謹書と認めたる稻荷大明神の掛物ならば愈々面白し。

或人は妙にヒ子りて掛物を裏返して自畫の三尊佛を張り或人は盆々ヒ子りて一休の「し」の字を書きて壁に張付け又或人の愈々茶かして壁に鳥佛師、百萬塔、土偶の泥書を描きぬ。是等皆面白し、到底常人の想像しがたきまで典型以外に走りたる實に爰に到て極まる。

然れども天下に文學者と名乗らんとするものは斯くまでヒ子ラざるもよし。一番世話のなきは自分で美術に明るいと思へば濟む。自分の意匠を凝し室内裝飾は建築上の参考となると思へば濟む。又斯くまでに思ひざるも一見して直ちに大學者の書齋と分るに違ひないと思すれば則ち足る。

縦令復た萬一自信の念足らずして斯く書齋を作り上げた處で果して大文學者の書齋なるや否やを疑ふ事ありとするも、斯る意匠は到底今の大文學者からずい

思付かざればと田舎漢が見ても一ト目で「は、ア文學者様のお坐敷だな」と消魂る事請合なり。

扱て書齋は斯くの通り出来上つたれば之より食物の吟味を少しく試むべし。文學者のいごこちでも通人あり。此故に食物も衛生的ならんより寧ろ通人的なるをもて主義と爲す。

強ち贅澤を街つて三度の食膳に甘い物づくしをするに及ばず。唯折々「通」をやればよし。牛込なれば吉熊、新橋なれば大又、根岸なれば伊香保温泉、下谷

あれば伊豫紋あたりへチヨク、行くを「通」といふ。散財は多きを喜ばず、席の長さを以て「通」と爲す。料理は甘さを欲せず、樓

婢の奇麗なるを以て善しとす。此故に上等會席に行かず。料理人の名あるには行かず。ツマリ江戸ツ子の知れる家には行かすして田紳を歓迎する立派なお

茶屋にて反吐をはくを「通」の極意とす。むかし堅田松庵あり。友に招かれてたゞき菜の馳走になりし時舌打して云へら

く是れ男のたゞきしものちり女のたゞきしにあらずんば味なしト。主人大に怪

み厨に行きて之を問へば果して男のたゞけるものなりき。  
 又茶人某有名なる割烹店に行て刺身を命じ喫して曰く、是れ鐵の臭ありト。料理人則ち竹を以て料れるを出す。曰く是れ竹の臭ありト。最後に伊萬里の鉢を破して其碎片をもて宰れるを供せしかば、茶人初めて其味を賞斷して置かざりじといふ。  
 今の文學者は斯くの如く味神經の發達せしにあらで、唯一圖に「喰へども味を知らず」の嘲を免かれんとするに汲々として則ち「通」を氣取る。  
 又ひかし某あり、鎌倉の三橋に行き五圓金を投出して曰く、「余は魚鮮に厭きたれば之にて精進物を賄ふべし」ト。當頭唯々として退き大に五圓金を持餘せりといふ。  
 今の文學者は是れだけのシヤ、いすら爲る道を知らざるなり。唯あてがはれたる料理を乙だど賞めて割著で頬べたを叩く事のみを知る。  
 八百善の味を知らざるをもて文學者を咎むる勿れ。文學者は能く八百善の名を知る。獨り花屋敷の常盤屋に到ては其名だけを知るものすら寥々として晨星の如し。去年或る大家は紀行の端に平清を甚だしく稱揚して東京一と云ひしにも關らず、終に三言の常盤屋に及ばざりしは、恰も關羽の武勇を語りて諸葛孔明の偉略を誇れしに同じ。  
 有名なる會席すら忘るゝ事あれば、甘い物屋を知らざるも決して怪むに足らず。島村を知らざるは當り前也。堤から轉じて來た常盤を御存じなきの勿論々々答ひるだけ却て野暮といふもの。  
 繰返していふ如く文學者の「通」は國民新聞の斬馬劍禪（昨二十六年の夏頃）如何にして東京に生活し得べきや」なる名文を作つて大に通をさめし人也）より上る事一等の大通なれば諸事萬事に行渡つて、東京に住む猫も釋子も皆知てる事だけは悉く御存じなり。淺草に觀音があつて品川にお臺場のある事から榮太樓の甘納豆をもて評判高く蟹屋が金鰐をもて名譽ある事まで一切承知之助ぐ、ど飲込んで「オホン……限る」どすます位なものなり。  
 食物が通だと云つて何も有數の人が知れる珍味を賞斷するわけであく、兒守はポツタラ焼に咽喉をグビ付かせ厮童は今川焼に涎を垂らす事を知るだけにて全

み厨に行きて之を問へば果して男のたゞけるものなりき。  
 又茶人某有名なる割烹店に行て刺身を命じ喫して曰く、是れ鐵の臭ありト。料理人則ち竹を以て料れるを出す。曰く是れ竹の臭ありト。最後に伊萬里の鉢を破して其碎片をもて宰れるを供せしかば、茶人初めて其味を賞斷して置かざりじといふ。  
 今の文學者は斯くの如く味神經の發達せしにあらで、唯一圖に「喰へども味を知らず」の嘲を免かれんとするに汲々として則ち「通」を氣取る。  
 又ひかし某あり、鎌倉の三橋に行き五圓金を投出して曰く、「余は魚鮮に厭きたれば之にて精進物を賄ふべし」ト。當頭唯々として退き大に五圓金を持餘せりといふ。  
 今の文學者は是れだけのシヤ、いすら爲る道を知らざるなり。唯あてがはれたる料理を乙だど賞めて割著で頬べたを叩く事のみを知る。  
 八百善の味を知らざるをもて文學者を咎むる勿れ。文學者は能く八百善の名を知る。獨り花屋敷の常盤屋に到ては其名だけを知るものすら寥々として晨星の如し。去年或る大家は紀行の端に平清を甚だしく稱揚して東京一と云ひしにも關らず、終に三言の常盤屋に及ばざりしは、恰も關羽の武勇を語りて諸葛孔明の偉略を誇れしに同じ。  
 有名なる會席すら忘るゝ事あれば、甘い物屋を知らざるも決して怪むに足らず。島村を知らざるは當り前也。堤から轉じて來た常盤を御存じなきの勿論々々答ひるだけ却て野暮といふもの。  
 繰返していふ如く文學者の「通」は國民新聞の斬馬劍禪（昨二十六年の夏頃）如何にして東京に生活し得べきや」なる名文を作つて大に通をさめし人也）より上る事一等の大通なれば諸事萬事に行渡つて、東京に住む猫も釋子も皆知てる事だけは悉く御存じなり。淺草に觀音があつて品川にお臺場のある事から榮太樓の甘納豆をもて評判高く蟹屋が金鰐をもて名譽ある事まで一切承知之助ぐ、ど飲込んで「オホン……限る」どすます位なものなり。  
 食物が通だと云つて何も有數の人が知れる珍味を賞斷するわけであく、兒守はポツタラ焼に咽喉をグビ付かせ厮童は今川焼に涎を垂らす事を知るだけにて全

切餅の附焼でも何處の河岸の切餅大きく分がわつて搗が好く醬油の味が能くコンガリとして甘いかは御存じなし。尤も車夫や立ちん坊の舌の加減を御存じなきは貴族的に育ち文學者ならねば道理なれど、扱是より以上を處で全じかステラでも風月堂と藤村と壺屋とは如何味が違ふかは一切夢中なり。中には疑性な御連中が銀坐の古月や中橋の松屋で出来る新菓を新聞の廣告で承知して取寄せるもわれど、遠州好みの縣燒或は梅花堂の珍菓に到ては知らぬ處の文學者也。

物の惣て不變不動と心得るが今の文學者にて、二十年前に亡くなられた爺い婆アお迷土の土産話にした一々を聞嚙りて醋は與兵衛、汁粉は水月、團子の言問、蕎麥は鐵、天麩羅は天金と、三井大丸と全じく日本中に知れ渡りしだけを吹聴して、お盆の丸い物お膳は四角な物と覺込みしが抑も通の通たる證據なり。文學者中の大通は國々の名産を珍重する事一ト方ならず。國産とだに云へばハハ、草の砂糖漬も田螺の塩辛も妙だハハと賞める事請合也。縦令陰にてホキハ出し水にて咽喉を洗ふ事ありとも死も角表面だけは珍味して見せるの「通」と

いふものあり。惣じて今の文學者の衣食住に於ける嗜好は大抵同上の如ければ――よし二三人は此以外の野暮なりとも――こゝろを斟酌すれば略ぼ推知するに足らん。

猶ほ其他の事を少しく述べれば、名刺は是非とも用意せざるべからず。「ケント」の紙に築地活版所の印刷あれば所謂出す入らずで温和しけれど、其れでは文學者らしからざれば白檀に朱字を用ゆるを面白し、或は支那人の摸倣をして朱唐紙に黒肉を用ゆるも妙也。名刺の文面は、

### 風來山人

本名 神田白壁町住 平賀源内

或ハ單に、



式亭三馬

として裏に住所本姓をしるすもよし。又『號』のみにて本姓はしるさざるもよし。何となれば文學者としての『號』は本姓よりも尊ければ也。活字は久永を嫌ふ。最も普通も行ある、の蜀山風の石板摺り。但し老成の蜀山にあらずして、専ら若書の癖多きを重んず。徳川時代の文學者は印刻を愛し。山陽或は海屋の如き自ら篆刻を爲し、者すらすからず。今の文學者にもまゝ好む者なきにあらねど、もとく俳諧の點印或は掛物の落款で感服せし印通なれば、鶏血とはぞん石だか、西漢とはぞんな書跡だか御存じなく、天賞堂の廣告で益田香遠と濱村大蠟を覺えし外の畑河を日本一の名人と思ふだけける關の山にて、町内の印判師に御自筆を彫らせる事の

雅印

みを知て通を極める也。茲に一大文學者ありと假定せよ。此大文學者先生が車を篆刻師の格子に横附にて横柄に活板屋の小僧を叱る心をもて注文せまど假定せよ。しかも町内の印判師にお世事を云はれた呼吸を飲込んで素人臭いカラ威張をして譯の分らぬ御説を陳べたりと假定せよ。殊に先が迷惑がるをも思はずまて印判師から聞嘴ッた書跡の通を拈って其お影に滅法高ひ刻料を取られたりと假定せよ。又其上に陰で笑はるゝを知らずして一ト山いくらといふ實竹を思に被せて呉れたりと假定せよ。若し此事實まことに有らば則ち如何。幸ひに今の文學者連中には是はど氣のきかぬ笑はれ草を作る痴呆なく、六書通すら覗いたことなき代りに象の形をした藏書印を玩び、若くは竹根に大和古字の文で嬉しがらるだけ温和しくてよし。其他の文房諸具に到つては經机を用ゆる外は全く知らず。勿論知らぬ處が尊とし、萬一知てゐては道具屋と誤まらる恐あるが故に。大躰右に述ぶるの如し。

要するに衣食住とも悉くブラ、ざるべからず。文學者は斯くの如きものなりと覺  
 込みて精々油断なく摸倣をすれば請合つて忽ち文學者となれる。  
 流行は文學者が惚れて濟まぬもの故萬事飲込んだ顔をしてゐるべし。さり  
 とて流行の奴隷となるは随分金子が掛つて厄介物なり且つは見識のなき唯なれ  
 ば成るべく流行におくれる様に心懸くべし。まかし九切りおけると流行を知  
 らぬと思はれる憂あれば手輕で濟む事だけ流行を渡ふべし。  
 巴黎の流行は一日々に變る。文學者の流行は五年位續く。之を俳學の語にて  
 云へば不易と流行と相兼ねたるものにて世間の人はスタレたと思つても文學者  
 だけは猶ほ流行だと思つてゐる。其證據には文化文政度のお嬢様も今でもゐる  
 事だと信じ爲永時代の衣を今でも着てゐる事と考へるが何より也。  
 是れしかしながら文學者の有がたき處なり。流俗以外に超然として『通』と呼  
 び『粹』と誇る。噫、是れ最れエラキ處ならずや。  
 是より文學者が交際の心得を説くべし。

#### 第四 交遊に於ける文學者の心得

倫敦には政治社會と稱すべきものなし。寧ろ外交社會、法律社會、遊獵社會等  
 と云ふべきものもあるも單に政治家のみの會合或は團躰を見るを得ず。之と全  
 く特別に文學社會、美術社會、演劇社會と名くべきは凝結せる獨立の社交を  
 絶えて作る事なし。何れの集會に望むも必ず文學者の三々五々群を爲すを見  
 る、宮庭の夜會にも、政事家の宴席にも、學術の講談會にも、踏舞會にも、遊  
 獵會にも。然れども特に文學者のみが一團を作りて別世界を爲すを知らずト。  
 是れ數年前倫敦滯留の外國人が著りし『倫敦社會』中の一節あり。アングロ  
 サクソン人は世界を以て家となすの氣象あるが故に、社交上に於ける心もこれ  
 と全しく、社會の公人としては各々政事家たり文學者たり美術家たりといへど  
 も、一人として互に往來して其間更に墻壁を設けず、誰も彼も打交りて少  
 しも狭さむ處なし。  
 日本は之と變りて、小にしては互に城堡を守り一封建の遺風、大にしては外國

文學者の  
小黨派

文學者は  
必ず小黨  
派を作る  
べし

黨派の表  
面及び裏

の交通を拒絶して堅く自ら閉鎖せし餘波未だ消えず。業を異にすれば互に睨め  
競をして政事家は政事家、文學者は文學者、美術家は美術家とおのがじやに蠅  
牛の殻に等しき小邦國を作り、各々我が佛尊として自らを揚げ他を落すに汲々  
と堅く守つて籠城を爲す。

ニッ穴に棲める文學者同士すら廣く交はる事出来ずして、似た者連中が小黨派  
を作りて向ふの隅にコソ、此方の隅にチヨコ、寄合を附けるが名にしわふ  
大和民族の特色あり。小黨樹立の政治界を怪む勿れ。主義の異同も感情の行違  
もわるにあらずして猶は無數の黨派に分る、文學者あるをもて見れば黒砂糖の  
凝塊がいつの間にか出来るも不思議にあらす。

文學者としての交際は第一に小黨派を作るにあり。勿論幾分か主義を全ふする  
者或は嗜好の似たる者同士にあらすんば提携するを得ざるは當然なれども、文  
學者の黨派は斯る面倒臭き手数を要せず、例へば同じ町内に住む者なれば同町  
内といふだけの好誼にて同じ様に酒を飲めば好酒家といふだけの廉で四人なり  
五人なりの連中を作る、之が第一の秘訣なり。

さうにか斯うにか連中が出来れば、此連中で茶番をする、酒を飲み、芝居に行  
く、花見に出掛ける、雑誌を發行する、一ツ新聞の寄書家となる、互に各々の  
著述を讀め合ふ——陰ではおのゝ舌を吐いて修羅を煽してゐやうとも表面た  
けはざつこばらんの無禮講を樹て、文壇に何派ありと氣焰を吐く。

最も "Homogenous" で且つ "Heterogeneous" なるものは文學者なり。漸く五人か六  
人の小黨派を作りあがらも猶は互におのれの城廓を設けて、例へば打解けし酒  
宴の席ですら籠城の策を講ずるは不思議な程あり。三日三晩飲明したとか或ハ  
一ト月餘りも一緒に旅行したとか聞けば、さも睦まじさうに思はるれど、陰で  
は熱罵冷諷互に敵の備なきに乗ずる軍略片時も油断せず益々守備を嚴ふして壘  
を高ふす。而して相遇へば歡喜を眉宇の間に溢らして兄弟の如し。

蓋し何故に斯く裏面に相せめく者や兎に角表面だけは親密あるやと云ふに、前  
にも述べし如く當時の文學者は「通」且つ「粹」たらんと欲して常に恬淡和平  
勤めて胸襟の廣さを粧ふが爲たり。むかし千松は曰くおなか々空いても飢じふ  
ない。今の文學者は則ち曰く腹は立つても怒らない。縱令何かの不満足あるに

しても其不満足を忍ぶが粹なり、通あり、殊にまた何かの便宜の此不満足の埋合をするに違ひなければ結合團體を作るは極めて必要也。所謂一本の矢は折れ易けれども一束の矢は折るべからざる道理にて。

白勝の白酒を賣りし匹夫なり、時遷は鶏を盗みし草賊なり。然れども之を梁山泊一座の豪傑と呼ばるの匹夫草賊たるを忘れて先づ天下を動かす人あるやを思ふ。當時の文學者が各々樹立せる黨派に於けるは恰も之と同じく何黨の誰と云へば都々逸歌發句の外は何物をも爲り得ざる事に氣附かずして直ちに天下文壇の大將軍なりと信ず。黨派豈に輕んずべけんや、黨派は實に勢力を作る。

流石に立憲治下の文學者たけありて能く黨派の利益を悟り、幾分かは勢力を増進をも算測して不満足ながらも何々派の尻馬に乗りて文學の戰場を踏みちらす心掛感心ありといふべし。見よ、田舎新聞の續き物にも劣る小説ですら何黨の某の進作とだに云へば東京の大書肆が立派ある表紙と口繪を添えて出版し、堂々たる大家先生が長々しき批評をなすにあらざるや。

人は云ふ、今の文學界は門閥なりト。然り、今の文學界は門閥あり。然れども

此毀言を爲す者は自らを門閥に化する力なきやいざいもの也。官に媚ぶる者は故らに薩音を摸ね長人を氣取る。文界に旗擧げせんとする者は『粹』と『通』の洗禮を受け進んで何れかの黨派に屬せざるべからず。

而して此黨派に屬するに決して難事にわらず。本より二名以上の紹介者を要せず、年齢財産等の資格も入らず、投名状も不用なり、大盤振舞も無用あり。惣て極めて手軽に何人も加入するを得。縦令へば文壇に名もなきともがらありとも其逆中たる榮譽を大なりと信じて極めて有がたく思へば。又縦令有がたく思はずとも筆や口の先で何かの序に『私は何々派の端武者です、宜しく御最負を願ひます』との意を吹聴する心掛さへあれば。

先づ其一策を擧ぐれば是等の黨派の御本尊様の家近く住ひて折々文學や美術の講釋或は奥妙なる洒落を拜聴する爲め腰を屈め首を下げて参向し、『どうぞ宜しくお引立を……』とだに云へば暗々の中に入黨の式は済む。然らずんば一層簡略に初手から弟子入を申込むかよし、弟子となつて諸事萬事引立て、貰ふが早手廻しにて世話入らす。第一の良策といふべし。

むかし中江藤樹は自ら徳薄く學少ふして師たるの力に乏しとなして人の其門に入るを許さず、熊澤了介の如き門に立つ事一晝夜に及んで漸くに弟子の禮を執るを得たりしといふ。

今の文學者は此野暮堅きを嫌つて弟子の押賣をするに拮据勉勵す。何事も商賣繁昌といふは能き心掛なれば強て嫌だと云はぬ限りは、随分嫌だと云ふ者にまで弟子の名を賣附ける事決して悪からず、是れ商賣上手といふものあり。一度ありとも先生のお名前を欽慕してゐたとか或は是れに御染筆を願ひますと短冊でも出せば直様弟子の名を賣附けらるゝ。甚だしきは無斷に獨り極めに賣附けた積りにして誰うれば自分の弟子だと吹聴して呉れる。「あア、あの男は僕の門下生……どうか最負にして呉れ」と一ツ穴の貉どもに頼む。

漫りに弟子となる事を嫌ふ勿れ。平田篤胤は相會はずして本居宣長の門人と稱し、式亭三馬は全交門の一人と名乗つて満足せるもの、如くありき。然れば今の音に聞ゆる文學者大先生の弟子とあるは玉帝より古禪を拜領したるほどの大榮譽にあらずや。殊に寺子屋入とちひひ朋輩弟子に煎餅を振舞ふ手數すらなき

に於ておや。況んや弟子とあれば名洒落を聞き名茶番を拜見する役徳あるに於てれや。

此手順を踏んで弟子となる歟然らずんば期間的のれ出入を求めが交際の第一階段にして、此首尾さへ済ませば二ト月二ヶ月を経る中に自づと自分の名も廣まり知らぬ間に文學者の仲間入り出来る。

師弟の間とか或は兄弟分とかにあれば惣ての事——著述、出版、観劇、遊興等何や彼に都合よく世間の人からも羨まれる。否な、儘に羨まれると思ふ様の氣がする、恰も孩兒が赤ければ「メレンス」をも見せびらかす如く。

老かし斯く互に師弟若くは兄弟分となりて、且つ又縦分表面だけなりども唯美しくしてゐるばかりでは餘り平調で面白くない。そこで文學者先生は時々仲間喧嘩する必要がある。是れも喧嘩すべき理由があれは當り前なる故更に妙ならず。夫故喧嘩すべき理由少しもあき尋常人より見れば卵の毛で突いたほどの廉を見附け出しては喧嘩するの即ち文學者なり。

文學者の喧嘩は殊に業々しきをもて特色となす。渠等が忽ち絶交するといふは

剛毅の精神を示せしものにして、苟くも男子殊に文學者たるものは優柔不斷ぐづら／＼とすべからず。氣に入らずんば男らしく直に潔よく絶交すると云へ。然し亦がら文學者は強いばかりでは困る。剛情を言通すのは却て男らしからず。何處までも胸襟洒落で行くが文學者の文學者たる所以なれば、一端絶交したと云ひし事は念れず仕舞ふて再び仲好く交るをもて妙となす、恰も孩兒が「モウね前とは遊ばないよ」といふ言葉の下から甘藷の交換をする如く。勿論時としては全く背中合せをして犬と猿の觀をなす者もある。畢竟是は文學者の通有性とも云ふべき嫉妬偏執が原因で、惣ての事を、邪推の眼を以て見るから起る。

古き例を云へばボーブエアソンの間の如き、初めは互に原稿を示して意見を聞きし程の間柄なりしものが一朝猜疑の念を熾して以來反目して殆んど握み合をせぬばかりなりき。猜疑はまゝ人を盲にす、嫉妬は往々良心を殺す。然れども嫉妬或は猜疑の極めて卑劣なるは文學者能く之を知る。少くも自分だけは此卑劣なる感情の奴隷たらしざる事を欲す。此故に他の嫉妬偏執に陥りて邪

推を逞ふするを嘲罵する事甚しけれども己れが同じ嘲罵を値ひするに氣附かず

縦令幾分か氣が附いて心竊かに恥づるも表面には更に現はす事なし。

「わの男は僕を怨んでるさうで……わア氣が小さくても困る」といふお方自身も斯く人々に吹聴するほどに氣が小さくて困る。

七代まで崇ると云ふは猫か狐の執念也。文學者先生も多くは七代まで崇る。即ち猫か狐の執念を有つ者と云ひざるべからず。

ひかし物徂徠常に堀川の一派を罵つて曰く渠等は賣講者なり聖人の道を賣て口を糊す。聖人の道を賣ると匹夫の道を賣ると其何れか勝りたるやは爰に問はずして堀川の流に飲する者の言を尋ねれば必ずや綾園の俗子は二三百石の餌に釣られて諸大名の朝間に甘んずと云ふべし。徂徠は磊々落落々自ら東亞の第一人を以て任す、而して猶ほ此言を爲すをもて見れば所謂商賣忌敵の俚諺は文學者も終に免かるゝを得ず。

文學者は互に罵るべし。唯わけもなく罵るだけに氣が済まざる時ハ七代まで崇るべし。若し又淡泊にして七代まで崇るを面倒臭いとする者は一寸絶交する

交友は情  
なるべく

不在と詐  
るの必要

と云つて再び暫時の間に仲直りする洒落をなすべし。文學者の交友は膠漆の如くならんよりは寧ろ泡の如くなるべし。然らずんば水と油の如くなるべし。然らずんば消炭の如く爛るも頗る早いが消ぬるも極めて早きをもて特色となす。

今又平生の心得を云は、文學者は時たま留守を遣ふをもて極意となす。強ち多忙あるが故に詮方なく不在を詐はる拙策を取るにわらずして、留守を遣つて見ねば大家らしくなきが爲にチヨイと此惡戯をする也。

「誰が来たから留守と云つた」  
「面倒臭いから會はんかつた」  
「五月蠅いから断はつた」  
「心持が悪いから留守を遣つた」  
「昨日は一日留守だと云つた」  
「當分の内は留守といふ積りだ」  
「是等は多くの文學者の口より唾の如くハ子る言葉也。」  
或る大家は己れの不在に公然の不在と内々の不在との二種あるを宣言し。或る大家は誰うれに限りて必ず不在を詐ると名言し。或る大家は縦令紹介状あるも

如何にも  
ウツラし  
く留守を  
遣ふべし

初對面の人には決して會はずと断言し。又或る大家は異種類の人には留守を遣ふの定例なりと高言しぬ。是等の人皆大家たるに耻ぢず。人既に大家とありし後輕々しく面會しては大に見識を損するが故に不在と詐るも妙なり。二度も三度も無駄足をさせた處で畢竟幾度も來る者は用ひあるに違ひなければ更に接待の道を缺けるにわらず。云はゞ足を運ばせる度に隨ふて此方の見識が一段づゝ上るといふものならずや。又更に歩を進めて云へば如何にも本統らしく留守を遣ふは妙ならず。誰にも感附く様に、例へば一寸後姿を見せるとか或は特に奥で話し聲を聞かせるとか若くは態々間の悪るさうに執次に断はらせるとか、兎にかくヒンボクをポンクラにも「はゝア留守を遣ふナ」と氣が附く様に不在と詐るをもて愈々妙なりとす。此時若し影にて「あの男は留守を遣ふ」と噂されるれば直様おれも大家となつたと已惚れて少しも差聞なし。萬一留守を遣ひ損ねて化の皮が露現れたとしても、ろこは文學者あり、竹を割つた様を露落肌で「あッはゝ……」と笑つて誤魔化す事を知てゐる。

ひかし或人中井履軒を訪ふて其平生無沙汰なるを謝せし時、履軒云く否亦無沙汰の方がよし度々来ては甚だ困るト。又木村蓬來は客を戒めていへらく、用あれば来るも可なり用なくんば決して来る勿れト。又或人債鬼の襲來せし時云へらく主人不在なりト。債鬼肯かすして曰くろこにゐるではないか。爰に於て主人障子の影に隠れて「見えるか……見えなければ則ち不在なり」と。事古き隨筆に見ゆ。

先例既に斯くの如く多ければ、文學者は留守を遣ふも可なり、斷乎と客を謝絶するも可なり、隨分無駄足をさせるも苦しからず、時には詐が知れて苦笑をするも又頗るよし。

「何曜日接客日」、「何時より何時迄來客に接す」、「紹介状なき者は面會を謝絶す」、「何分以上の談話は御断り申す」といふ如き札を玄關若くは應接室に掲ぐるは頗る事務家に類するの感あれども之れ中々に主人が世に咄めける大文學者なる事を證明するに足れば夢々此心掛忘るべからず。

文學者は人に訪はるとも人を訪ふ勿れ。取分け後進生を訪ふ事は見識を下ぐ

れば必ず無用也。近き頃魯西亞のペテルブルグ大學に留學せる日本人某一文を草して或る雜誌に投寄せしに、文豪トオストイは讀んで太く歎稱し直に其大學の教授を介して面會を求めたりといふ。日本の今の文學者は却て其見識を下ぐるを恐れて絶えて這般の事を爲さず。

之を日本現今の政治界に於て見るに、在朝の人は決して在野の人を訪はず改進黨員は曾て自由黨員と席を同ふせず。若し萬一にも事ありて往來すれば無数の蜚語は忽ち四方に喧傳す。文學界も亦之と同じ。何等の主義なくして結合せるにも關らず一の黨派に屬する者は必ず他の黨派に連なる者を訪はざる也。偶さか往來する事二次三次に及べば其首領たる者は嫌味半分を交せて之を警戒す。

文學者は心ずしも實際家にあらねば唯往來尋訪にのみ心を勞らすは美事にあらす。然れども今日の東京社會の如く、政事家は政事家、宗教家は宗教家、文學者は文學者と各々特殊の結合を爲すべからず、不義なるに、其上にも全に文學界を更に分割して其極小世界に於て若くは常識の上より定めし窮屈ならんと思はるれど此窮屈を何とも思はぬが即ち今の文學者の愈々エラキ處あり。



淺草の觀世音菩薩は御像の丈一寸八分にして十八間四面の大伽藍に住給ふ。今の文學者は六尺の身軀を屈めて却て燧箱ほどの天地に棲息す。塵を着て塵の中に隠るゝ蟻虫の生涯とは豈に是れ今の文學者を形容せしものにあらずや。文學者の交友は狹きを尊ぶ。及ぶだけ其區域を限りて他人の入るを許さず、恰も平家の落武者が海も陸も源氏の白旗翻へるを見て恐懼し山又山と分入りて溪極まり水盡くる處に盤據家を作り漸く安心して舞樂管絃を樂むが如くに。是れ然しあむら文學者を以て平家の悲境に陥りたりといふにあらず。松風蘿月に心耳を澄すも夢の通ふ福原の榮華に昔を忍ぶ涙せきあへぬ平家の落武者が運命なり。芥子粒の中に家を作りながら廣き社會を見透す如く己惚れて安らかに太平の夢を結ぶは今の文學者が中々に有がたき處たり。並木五瓶は筆を執る時は世界に臨む心掛なかるべからずと狂言作者を戒めしが抑も燧箱の天地を作りて唯我獨尊を極込むもの如何で此無盡藏世界を筆の先に操つるを得べき。而して此出來さうもなき仕業を造作かく遣つて退けるが故に今の文學者を目して頗るエライといふ。

ゲーテの生涯を見よ、如何に渠が學者と往來し王侯と結び政治家と接し婦人小兒と遊び優人俗官と相尋訪せしことよ。又たドストエフスキの一代を鑑みよ、渠の惡漢兇徒と眠り野人僧父と語り渴者飢人と談じ貧夫賤民と交はり而して同時に學者縉紳と款語し佳人淑女と嬉笑したりき。全じ羽の鳥の共に集る。此俚諺の眞理は最も能く今の文學界に於て現る。文學者の交友の同じ様に新聞に寄書し同じ様に小冊子を作り同じ様に駄洒落を吐き同じ様に酒を飲む仲間のみ止る。良禽の木を擇む、文學者は友を限る。ゲーテ或はドストエフスキの如きは今の文學界に於ける交友の心得を知らざるものといふべし。加ふるに文學者の交友は極めて物質的あり。少陵の『貧交行』若し唐時代の文學社會に憤慨して咏みしならば今の文學界に翻手作雲覆手雨の好句を吐く者必ず有るべし。勿論今日の惣てが物質的おれば袖味暗に舌打する往日を學ぶべくもおらねど昨日相携へし者が今日餓境に瀕するとも見て見ぬ振する手際さうどの現金過ぎたる事あらずや。ジョンソン一派がサヴェージの爲に力を盡して奔

走せし好話は今の文學界に求めんとするも決して得べならず。サヴェージは放浪無残ある悪詩人にして負嶺山の如き中にあるも更に省慮なく行南蒙を極め濫費益々多く或ハ官に訴へられ或ハ飢餓に瀕し終に牢獄の裡に悶死したれども渠の友は猶ほ此放埒男を棄つることを爲さざりき。噫、サヴェージにして若し今の文學界に生れしならば如何。縦令渠は獄裡の苦を嘗めて亡びしもジョンソン時代に生れしだけ責めてもの幸福といふを得べし。

ジョンソンは慈善の人なり。乞食は「ジン」或は煙草に浪費する事多きが故に益々之に施與するの必要ありと云ひしほどの慈善者なれば其諸友に接するに厚かりしは當然なれども如何に信切に渠がゴールドスマイツを愛厄の中より救ひたるかを讀まば百載の後猶ほ人をして涙襟を沾さしむるもの多し。

然れども昔は昔、今は今なり。今の文學社會にジョンソンなきは是れ文學者の特に冷淡浮薄なるが故にあらすして十九世紀の文明の物質的に流れし結果のみ。達人は世と推移す。文學者の須らく物質的の社會に伴ふて飽くまでも冷淡浮薄なるべし。道德上の缺損少しいていもわらば直ちに其罪を憎んで其人をも憎むべし。

ジョンソン

文學者は冷淡浮薄なるべし

乞食増殖策と怠慢奨励法

文學者は平凡道德を顧みず

べし。縦令道德上更に缺損なきも貧に陥りし者は身から出た錆なれば遠慮なく唾棄すべし。又縦令數奇にして運拙かく不幸の境遇に落ちし者ありとも是れ自然の結果にして詮方なければ目を睡つて知らぬ顔をすべし。

貧者を憐愍の境に救ふは乞食増殖策あり。懶惰者を困危の中より助くるは怠慢奨励法なり。十九世紀の道德は勤勉を基礎と爲すが故に斯くの如き拙策を執らずと雖も不幸にして此「怠慢」なる一種の精神病に罹りし者ありとせば之を罪惡の奴隸となるに放任して顧みざるを以て徳義に協へりと爲すべきや。況んや一度は一つ鍋のものを箸にて奪合ひし友が偶々世に遇はずして不平を醸し若くは一時の心得違ひにて道德上の缺損を招き之が爲に不幸の域に墮落せしものを弊履の如く棄て、顧みざるは抑も閑々侃々の情となし得べきや。

おらず、何から何まで御存じの文學者豈に此位の道理を知らざらんや。たゞ然しおらば流俗以外に超然として高く標置する文學者いかに俗社會の道德に律せらるゝ事あるべき。文學者の飽くまでも是等の平凡道德を棄て、一朝事あらば蜜の如き交情を變化して氷の如く冷かにすべし。文學者は勿論朋友の爲に生れ

樂てし友  
罵るべし

たるにあらざれば二人や三人の友を犠牲にするも我が富貴功名は盤毛も指せざらん事を勤むべし。  
獨り一度は兄弟も管ならざりし朋友を弊履のごとく棄て、顧みざるのみならず、一端棄て、後は馬鹿なり狂人なり阿呆なり無氣力ありと随分口汚さく罵るは却て損耗せる元氣を鼓舞するに足れば至極遠慮なく悪口を叩くべし。蓋し人は意外ある嘲罵を受けて奮發心を起す事少からず。スウカフトが大學に落第して諸友に毀笑せられヂスレリイが初演説に冷諷を以て喝采せられし如き皆他日の成効の基因たりしをもて見れば岩をも透す人間の一心は肺腑に徹する耻辱を受けし刹那の忠臣が其主君に向てすら吐きし處なれば何ぞ傾蓋の情に於て憚る事あらんや。勿論本人の爲なれば思ふ様骨身に染みるは恰も師直が判官を罵る如く口を極めて譏諷すべし。但し面前に於て罵るは『粹』道の深く戒むる處なれば陰にて自然に本人に感通する程思切て罵詈訕弄を遣ふし更に毫釐だも寛假する處あるべからず。

娼婦の心

友に棄て  
られし者  
の愚痴

文學者は一ト度席を共にすれば忽ち刻頸の如く語りひ、僅に物質上の缺損或ハ精神上の小瑕瑾あれば直ちに土地の如く之を唾棄し、而して猶ほ本人を奮發せしめんとする信切心より裏店住ひの匹夫匹婦すら口にすまじき罵詈を加ふ。  
朝に源氏を送り夕に平家を迎へ越人に喃々するの口を以て楚人に媚を獻す、世甚だしく娼婦の情を憎む者多し。然れども傾城に誠なしとは誰が云ふた野暮の口から行き過ぎき、手練手管を看板とする水商賣には縦令奥州の眞情なきも何をか咎むべき。若し夫れ日平曼の衣裳博士を備來つて今の衣冠する人、道徳を説法する人、學理を探究する人、慈善に奔走する人の衣を褫ぎ取らば娼婦の心ならざるもの果して幾人か有る。獨り文學者の流石に流俗の上に超然たれば曾て娼婦の心を有たざるなり。文學者の斯くの如く朋友に親しみ朋友を棄て而して信切心の爲に惡言するは娼婦の心を有つものにあらずして大納言様の御勘癖あらば也。娼婦の心と大納言様の御勘癖——文學者の俗人と異なる豈に夫れ豚の子と狗の子との相違あらんや。  
度量大海の如き孔夫子すら少正卯を誅せり。烈性大納言様に等しき文學者いかに

今の文學界には眞の交友なし

でか其友を棄つるに躊躇すべき。是れ強ちに棄てる者の勝手にあらずして棄てらるる者の自業自得なり。然るに又棄てられし文學者は——(若し光譽ある文學の天職を有つ者にして其友に棄てらるる如き事あらば)——我が自業自得には心附かずして漫りに他を垢罵して輕薄なりといふ。偶々眞面目に忠告する者あれば却て才子流と呼び僞善的と斥け惣ての信切交誼を一彈指の下に掃蕩し去つて己れは別に妄想世界を造り愁然索居して泥龍の嘆を洩す。

惣ての人は鮑叔にあらず。然るに己れ管仲にあらずして世に鮑叔あきを嘆するは非あり。棄てる者も文學者、棄てらるる者も文學者おれば畢竟「タドポール」の離合聚散と全しく何等の意味あるにあらず。意味なくして結び意味なくして分る、何ぞ特に輕薄なりといふを要せん。

一言以て云へば今の文學界には眞の交友なし。社會に向へる半面に於ては數多の小黨を樹立せるにも剛はらず、情に於て相愛し智に於て相敬し固く結託して雷霆といへども割くを難んずる交友の決して之を求むべからず。然れども此眞の交友なきこと今の文學者が揃ひも揃つて千載稀に生ずる大豪傑たるを證するに足るべし。「千年以前若くは千年以後にあらずんば我が友を求むるを得ず」と柱に凭れて嘯きしは長州の元就なり、「人は自己に似たる者を好む臣は愚人の友たるを恥づ」と王の前に揚言せしは伊太利のダンテ也。今の文學者は交友の情あきにあらず、唯その情を捧ぐるの友なきのみ。文學者の大才は能く元就、ダンテに恥ぢざるの言を吐くを知る。

又然れども友あきに安んじ塊然獨處して箕濮の情を歌ふは偏狹頑硬の形なれば今の文學者の之を學ばず。兎角不平は恒の心なきに出づるものなれば「己は不平なり」と吹聴するに等しき舉動は一切無用也。縦令へば眞の交友に乏しとするも表面だけは飲んで馭洒落を吐いて手品を遣ふて茶番をして天下泰平國土安穩を歌ふの遙に勝れるに如かず。樂天！樂天！文學者の飽くまでも樂天教を奉じ醉生夢死主義を守り飲んで馭洒落を吐いて空々寂々。噫、樂天！噫、醉生夢死！

樂天的醉生夢死主義の結合

文學者の團結なるもの即ち此樂天的醉生夢死主義の結合せる「かるめら」然たるものあれば文學社會に交友を求め世間の人に金箔附の文學者と思われんに

樂天的  
生必死  
の解

文學者  
は  
絶對  
主義  
から  
來る

談話

は第一に此樂天的醉生夢死主義を理解して之を奉ずる覺悟なかるべからず。何をか樂天的醉生夢死主義といふ。曰く萬事に空々寂々として、デイリ、茫然と月日を送るをいふ。左次郎茶目青生涯の如き即ち是也。生涯一事業を爲さざるも可なり。社會人事は顧みざるも可なり。唯目前の名利に汲々として内には群犬肉を争ふの情を殆しなから外には御前三太夫の禮讓を示す。偉なる哉、醉生夢死主義！

文學者たらんとするもの及び既に文學者の豫科生たるもの、此處の、コツを飲込む事肝要なり。然れども絶對ある醉生夢死主義を奉じ第二の元政亞流となるは白痴の極度なれば目前の名譽利益は随分食るに油断なきを以て今の文學者が流儀となす。左次郎茶目吉すら飛鳥山の茶番に如何に工風を凝したるかを推究すれば今の文學者が生平修養する處略は察知するに足るべし。

試に天機を洩して渠等が團圓の摸樣を説かば、

談話——文學者の談話は極めてタウ、イなく少しも纏まりの附かぬを尊としとす。眞面目にて且つ根底ある話柄は最も大禁物なり。徂徠が炒豆を噛みながら古今

宴遊  
井に  
飲酒

今の豪傑を論じガナライルが咄々として獨乙の哲學を談する底の好話の容易に聞くを得ず。夫れ味噌の味噌、臭きが上味噌にあらざるを知らば文學者の談話が文學者らしいからざるも何ぞ怪むを要せん。渠等が放浪なる少年若くは輕薄なる幫間或は柔弱なる婦女子の口吻を擬るは即ち是れ大文學者たる所以也。

宴遊——文學者集まれば必ず酒を飲む。文學者は勿論禁酒會員にあらねば博物館に陳列せる魚介昆蟲と同じく「アルコール」漬となるもよし。古への詩人皆酒を飲む、下戸の作りし詩にすら『對酌』、『泥飲』、『玉山頽』、『壘頭醉』等の句あるをもて見れば酒と詩人は到底離れぬ惡縁なるべし。詩人既に然り、文學者豈に大に飲まざるべけんや。

酒を飲まば須らく劉伯綸を壓倒すべし。一盃を飲むも上戸、百盃を飲むも上戸かれハ一ト度盃を唇に接せし曉は少くも一盞夜は是非とも飲明かさざるべからず。一ツ座敷も面白からざれば甲料理店より乙茶屋に行き丙鳥屋より丁蕎麥屋に轉じ其處ら中を飲歩くも一興なり。若し斯る場合に辟易して中頃より逃出す時は與怯なりと笑はるればゆめ、要慎すべし。

益田鶴樓の容を喜び酒肉席に絶えず酔へば則ち杯盤狼籍の中に頓睡す。十返舎  
 一丸は猪口を手にすれば本屋の督促をも怠れてグビリ〜と一日を飲暮す。酒  
 なくて何のおのれが作者哉。苟くも文學者たらんとするものは古今の文人に鑑  
 みて少くも一升の酒を飲まざるべからず。  
 飲んで而して後何をか爲す。文學者には頗る藝人多し。十六藝を綜ぶる柳澤淇  
 園の如きは扱置き桂山彩巖の樂律に深き益田鶴樓の俗曲に通ずる、近くは大槻  
 修二先生の河東及び園八に於ける、福地櫻痴先生の琵琶に於ける、若くは劇評  
 の大家黄表紙の大通とし尊まる、何某先生の初代段十郎の聲色に於ける、福助  
 種をもて名高かりし某新聞の主筆それがし先生の布袋踊に於ける皆夫れ妙の妙  
 を極めざるはあし。文學者須らく隠し藝を研究して之を宴席に披露するを怠た  
 る勿れ。(但し美人席に侍せざる時はシラを切るが與ゆかしくてよし)。縦令歌  
 澤の調子外れにても苦じからざれば遠慮なく嘲魔聲を振立てるが通なり。縦令  
 一音ありとも痛ばじった聲を出して福助だと講釋を附けるが通あり。  
 藝自慢が一層長じると茶番の催となる。勿論萬事大道具にして口上茶番の比に

あらねば酒の舉句といふ譯には行かぬ。此時は中々の大騒ぎ、恐らく三馬若く  
 は鯉丈の筆を借らば三冊物十二編位作る事容易なるべし。

一ト頃西洋熱の流行せし時、英語會の餘興に『ベニス商人物語』活人畫に『鳥  
 羽の里』を演じ、事ありき。又シルレル、レッシング等戲曲家の逸事を見れば  
 身自ら劇を演じ、同好に示したるが如し。然れども是等皆素人臭くして面白か  
 らず。我の文學者連の殆んど黒人を凌駕するの藝人なれば、或時は紳士の別荘  
 にて、或時は櫻雲臺國遊館等にて、甚だしきは某の往來にて數多の公衆を傾倒  
 せしめし事さへありといふ。昨二十六年の末某の宴會にて四五の新開記者兼通  
 人的文學者(?)の偶々隠し藝を披露せしに二三の新開は大に其品格を傷く  
 るを毀りたれど、之れ文學と演藝との關係を知らざる野暮の言草なり。夫れ一  
 人にして作劇家となり俳優となり道具方となり衣裳方となり振附より限取の化  
 粧まで自ら之を爲すに到つての多藝なりと云はすして可ならんや。況んや時ど  
 しては専門家をして劇評を書かしめ寫眞師をして扮装のまゝを撮影せしむるに  
 於ては既に素人藝の上に出でる數十等。

藝と云つて善きか悪しきかは知らぬを爰に朗讀なるものあり。之れ亦交友の一助として重んぜらる。此朗讀は坪内、關根、櫻庭等諸先生の首唱せられし處にして最も進歩せる文學者の慰に相違なきはエドウキン、アーノルドが二圓の聽料を課して鹿鳴館に『世界之光』を朗讀せしをもて知らる。



且つや坪内先生は曾て國民之友に於て長々と朗讀法を解説せられたりき。然れども朗讀法は到底天が無藝文學者に惠與せし一藝たるに過ぎず。文學者は元來藝人なれば餘りに無藝にして恥かしと思ふ者は此朗讀法を研究すべし。勿論御神燈をふら下けて朗讀の師匠をする者もなければ精々勉強して自己流の節を工風し隣近所の水藝に癖をいらせるべし。修行積みし上は箱根に出張して首尾能く旅宿の下婢を驚かす様になればモウ占めたものと思へ。

勢ほ他を  
にあらす  
を自ら  
を樂まし  
むる也

大率春菫  
學者  
今の文

惣じて是等の遊藝は交友の一助となして便宜なるものなれども、他を娛ましめんとするにあらで自らを樂ましむるものなれば對手の迷惑に更に斟酌すべからず。随分同席の者がモ、ヂくして欠伸を噛占めるまで自分だけに面白く興を添ゆべし。文學者の藝の友を困らせるをもて其主意となす。此故に謠曲を囁りしものは遠慮なく節附の講釋をして脚聲を振染り、茶の湯を稽古せし者の矢たらに薄茶を飲ませんとて變な手附をさす。影で舌を出して笑はるゝども目の前で中々お上手だと追従云はるればホク、喜ぶが今の文學者の特色なり。

むかし徹山の法王音律を好み大率春菫が善く節を吹くを聞き使節をもて之を召す。春菫堅く辭して曰く余は儒生なり儒を以て召さるれば元より怨を俟たず然れ共私かに嗜む未技を以て王門の俗人であるは余の欲せざる處也。百有餘年の歲月は學者の見識を一變して、今自ら進んで下手の藝道を披露し諸人の見世物となつて得たり。是れ然しあがら文學者が「藝な一ぢやア交際が出来あゝいから」といふ哲學に出でたる也。春菫は王門の俗人たるを恥づるを知れども法親王と交るに嗜みの音律を以てする方便を解せず。今の文學者は交際を弘め

文學者の  
眞心吐  
く事なし

十七世紀  
及十八世紀  
の英國  
文學者

んが爲に見世開き、夷子講、或は新年忘年等の宴席に茶番を御覽に入れ歌澤を  
お聞きに達し手踊聲色手品に愛敬を添はるの法に熟す。吁、エライ哉文學者！  
朗讀をして酒の酔を醒まさする如きは之と比較すれば最も氣のさかぬ藝なし猿  
といふべし。  
惣て文學者の交際は眞心を吐いて奥底なく語りひ艱難相救ひて苦樂を借にする  
といふ例は更になく、外見を專一として奥齒に物挿まりたる言草をならべる歟、  
然らずんば萬里の長城を其間に築く振舞を示すをもて極意となし、偶々「アル  
コオル」の爲に其嚴重なる用心弛み本色を現示する時ハ駄落洒交りのすっぱぬ  
き聞苦しき文句をべらつかして祝として平氣の平三なり。  
十七世紀より十八世紀の初に到る英國の文學者は概して放蕩無殘にして寧ろ道  
徳に觸るゝも仕たい三昧の悪戯を仕盡さざる時は文學者らしからざる心地した  
るが如し。當時に於ては道徳の缺損ハ少しも社會の制裁を受けざるばかりか華  
美豪華を極めたる流行社會に於てハ恃徳の汚點を有つ者却て歡迎せられたりき。  
オートウエイの如き即ち其好例也。縱令渠ハ終に饑餓の淵に瀕し道途に乞食し

信用なき  
愛好なき  
密交

ウヰリヤ  
ム、アラ  
遊ツクの交

て一紳士より「ギニー」の惠與を受け久し振の麴包に舌打して僅に一ト口を  
嚥下するや數日の疲勞の爲め忽ち卒倒して亡びし慘絶の最後を速きしと雖も、  
如何に渠が榮華の日に於て有らゆる輕薄の數を盡して猶ほ人に嫌はるゝ事なく  
却て其同朋の間に優待せられ名利の寵兒と花やさしかを見れば略は一般社會の好  
尚を覗ふに足る。シエンストン或ハサグエロジの如き今更云はざるも可也。  
恰も我々の今の文學者間に於ける交友の情態はやく此觀を爲すに似たり。ジヨン  
ソンの語を借りて云は「*their fondness without veneration, their familiarity without  
friendship*」信用なき愛好と友愛なき親密を結びて飲んで且つ笑ふだけを主義と  
あす。しかも其交友の極めて少數に限らるゝは水溜の中に蝸蝓の相追逐するに  
全じ。

ウヰリヤム、ブラツクは交際家あり。パツキンガム街の僑居に於て數多の客に接  
し改革俱樂部に列して朝野の政客と談する外ブライトンの閑居に退いては夫人  
と共に來賓を管待すに忙がしく、渠の家ハ殆んど歐米各國の名士が安息所且つ  
伏匿所たる如くなりといふ。渠は曾て一人の客に誇つて曰く、朝にはツール來



り夕にはスペンサーを見る我が家には美術家と哲學者と政事家と實業家と軍人と文學者との團欒を作るを得べしと。渠が述作の價值は爰に云はず、(开は勿論別問題なれば也)唯實際の一點に於て小説家たる渠の範圍如何に廣きかに到底我が文壇の諸先生と比するを得ざるあり。

ポーブは形侷にして心偏狹なり。しかも其實際の極めて廣くして頗る寛量なりしは渠の書齋に集まれる人さまざまの心餘りに異へるをもて知らる。皮肉なるスウキフト、粗剛なるアツターベリイ、温厚なるスペンス、嚴峻なるウオーバートン、徳淳なるパークレイ、不徳なるポーリングブローク、軍人ビーターポロオ、詩人グレイ、機才あるコングリーブ、愉快なるローウエ、奇矯なるクローンウエル、頑硬なるバサースト、皆是れ卓を共にして談笑せる者なりき。

若し夫れジョンソンのボスウエルに於ける、グレイのフルポールに於ける、カアライルのチンダルに於ける、ブラツクのフライトに於ける如きを問はば我が文學界に其例を欠くといふも可也。

文學者の交友夫れ斯くの如し。此故に他の學術宗教政治實業等の社會に於ては

不完全ながらも團欒を作りて互に各自の専門に屬する智識の増進と交友の親睦を計りつゝわれを獨り文學社會に於ての竟に此種の組織を見ず。一ト頃徳富森田朝比奈等の諸先生が先棒となつて組織せられし萬代軒月次の會合の如き萬代軒の歿落と共に消滅して、今に浮名の殘れるハ龍溪先生の大演説、青萍學海二先生が大議論なりかし。又近く去年の秋以來催されし築土文學會とやらはまた漸く二度か三度集まりしだけなればよもやと思へど其消息香として聞くなさは心細さの限りならずや。曰く樂々會、曰く硯友社、曰く何、曰く何と、數は澤山われを皆是れ飲仲間、洒落仲間若くは茶番御連中たるに過ぎず。

文學會なるもの何ぞ。今の文學社會に於ける有効無効或は必要不必要は爰に云はず。唯夫れ異主義の者一堂に會して相談義し生平互に見ざる者交を新たにするの興趣あるに於ては之を全く無用なりと云ふを得ず。然るに今の文學者は餘りにエラクして他人の説を聞く必要なく、餘りに超然として世の交を求むるを嫌ふが故に、異分子の團欒に入るを欲せずして、毎日顔を合はせる同町内の者か或は師弟の關係ある者同士が寄合を附けるをもて樂となす。

ジョンスンの文學會は會員少けれど異分子を糾合せり。アチソン、コングリブ、スチール、ゴールドスミス等の文士は姑らく置き、理財學者アダムス、政治哲學家バルク、美術學者レイノールツ、殊に俳優ガアリツクを一堂に聚めしに到つては我が文學社會の情態より見て奇とせざるを得んや。然れども之れ決して奇ならず。前にも説きし如く日本人本來閉鎖主義なれば文學者も奥深く書齋に垂籠て座禪面壁浮世は斯うだあ、だど生悟りに澄し込む流義を尊ぶ。唯然しながら「通」と云ふ持業を朝夕服用するお蔭に外觀だけは此流義を棄て、「兎角浮世の味は試めて見にや分りません」といふ申譯を作つて己が軟弱なる舌に適する甘味だけを賞翫する傍ら、「它山の石の磨くべしとやら」と口だけ賢い言を陳べ、好きな名を



附けて大家陳列會を催す事少からず。都々逸の好きな者の無盡に等しき餘興を添えて慾を餌に釣出す都々逸會すら仲々永續出來ぬ日本人の根性にて、道樂を犠牲にして眞面目を街ふ會を起すもかどか首尾能く持續するを得べき。世界を家として太陽會で歿せずと誇る英國に行はる、交際法の燧箱籠城主義の日本に行はれずとも何の不思議あらん。岐阜の大地震百度揺つて日本の天地悉く顛

倒するも、詩人と科學者と小説家と相場師と評論家と工藝家との會合を見る事仲々に難かるべし。試に今の文學者の會合を透視するに、平生最も多く顔を合せる者が二三人宛わちらにコソ、こちらにヒソ、ヒソ、恰も秘密の相談をする如く音を鳩めて低語き宛がら人に聞



かれん事を厭ふに似たり。此故に一人の親交なくして席に臨まば容易に談語相手を作る事出来ずケロリカンとして茫然たらざるべからず。質に取られし啞の苦痛を嘗めたき者は須らく文學會に臨むべし。去かも猶更辛きは態々會費を拂つて無言の行を修めに來たばかりか面白い顔の一ツ位いせざるべからず。殊に一層辛きは名士の大演説を拜聴して是非とも絶跡絶命に敬服せねばあらぬ義理づくめあり。傍聴者の義務は演説者をして『己の演説をみんな感服して聞てゐるナ』と信せしむるにありといふは文學會に於ける倫理の法則なり。文學者は必ずしも多言せず。勿論平生無用の饒舌を弄するに極めて得意なれども斯る會合に列する時は妙に人見しりをして何かの問題出づれば甲讓り乙辭退し各々逡巡する算段を廻らす。此場合に限りての謙遜辭讓誠に古聖賢に耻ぢずといふべし。然れども此謙遜辭讓も席暖まれば忽ち冷れて持前の放言漫罵座客を呆れさせて以て得たりとなす。偶々『沈黙の冷笑』を加ふる者あるも、却て傾聴してゐ

パツクソンの言

る事と感違ひして愈々止度なく立板に水を流す辯を奮ふ。パツクソンの間に答ふらく、文學會を以て智識の交換場となし先づ交換に値ひする意見を蓄へて出席せんとするは御身の謬解あり。自ら光明を放つて厚待せられん事を望む勿れ。渠等の文學會に出席するハ畢竟他を奉戴せんとするにわらずして各々自身の燦然たるを示さんが爲なれば也。余も初めは御身の如く考へ必ず多少の研究を費やして後出席せしが、其結果は甚だ生意氣ある辛抱出来ぬ文士なりと爪弾させられ若し我が交友の仕方を改めざる時は忽ち絶交せられんとするばかりなりき。御身能く心得よ、最も上手ある聴者は最も拔群なる智者ある事を。若し御身辨舌爽かにして他と互に五分々に語り合ふ時は思ひ切て其男の著述をカラ褒めして全時に當今の作者を甚だしく貶黜すべし。萬一特別ある朋友の述作を推奨する者あれば、此時に限りて故さらに其説に反對し口を極めて之を罵るを智ありとす。斯る場合には縦令自身が推奨せし言を破られて困迫するも決して不快の感を爲さず却て得意の色あるものなり。文學者は他の瑕瑾をわばくに最も公平無私なるは少ければ御身も其所存にて當面

の人の作を褒むると共に思ふさま遠慮なく他の著書を罵るべしと。  
 クレーヨンが斯く記し、は倫敦の文學社會なれど、我が東京の文學會といふも  
 之に全しく、云はゞ天狗の鼻くらべ、突合せては互に鼻柱を折て呉れんと腕に  
 瘤をつくる殿原の寄合也。此故に文學會に臨まんとするものは鼻、喉、若くは  
 背にあらざる限は、可笑しくおきに笑ひ、逆らね著述をア、褒めし、根もなき  
 饒舌を弄し、或は時に依りて沈黙思案の跡を粧る術を學ばざるべからず。  
 『我輩も芝居に少し意見がある、實は近々の内「ドラマ」を作らうと思つて  
 既に腹案は出來てる。一昨今の「ドラマ」を論ずる黨派はシエークスビーヤと  
 かモリエルとか但しは近松をど、本尊を作るのが分らぬ。特に近松如きを尊ん  
 で丸で神の様に思ふ氣が知れぬ。大久保君なんぞも議論は甘い、畢竟處  
 第一シエークスビーヤ第二近松門左衛門第三が即ち乃公自身だから困る。何も  
 左う見識を低くするに當らぬ。我輩には我輩の天地がある、シエークスビーヤ  
 も近松もない。我輩の天地を以て一大「ドラマ」を作つて見せる……』  
 斯ういふ人は自ら光明を放つに汲々として、唯他が若しや自分をエラクはないと

思ひはせぬかと考ふるなれば何でも『はい〜』と聞流して、折々は態と乗地  
 におつて『先生が……成程、先生が「ドラマ」をお作りなれば』など調子を  
 合はして、同時に思ふさま語中の大久保君を悪くけなすべし。  
 『時に諸君、拙者は今度彌次喜多會といふを起さうと思ふ、ト云ふは諸君も御  
 承知の通り彌次郎兵衛北八の兩人は喜憂貧樂を偕にして古への管鮑の交を結ん  
 だ天晴の君子だ。加之、東海道を見物しやうといふ風流心があるばかりか、道  
 々で味殘した秀吟を見れば中々の文學者と思はれる。然るに此履歴が今に傳は  
 らぬは日本文學史の缺點と信じますから、そこで新たに同志の人を得て「彌次  
 喜多」如何なる人ぞや、何を知れりや、何を爲したるや」を研究して見やうか  
 と思ひます。』  
 斯る言を吐く人は『創意』を以て任ずるなれば、其着眼を褒め其研究の方法に  
 感服し、『先生のお考は又格別だ。私も先日いろ〜古書を搜つて法性寺入道と  
 へマムシ入道と師弟の關係ある事を發見しましたが、先生のは又流石です、氷  
 川氏なんぞは三歳兒も心得てゐる歴史上の事實より外は氣が附かんから駄目で

す』と淡泊同じ黨派を毀るが妙也。

『君は牛之屋とせんの「奴だこ」を讀んだかエ、中々能く出來てる』と讚める人ある時は浮と油断すべからず、却て態と反對するが秘訣なり。『牛之屋如きもの、作を能く出來るとは先生の批評眼にも似合はない、ごせんに縁のある冷飯草履から思附いた様な奴小説がどうなるものか』といふ勢で滔々と悪口を叩くべし。先生苦笑して前額をなで、『さう悪く云つたものでもない』と内々大恐慨にて『君も中々目が長えてきた』とお讚になる。

中にはタワイなく無駄口を叩く流義あり。『どうだエ、近日の中に鯨飲會を催しては』よからう、會費はいくら』我黨は何れも紳士だから多きを厭はず』そんなら百圓では多からうか』百圓！君の方では百圓を多いとするだらうが我黨の方では一圓を甚だ多しとする』はアて子、一圓合點を行かぬ』

先づ此邊の調子を飲込み、自作の高慢を聞流し、座に列せざる人を罵り、古き洒落を吐きちらし、手製の通言を陳べたて、出放題なる議論に感服し、資本のかゝらぬお世辭を振りまけば首尾よく文學社會の一人ともてはやさるべし。

文學社會に於ける交遊は大鉢以上の如く心得べし。『No sleep any the days and drink any the nights』 喰で、寐て、起きて、飲んで、洒落れて、愚痴を覆して、不平を訴へて、自作の自讃を陳べて、世間の悪口を叩きて、おべんちやらを遣つて、調子を併せて、富貴ある時は兄弟の如く、貧賤なれば路人を以て見る、是れ之を文學者の交際法といふ。渠等が勝負事或は一般の遊戯に關し、若くハ散策旅行等に於ける交際法は管々しければ云はず。以上説く處を嘴分けて能く味を知るべし。

### 第五 著述に於ける心得並に出板者待遇法

著者を出板せずんば未だ文學者を得ず

居ながらにして文界の雲行に通じ、能く風丰態度を整へ、有らゆる嗜好習癖を覺え込み、惣ての交際法に熟じ、而して後文學者たるを得る乎。曰く否、縦令以上の事項に於て悉く満點及第をするも未だ目するに眞の文學者を以てすべからず。若し夫れ一ト度著述し大書肆より出板せられ新聞に廣告

如何にして著述すべきや

若くは吹聴せらるゝ時は則ち完全なる文學者と云ふを得。然らば如何にして著述すべきや。是れ極めて至難の事業に似たれど却て案外にも容易なるお茶漬さらしもの仕事也。(茲に著述といふは必ずしも一篇の冊子となすの謂にあらずして新聞或は雑誌に投書するを云ふ。)

(a) 人物評及び史論

(b) 批評

(c) 「ドラマ」附たり新詩

(d) 小説 序を追ふて之を説かん。の四類となし、序を追ふて之を説かん。

(a) 今の人物評及び史論——を爲す者に二種あり。一は題目の新らしさを競ふて議論の平凡あるを厭はぬもの、一は論評乃奇矯なるを誇りて問題の古きを顧みざるもの即ち是あり。而して二者共に其評論の正鵠を得たるや否やを問はざるに於ては全様なりとす。

人物評及び史論

「渠は」の使用法及び其例法

人物評を爲す者の秘訣は「渠は」の使用法なり。此故に此使用法に熟する爲め第三讀本位の直譯を詰誦する事中大切なり。今其一例を擧ぐれば、

「萬世橋の畔、砂塵捲揚がる中に一人の小兒立てり。渠は帽を被らず、此故に渠の頭ハ砂を以て白くなれり。渠の赤き筒袖は破れ渠の冷飯草履は切れて一見寒さうなり。然れども渠の傲岸ある氣象はすでに馬車の馭者を鷓香にして、一區二錢の鐵道馬車に飛乗るの權を擅にせり。而して渠が敏捷活潑にして且つ無邪氣ある「朝日新聞……一枚一錢」の聲は新聞と共に乗客の膝に投出されたり。渠は商界の麒麟兒なり。見よ、面白さうなる渠の賣聲は竟に肥満なる田舎紳士の手より一錢の銅貨を奪ひ取れり。馬鹿にする勿れ、此伶俐なる赤き筒袖の小兒を。電話、電燈、電信の針線をもて充てる萬世橋の空氣は渠をして東洋のエヂソンたらんとする希望を起さしめぬ。

成るべく廻りくゞき記述法を用ひ、日本の文法に外れる様に心掛け、主客を顛倒して誤解に陥り易き句法を工風し、耳觸りな文句を澤山に入れ、充分に直譯調を用ゆるをもて極意となす。

人物評は文章を専ら

聲色遣は鮮明なり

「開國始末」と「新日本史」

今の人物評はたゞ文章の目新らしきを尊びて、創見歟陳腐説歟は問ふ處にあらねば、文章のみを研磨すれば則ち足れり。加之、人物評の文章ハ強ち名文を欲するにあらずして従來の文格以外に馳するをもて手柄とすれば唯無法なる字句の排列を案出するだけの工風に澤山あり。平田久先生の「カアライル」或は高木伊作先生の「ゲーテ」を讀まば思ひ半ばに過ぎん。

惣て聲色遣は癖を眞似るが肝心なり。人物評を作らんとせば勢ひ徳富氏の聲色遣はざるべからず。而して徳富氏が近日の文章は頗る絢爛の域に達したれば著るべく其文癖の露れたる「將來之日本」或は「國民之友生れたり」時代の文を學ぶをもて最も賢しとす。且つ徳富氏の文致は本と西文より借り來りしければ其本元たるマカオレイ文の直譯を精々勉強して移植すれば忽ちヤンヤと云はるべし。

島田鳥山先生の「開國始末」はマカオレイに似たりとの褒辭を受け、竹越與三郎先生の「新日本史」はマツカアシイの如しとの讚評を辱ふせり。然れども此大批評を捧呈する人も果して何れの點がマカオレイにして如何なる部分がマツ

カアシイなるやを知す。偏に從來漢儒が漢文にて著はし、者を俗文にて書きしだけを隨喜渴仰せしに止まる。岡鹿門氏が「尊攘紀事」の如きも若し俗文を以て書し四五の外國語を交へ紀傳の順序を少しく顛倒すれば必ずマツカアシイやマカオレイヲ引合に出して噴々せらるべきに惜むべし。

試に「六雄八將論」或は「良將達德抄」若くは「藩翰譜」然らずんば「先哲叢談」「近世叢語」の類を取り、其二三節を交互參錯し、傍らアライルの「金言集」を參考し、「渠」と「的」と二三の外國語及び四五の新製熟語とを羅織して所謂人物評然たる樹文章を作爲せよ。慈悲深き江湖は思掛けなき讚評を著者の頭上に加へん、曰く是れマカオレイの再生也ト、曰く是れカアライルの怪詭トエメルソンの靈彩を兼ねるものト。

爰に一例を擧げて其最も容易なるを示さん。

江湖傳 (節略)

(上略) 江湖の斯くの如く多角的なり。然れども渠の心は極めて無邪氣にして、恰も生ける紙屑籠の如く、常に故紙汚物を以て充たさるゝといへども更に不平の聲を洩さず。又時としては眞珠珊瑚を投込まるゝ事われども、渠は其眞價を辨知する能はざりき。渠は實に生ける紙屑籠なり。

此故に渠は美妙齋を謳歌し、春酒屋を歡迎し、硯友社を欺語し、根岸黨と結託し、或は浪六茶屋に壯語を吐いて東京文學の寂寞を破り、或は「闇の世の中」に彷徨して社會の腐敗せるを叫破したり。而して放肆なる驕兒の常として、渠は意氣投合せる友に遇へば直ちに名譽の玉醜を捧げ讚稱の聲を揚ぐるに蜘蛛せずといへども、一端厭倦の情を起せば之を唾棄して顧みざるのみならず、惻利天の上より奈落の底へ突落して踊躍三百以つて第一の快樂となす。夏桀殷紂の驕暴も猶は渠の慘酷に及ばざるなり。

渠は曾て空想を吟唱して樂めり。今や渠は古今の人物と手を携へて治亂興亡の蹟を論議せり。渠が人物評時代は來れり。時は明治二十六年十二月。渠は條約の履行を絶叫し、國會の解散に赫怒せるの日、「王陽明」を一蹴し、「吉田

松陰」と相抱擁して社會を睥睨しぬ。嗚呼、是れ朔風電雪を飛ばし、滿目顧に荒涼たる十二月の天なり。

渠の言動何ぞ夫れ何々盪々として規律なきの甚だしき。渠は沈鬱なるが如く、いて却て噪狂なり。渠は誠見あるに似て、案外にも盲目なり。渠は一個の「ブリンブル」を善へず、否、「ドクマ」すら有たざるなり。渠は無學文盲にして定見なきは八ッ目鰻よりも更に數多き渠が眼の如何に暗然として枯魚の如きかを見て知るべし。(以下略す)

此意味もなく、面白くもなきものを氣紛れな世間が何か有がたさうにステルンとかシドニイ、スミスとか言嘯して呉れる、( )だらうと此作者即ち金平門下の一人は氣を揉めり)要するに人物評は文章で賣出すものなれば平生「十二文豪」を初め民友社諸先生の文味を咀嚼し其調子を飲込む事肝心なり。

既に其調子を飲込めば安積滄泊、中井竹山、頼山陽あたりの論贊文若くは「神皇正統紀」「東鑑」等を材料として日本の大歴史家を極めるもよし、又「Foolies of the world」或は「English Men-of-Letters」に頼りて西歐人物評の大家となるも可



詩人哲學  
の傳を  
得る心

湖處子先  
生ウオル  
ツウ

田舎牧師  
の人物評  
の著者

人物評の  
別派

なり。社會は事物を稱賛するの美德を有するが故に其眼光の銳利靈活にして且つ精透深刻なるを推奨して止まざるべし。

詩人或は哲學者の傳を序するには大いなる識見と廣き學問を要す。少くも外界と隨伴し若くは逆行せる精神上の歴史を詳かにせんが爲め其惣ての著作——斷簡零緒までも研究せざるべからず。然れども今の人物評を爲る者は此迂遠なる道を探らずして直ちに前人の攻查せし結果を収めて我が物となす。此故に *Thackeray* を讀まざる人も *Chateaubriand* を讀まざる人も *Goethe* の傳を作るを得べし。否、*Flaubert* 或は *Grün* の手に成れる傳紀すら細く事を爲さずして。

湖處子先生の『ウオルツウオルス』に於ける浮名の如き本より口善惡なき京童の飛語たるに過ぎず。誰か博識宏聞、殊にウオルツウオルスに私淑する先生が其傳紀と其全集に精通するを疑はんや。然れども今のお手輕主義人物評時代に之を公けにせしは則ち先生の不幸にして、寧ろマイヤースが著し、傳紀を其まゝに翻譯するの智あるに如かざりき。

アヂソン曾て田舎牧師を贊稱して云へらく、渠は能く己れの肺腑より出づる説の餘りに拙陋なるを知りて有名なる都會牧師の説を丸取りに——其身振聲色までを摸擬して直ちに其人の説教を聞くの思あらしむ、庸劣ある自家の心を蔽藏して秀拔なる名士の口吻を傳語す、豈に是れ最も智ある者の一にあらざるや。今の人物評は則ち此田舎牧師の説教にしてアヂソンが所謂智者の一ならん事何の疑か有らん。

他に一派の人物評述中あり。此派の者は評せんとする人の著作中より二三節づゝを抜き之れを巧みに接合するの才あれば足れり。例へば兼好法師を論せんとせば『徒然草』より二三行づゝ抜き、拔萃し點綴するに四五の科語或は禪語を以てするが如し。加ふるに此派の人は如何なる人物にも厭世家、大悟者、若くは任俠等の冠詞を與ふるを極意とす。曰く「驚阪伴内は大俠骨也、十返舎一九は厭世的大詩人也、へらく坊高橋は大悟徹底の善智識也、曰く何、何、何——是にて充分澤山といふべし。

要するに人物評は難かしさうなれど『渠は』の使用法と、『日本外史』を素讀せ

批評

し者の誰でも御存じの事實を左も珍らしさうに逆寫倒挿する法に熟せば忽ち大家と云へるや近頃随一の早手廻しなり。

(b) 批評——は近來新發明の簡便法にして、今より四五年前或るエラキ人讀賣新聞に『大家とある法』を寄投し普く人々に批評家となれと勸告しぬ。批評は最も容易されば不器用なる人といへども猶ほ且つ作るに決して難からず。爰に其極意を二ツ三ツ擧げて最も働なき男の業とすべし。

(1) 先づ緒言若くは凡例と目錄と、最初、中ごろ、及び最後の二三頁を讀んで大躰を想像すべし。

(2) 筆法はどこまでも『決して感服せず』といふ意を充分含ましむる事。

(3) 若し小瑕瑾——責むるに足らざる極々の小瑕瑾を發見しなば業々しく理窟をこねつけて非難する事。

(4) 『Art of Authorship』の如きものを秘本となして文學上の金言を振まき、成るべく之に附會する多くの講釋を添ゆべし。

猶ほ此外にあれど、批評家の餘りに榮えぬ仕事なれば、殊に世間受も宜しから

「ドラマ」詩及び新詩

ねば寧ろ他の道に志すをもて智ありとなす。

(e) 「ドラマ」を作るの大家は古藤庵先生と透谷先生のみ。新詩詩の大家は湖處子、發花、操山、雲峰、紫苑、吉郎等諸先生あれど是れ亦限られたる數なり。而して今の文學界に若し天才の必要ありとせば开は儘に此韻文社界あるべし。到底天才なくんば此「ドラマ」或は新詩詩を作る事能はざる也。試に之を説かば古藤庵先生の『琵琶法師』『茶の煙』『朱門のうれひ』若しくは透谷先生の『蓬萊曲』の如き所謂「ドラマ」は勿論、其他多くの新詩詩に到る迄大抵は何の意味やら悉皆譯の分らぬほど餘りに高遠雄大に過ぐ。夫れ斯くのごとく高遠雄大なる詩想はいかで尋常頭腦の産出し得る處ならんや。非常に不規律にして、非常に紛糾せる——特に天が惠與せし非常づくしの頭腦にわらずんば中々に此作家の班に入る能はず。

叙情詩人の「インスピレーション」を重んずるは柔術に氣合の大事なるが如し。然るに今の新詩詩人は「インスピレーション」の待遠しきを嫌つて、從來有り來りの歌調を唯長くとダラシなく書き陳ねるに巧みなり。勿論此頃は種々工

「インスピレーション」

新體詩人の三病

叙詩の復興

意味の分  
らぬ  
「ド  
ラマ」  
及び  
詩の  
極意  
也

小説

氣骨小説  
家来の説

風を凝して或は禪語を交へ或は漢詩を燒直し、若くは俳諧の調を其まゝはめるもわり。要するに形はさましくなれど想に到つては千篇一律偏に陳腐ならん事を望むに似たり。湯淺吉郎先生が須磨の磯邊に夏服の巡査を見て大「インスピレーション」を燃せし俳句の外は絶えて秀抜の想ありしを知らず。

新體詩人に三病あり。無邪氣、高潔、及び優美是なり。新體詩を作るものは非とも此一病に感せざるべからず。若し三病俱に感染すれば大願成就、新體詩の大家といはれん事請合也。

新體詩人は時として叙詩の後興を説きミルトン若くはダンテの面影を渴望するは見ぬ戀にあこがるゝ處女の如く、或は細女命を中心として天の岩戸開きを咏まんと云ひ、或は斧九太夫を主人公として忠臣蔵を歌いんと云ふ。而して萬一出来上る時は之を稱して「ド、ラマ」と名く。

兎に角「ド、ラマ」及び新體詩は意味の分らぬが專一あり、恰もプラウニングの詩が晦澁險怪にして何人も解し得ざりし如く。但し無邪氣にして高潔を兼ね優美の姿を衒ふを怠るゝ勿れ。

(d) 小説を書くは最も、最も容易なる仕事なり。天下に恐らく茶漬をかッ

てむは容易きものを求めれば小説は蓋し其一あるべし。牛込派に左る者ありと聞えたる氣骨小説家曾て某生の問に答ふらく、小説を書くに當り初めより趣向を立てるは甚だ拙也、唯思ひ寄れるまぐら、いと書聯ぬる中自づと趣向の出来るもの也ト。全ヒ人また或る男に告げて曰く、我が黨の志す處は詩の意を小説的に書くにありト。

初めの説は何ぞ夫れ信切にして初心者を導くに便利なるや。初めより趣向を立てるは愚也といふ。趣向を立てずして筆を採らんとするは到底出来ない相談に似たれども此出来ない相談を見事にやつてのけるが今の小説家の極めてエラキ所以也。

又終りの説は餘り幽渺澤遠にして凡人の中々に理解し能ふものにあらす。抑も詩の意を小説的に書くとい如何ある事を云ふや。更に百解千解萬々解するにあらずんば我々俗物其域に到達するを得ざるなり。例へば江見水蔭先生の諸小説、殊に去年の夏頃讀賣新聞に連載せられし「盃燈籠」の如きは即ち所謂「詩

の意を小説的にかきしもの』なりとシヤニムニ有るたがるより外致し方かか  
べし。  
 今の小説家は悲劇を重んず。この悲劇とは何でも主人公が死ぬとか、或は生別  
 れになるとかして局を結ぶものをいふ。殊に此悲劇の主人公は「ウオーレンス  
 タイン」或は「タイモン」の如き壯絶を極めるものにあらすして癡情の塊物た  
 る軟弱婦人を興ありとあす。  
 思ふに添ふの昔の小説が面白き所以にして赤本の終りはいつも目出たし〜  
 と定まりぬ。思ふに添はぬは今の小説が賣れる理由にして團圓は必ず涙交りの  
 述懐ならざるはあし。川上眉山先生が「かゝり舟」の如き則ち此類にして愛讀  
 の令嬢方をして「はんとに可哀さうだワ」とホロリ一滴の涙を落さしむるを目  
 的となす。  
 女主人公は絶世の美貌を具へて「ダンス」或は文金の高樹に結ぶ箱入の嬢様歟、  
 然らずんば赤いてからの奥様たらざるべからず。而して輕薄なる男の甘ツたる  
 い舌の端に乗せられて殆んど玩弄物になるを知らず何事も唯々諾々として思ふ

さま自由にせらるゝはと柔弱なる淑徳を具へざるべからず。  
 男主人公も之と全しく、粹で高等で、衣服萬端をこまでも紳士風にて、七子の  
 紋附と市樂及び糸織の二枚小袖を穿つたせ織物の鼻緒をつツかけて「カメオ」  
 を環に吹く外は何事も知らず、學問も見識も抱負も志望もあく、唯兒女の歡を  
 買ふをもて生涯の目的となし、嬢様の脇の下をこそぐり藝妓の膝を枕にするを  
 むで男の能事と心得る天晴の好男子たらざるべからず。  
 男が惚れる時は女も必ず惚れる。女がいとしひと思ふときは男も必ず可愛いと  
 云ふ。是れ今の小説家が慣手の趣向なり。但し男が惚れる事少くして女が惚れ  
 る事無暗に多く、今の小説より世態を推想せば恰も男は女に惚れられんが爲に  
 此世に生れしかの如く男の身に取られて誠心丈夫の限りといふべし。小説家  
 は多く経験を寫すものなりと聞けば今の小説家が飽福萬歳なりと諸方より羨ま  
 るゝも決して無理ならざる也。  
 萬一男の方より惚れる事ありとするも其志望は必ず成就して女は忽ち惚れて呉  
 れるのみならず却て十倍の熱愛を通はすに到る。川上眉山先生の「賤機」の如

きは近頃の異例なれども、是とて嫌はれしにあらす、基督教徒の所謂聖愛は充分其間に成立したりき。『二筋道』の一重に於ける文里の如き情は中々に見るを得ず、『紅耳鐵砲』のおまんに於ける道也の情は之に似たれど露伴氏は今の文學界の變物なれば此人の文字を一般の代表となす能はず。況んや "Notre Dame" のクワシモドオとクロードフロオがエスメロオルダに於ける關係の如きは、若し之を描出するものあらば必ず文界の左道なりと斥罵せらるべし。

春酒屋先生のお辻、紅葉先生のお藤、忍月先生のお八重等皆是れ男を懐ふて男に棄てられし可憐の女性にして、浪六先生の井筒女之助、澁柿園先生の山中猪之助、思案先生の花房長次郎等何れか女殺しの尤なるものにあらざるべき。要するに今の小説世界にては昔の芝居と全しくお姫様の方よりヤイノノを極め込まざるべからず。露伴子の珠運、紅葉山人の柏壁讓の如きは少しく風變りなれど、通例男の飽くまでも移氣にして女は是非とも焦れ死をせざるべからず。戀愛小説の順序は太抵次の如し。

- (1) 女は男に遇ふて柔しうな人だと思ふ。
- (2) 男は女に信切を言葉掛けて洒落

交りに機嫌を取る、(犬抵兄さんのお友達とか、妹の友達とかに限る)。(3) 女若りに男の噂を友達に話して聞られる。(4) 男は女と相對にて甘ツたるい應待をする。擧句に女の胸の下を擦ぐる狼藉に及び、女胸を躍らし身を震はしてぼうつとなる。(5) 女獨りで氣を揉みどつおいつ空想を煽して姉或は親友に慰められる。(6) 男いつの間にか忘れて他の女と縁組をする。(7) 女鬱々として病氣にさる、男の手紙或は寫眞を出して若うに述懐する。

通例は之を骨として色々の肉を附けるだけ也。此故に其人物は或は書生、紳士、田舎漢、或は令夫人、令嬢、小間遣等の區別あれども、恰も目懸を掛けて大將となり娼妓となり藝妓となり狐とさるに全じ。又此趣向は時として多少異なるも、云々一ツ庭の趣を變へるに等しく左隅の松を右隅に移し右隅の櫻を左隅に裁替ゆるも、一ツ庭は矢張一ツ庭なり。

戀愛小説の一に實際派小説と云ふ。然れども此實際派小説とは佛露に行はるものゝ謂にあらすして單にゾオラの形に類するが故に便利上斯く云ひならしゝなり。我が硯友一派の諸先生は識見高ければ夷狄の文物を崇拜する事を爲さ

戀愛小説  
家たらし  
の心得

張扇小説

悪人の不  
必要

ず、飽くまでも西鶴兼春水主義を奉ずるなれば何ぞ之を實際派なりと云ふを得ん哉。偶々不幸にしてゾオラの "The Mowat" 或は『渠の傑作』に暗合せし作の出来し爲に直ちに實際派なりと嘲されしは寧ろお氣の毒千萬の事と云べし。此故に戀愛小説家たらんとする者は實際派なる名目に迷はず西鶴の『一代女』、『一代男』其碩の『禁短氣』春水の『英對談語』谷崎の『連理梅』其他金水、春路考、鼻山人等の諸作及び織田先生譯述の『花柳春話』紅葉先生の『臙舟』、思案先生の『京鹿子』忍月先生の『お八重』等を研究して其奥を極むべし。ゆめ、眞の實際派なりと誤解してゾオラの "The Assommoir" トオストイの "Amie Kalinda" 等に氣觸るゝ勿れ。

戀愛小説の外に近頃流行せるは張扇小説なり。張扇小説とは講釋師の張扇の音に大悟して立案せしものを云ふ。最も珍重せらるゝ材料の町奴、侠客、二本差、〇〇組、若衆、朱袴、草足袋、前額の刀傷、腕の彫物、釣上ツた眼、さらけ出した毛騙、膽のすはツた女、力のある色男等なり。

此派の小説には悪人無用なり。例へば悪人を描くとも心底の悪人でなく義の爲

『俠』

江戸ツ子  
の見本

とか忠の爲とか何か曰くありて悪を働く者ならざるべからず。獨り悪人のみならず善人も全しく不必要なり。若し善人を寫す事あらば此善人の慈悲の泉を滿腔に蓄へて貧しきを感み衰へたるを勞れるものにあらずして自ら忘想せる善事の爲に他を殺戮殘害して以て快とす善人たらざるべからず。

人の云ふ、此派の小説は『俠』を以て主眼となす。然り、『俠』は此派の最も尊重する處なるべし。然れども此『俠』なるもの、寧ろ『狂』に近きは倍大の『俠』ならざるべからず。少くも向島に接待の茶見世を出して、一椀の澁茶と三枚の煎餅を施すほどの『俠』ならざるべからず。金吾先生は敬方律の『三丁』にひかし江戸の男零落れて裏店に住みけり。以前懸念の友氣の毒がりて尋ねしに男は太く喜びて馳走をしたけれど此通りの始末にて面目ないと云ふ折、恰も夕おしの聲勇ましく綱を賣りに來れば直様呼込みて巾着の底を叩き盤盃の魚を悉く買取り直ちに溝板にブチまけ掃溜の傍に欠伸する犬に喰はせて久々對面の興を添えぬ。然るに其後再び尋ねしかば男は顔を見ると全時に窟に掛けし釜を取りて微塵になれど土間に叩きつけ、

「客人、今日は綱を買ふ錢も無エ」

講釋を聞

拙述の工

某先生の大著述

若し此微塵に釜を壊破せし老俠骨を主人公として、まかり突ン出て、毛牖をさ  
 らけ出して、二尺八寸大刀を握んで、三ピン待ツたと罵り、淺草觀音の飛ンだ  
 り躍たりたりの如く大刀打せば、立派な張扇小説忽ち出來上るべし。  
 此派の小説家たらんとするものは精々勉強して講釋——就中吉瓶、貞水、燕林、  
 伯山等の講釋を聞きに行き一心に張扇の叩き具合を研究し、二ツには軍書實錄  
 物、取別け『幡隨院長兵衛實記』或は『天保水滸傳』の類を朝夕二三遍づゝ復  
 讀する心掛肝腎なり。此上隨筆を拾ひ讀して寶永前後の小道具を三ツ四ツ覺  
 込めば一足飛に大家とあるの恐らく外れツこなかるべし。  
 惣じて今の作家は優れて微妙じき天才あれば大抵大文字を咄嗟の間に辨ず。縦  
 令實際は多少の經營を凝し、ものなるも口にての咄嗟の間に辨じたりと云ふを  
 外見とする習はしなれば、作家たるもの、此心掛あつて随分拙述の工風を練  
 べし。又此正則の作術を欲せざるものは始終間合仕事をして表面だけは三年も  
 五年も苦心したりとの吹聴をなすべし。  
 近頃某先生あり、其大著述の緒言に七年の歲月を費し五千卷の書籍を参考し、

工風して筆を奮ふ

ウキリアム、アラ、その他及び

二万有餘の引証を爲せりと書き給へり。七年の歲月は長しといへども僅に二千  
 五百餘日に過ぎず。此二千五百餘日に五千卷の書籍を涉獵し二萬有餘の引証を  
 爲し、とは豈に是れ鬼神の所爲と云はざるべけんや。況んや某先生の筆硯に忙  
 がはしき、あちらよりも此方よりも御用と仰しやる中に何の閑ありて此研究を  
 爲し、や。是よりして此著述者は數學を知らずとの噂騒がしかりしが、是れ畢  
 竟變則の作術に長じたる故なりかし。  
 斯くの如く一作毎に經營慘憺したりと吹聴するも妙也。咄嗟の作でござると披  
 露するも面白し。兎もかく何れにしても眞個に苦心する古作者を學ぶは今の時  
 世には餘りに正直過ぎたれば萬事手輕にチヨ、ハと工風してチヨ、ハと筆を奮ふを  
 當世才子の才子たる處なりとす。  
 ウキリアム、アラ、著作家としての伎倆實に第三流に上らず。然れども其著  
 作に於ける苦心の稿を更むる事數度に及ぶも猶ほ曾て倦まずといふ。コリンヌ  
 に到つては平生の用意自ら慎重にして多くの事實と多くの性格を記録に留めて  
 蓄藏し一篇の骨子を案出する毎に此箇底の材料をもて巧みに錯綜せる結構を作

りたりと聞く。若し夫れラム或はデクキンシイの苦心を云はゞ之に過ぐる事更に一層にして片々たる小冊子にすら数年の日子を費やしたるも少からず。Con-  
Jeston of an Opium-eater の如き實に十有餘年の鍛錬より成る。

チツケンス或はサツカレイの如きは最も著作に富めるもの也。スコットに到つては山の如き負債を辨償せんが爲に日夜營々として筆を放つ事なかりき。玄かも一代の著作共に甘有餘に過ぎず。是を以て紅葉先生が僅に數年間に五十餘種を作りむに比すれば則ち如何。(紅葉先生が五十餘種の題目は知らざれども) 縦令前者は *Life of Napoleon Bonaparte*, *Fanny Hill*、或は *Dart*, *Copperfield* の如き浩瀚なる大冊を含み、後者には『命之安賣』の如き煙草一服の間に讀得るものを數込みしにもせよ、數十年の生涯に於ける二十餘篇と數年の歲月に於ける五十餘種とは其相違も餘りに甚だしからずや。紅葉先生が才と學は是等英國第一流の作家よりも十層倍大なるは勿論疑ひなけれど又以て我が作家社會のお手輕主義を知るに足るべし。  
獨り小説家のみならず、總ての今の著作者は皆此お手輕を以て與の手となし、

サツケンス  
スコット  
ツツカレイ

お手輕主義

幸福先生の  
操觚事業

外山大先生

たゞ廣告の文面に於てだけ七年の苦心をしたりとか十度稿を更めしとか廣く群籍を涉獵したりとかの御訛を述べ。バットレルが『類推論』に於ける、ギツボ  
ンが『羅馬衰亡史』に於ける、アダムスミスが『富國論』に於ける辛苦は焉んぞ我が操觚社會に求むるを得べき。  
大著述家幸福先生の操觚事業を見よ。先生は『辨操法』を著せり、先生は『哲學大意』を著せり、『算術五千題』、『代數一千題』、『幾何一千題』、『初等三角術』、『普通教育學』、『通俗教育演說』、『小倫理書』、『小心理書』、『小地質學』、『小天文學』、『社會學』、『手工學』、『英國文學史』、『獨佛文學史』、『希臘羅馬文學史』、『婦女叢書』、『福之神』、『處世活法』、『幸福要訣』、『神童』、『萬國發明家列傳』、『西洋妖怪奇談』、『國民錦囊』——(ア、草臥た)——何ぞ夫れ諸般の科學に精通する爰に到れるぞ。人はゲーテが科學に深くミルトンが政治宗教に篤きを驚く。然れども幸福先生が宏博なる大々智識を以て比ぶれば是等皆云ふに足らず。  
外山正一大先生は學カントよりも深く識スペインサアよりも宏く加ふるに普留那



の辨とミルトンの文を兼ねるの學者あれば東夷南蠻北狄西戎何れか其雷名を聞  
いて肅然として尊崇の念を起さざるはあり。然るに其著述は「學校管理法」の  
翻譯と「露西亞の大意」及び「漢字破」等片々たる二三冊子に過ぎず。是れま  
かしなむら先生が攻學研究に忙しく且つ學生の薰陶と國家の經營に半身を分  
つが故あるべしといへども抑も日本の文科大學長にして社會學の講座を擔任せ  
らるゝ大學者が小新聞の論說に劣るとも優るまじき小冊子の外に著述をささは如  
何にも不思議千萬の事ならずや。

帝國大學の博士ハ斯くの如し。博文館の博士は則ち之に反す。外山先生に博士  
を授くる文部省は何故に外山先生より十倍増したる大著述をなせる幸福先生を  
禮遇して贈るに博士の榮位を以てせざるや。豚ハ大なりといへども幸の尻尾を  
喰ふ菜食家なり。土鼠は小なりと雖も蚯蚓を餌とす肉食家なり。外山先生  
は勿論エラキ人なり。幸福先生も亦是れエラキ人なり。一のエラキ人は博士と  
なつて一のエラキ人は博士となるを得ず。運不運は是非なければ、幸福先生敢  
て嘆息するを休めよ。社會は先生の大恩を決して忘れざるあり。先生自ら先生

の徳あり、敢て苦情を訴ふる勿れ。

著述家たらんとする者よ。宜しく幸福先生を學ぶべし。昨日は審美學を説き今  
日は料理法を談じ明日は海軍術を講じ、其間半屋の引札を書き傳授屋（斯るも  
の有りや否や）の廣告を草し、猶ほ閑わらば女義太夫の口上を認めお開帳の縁  
起を立案するも著述家としての一興にあらすや。京童は云ふ、幸福先生の著述  
一月凡る五百頁に上るト。豈に是れ區役所門前の代書人よりエラシと云はざ  
るべけんや。

博文館は著述家の淵藪なり。〇〇先生、〇〇先生、〇〇先生、  
れ立派なる金箔附の大著述家にしてクレイヨンが邂逅せし夫の所謂「Creeper」な  
るものにあらず。馬に巧なるものは糊と鉄で出来る仕事なりと云へど、縦令へ  
ば此馬評を當れりとするも、男子生れて日に一石の糊を費し三本の鉄を磨ぎ耗  
すを得は明日死するも又遺憾なかるべし。

文學者志願の輩よ、第一に萬能の著述家となれ、第二に小説家となれ、第三に  
新體詩家若くは「ドラマ」の作家となれ、第四に人物評及び史論の大家となれ。

著述家た  
らんとす  
る者は幸  
福先生を  
學ぶべし

著述の順

一人にして有らゆる大家を兼ねるも又決して難きにあらす。石板繪彩色の傳習を受くるには五十錢の束修を要す、文學者となるに、竟に一文の入費を要せざる也。

然れども著作したげにては世に文學者と管待さるゝ事能はず。此故に世に公けにせんが爲め出版するは勿論なれど、本屋は名の賣れざる人の著書を出板する事極めて少ければ先づ新聞或は雑誌に寄書するを順序となす。

先業即ち親方の電信あれば申し分なれども此便宜を欠けば初めの中は精々勉強して日に五社或は十社に向けて原稿を送るべし。初めは詮方奇ければ没書を覺悟し唯根よく勉強すべし。斯くて郵便税を凡そ五十錢分も損する中首尾よく編輯局の氣に入れば必ず掲載の榮を得る事ある。此氣に入るといふは強ち立派だからといふわけにあらす。云はゞ「ゼツこい」と全くと本のみぐれ當りに過ぎざれども萬一此榮譽を得し時は其圖を外さず一ツには原稿をドシ〜送り二ツには社員に交際を求め一生懸命に世事を勝べお引立を願ふの極意也。而して初めて新聞或は雑誌に掲載せられし時は有頂天になつて嬉しがるが文學

先づ雑誌  
或は新聞  
に寄書す  
べし

初めて  
新聞に  
載り  
し時  
は嬉  
しがる  
べし

者らしくてよし。ドイツケンスの初めての作 *"Old monthly Magazine"* に現はるゝや、この印刷の名譽を得し嬉しさに逆上して物の色を分つ方角もなかりしかばウエストミンスター會堂に登りてせきつく胸をさすり頓て三十分間は道路を歩する能はざりき。ジエーン、アオステインは卿の生涯に最も愉快なりしは何事かと王の問へるに嬌羞を帯びて答ふる様『开は御言葉までもなし妾が著書の初めて出版せられし時に候』ト。斯くの如き先例あれば文學者は飽くまでもタ、ハ、お、く、嬉しがつて諸人に吹聴する事勿論なるべし。ゲーテは斯る瑣事を屑とも思はぬ大氣量人なりしが夫れすら『我が原稿の見事に印刷せられし試刷を見る時は其豫想より一ト際詞藻のめでたきを覺ゆ』と云ひぬ。シユライエルマヘルに到つては寧ろ已れが著書の出版せらるゝを厭ふと云ふ變物おれども猶ほ且つ『昨日は我が夢想せる愉快の中に原稿を印刷者に送りし一事を數ふるを得たり』云々と記し、事ありき。文學者が己れの名作を割腕に附せらるゝハ、武士が戰場に出で、敵の大將に一ト矢を向けしと全ヒければ喜ばざらんと欲するも豈に得べけんや。

新聞或は  
主筆に載  
りし後  
は面  
会すべし

一ト度新聞若くは雑誌に掲載せられし時の直ちに刺を通じて其主筆に謁を求むるを肝腎なりとす。若し應接所に請せられ一椀の澁茶を薦められし時は已れは既にく大家となりしと自惚るゝ事最もよし。恰も「タアナメント」に勝利を得たる武士が王城の公主より賜はる引出物を待つ如く意氣昂然として人を呑むに非ずんば忽ち安く見らるゝ恐あり。まかれども——こゝが氣轉ものなり——餘りに昂然とすれば一ツに歡心を失ひ二ツには敬して遠ざけらるゝ憂あれば随分言語を謹み、貴君の新聞の日本一だとか貴君の人物論は皮肉に入るの妙があるとかいふお世辭を丁寧述べて私も及ばすなから驥尾に附いて文學の爲め力を盡さうと存じますと下から出る第一なり。言語を恭しくして動作を傲慢にするは文壇に於ける最上の方策なり。ドストエーフスキイの初めてペリンスキイを見るや太く稱讚せられたりしが後年其所思を記して曰く『余は夢にも此大批評家の許可を得るほどの大家ありとの思はざりき勿論其以後に於ても曾て自ら大家なりと信じ、事なけれども特に此時に在ては我が胸の躍動するを禁ずる能はざりき』云々。冷酷且つ嚴峻なる評家より意外の賞讃を博せし二葉の詩

無暗矢た  
すに投  
する事

人が當時の胸中實にさるありぬべし。但し今の文學者のドストエーフスキイの如く夢にも自ら大家ありと信する能はずなと、野暮なる事をいふべからず。必ず一ト度新聞に掲載の榮を得て其新聞の主筆と會見せし曉には直ちに大家と成りすましたる心持あかるべからず。斯くて首尾よく新聞社會に出入する便宜を得れば無暗に數でこなす覺悟を以てドシ、投書を爲すべし。世間の人は多く名の出るをもてエラキ事と考ふるが故に三月も経てば天下晴れての大家となるを得。是に於て一端新聞に載りしものを集めて一巻と奇し之を書肆の手に托し立派ある表紙を附けて出版すれば心願全く成就、末世必ず文學史に名を残すに足ると思ふべし。縱令文學史の著者が粗忽かしい男でツイ忘れたにしても書籍館だけに其本の残るは決して間違なし。又一端新聞に載りしものを更に出版するは兎角『引眉毛』だの『洗張』だのど悪口を云へどジョンソン、ゴールドスミス、アザソン、バルク等の諸著は勿論、ディッケンズの小説の多く『Daily News』に連載せられマカオレイが論文は大抵『Edinburgh Review』に現はれたりき。殊に最も尋常の讀者には不向なる

ドストエーフスキイの小説すら莫斯科新聞の紙面に上りしと聞けば文學の摸範とし尊まるゝは概ね所謂『引眉毛』若くは『洗張』にあらざるはなし。文學者は是非とも新聞の古物を出板する算段を廻らさるべからず。全じものを二度に利用し得て世人は初めて之を大家なりといふ。

さて如何にして書肆即ち出版商と關係を結ぶべきや——といふに、先進大家の紹介あれば容易なれども、紹介なくして本屋の臺所口より恐惶再拜して主人に謁を求むる如きは不見識にして學ぶべからず。さりどて草廬の諸葛先生を摸擬て三顧の聘を待つも迂遠なれば、車を店前に横附けにして横柄お面會をもどめ、盛装に主人を眩耀せしめて當世文學の馱法螺を吹き、初めは原稿料に就て噫々を費さず、唯世間の迷夢を攪醒せんが爲に我が著述を公けにしたきの意を述べし。但し此處が則ち容易ならぬ七分三分の兼合なれば先づ東京の書肆に就き少しく語らん。

如何にして書肆と關係を結ぶべきや

ホーブが書估を眺める詩

書肆が實業社會に於ける位置若くは商業上の能力は爰に云ふの必要なし。たゞ現時如何ある境界にありやと問はば恰もホーブが次の嘲諷を値ひするものと云はん。

はん。

"Obscene with fells the miscreant lies bevraged,  
Fallen in the plush his wickedness had laid;

Then first (if poets caught of truth declare)

"The catiff vaticale conceived a playger."

此諷詩が正面的となりし十八世紀に最も名を轟かしし出版人エドマンド、カールにして活潑有爲の氣象を抱いてトンソン、リントット、亞流と共に商界に驅逐せしにも關らず此冷淡なる皮肉の詩人よりグラツプ町の破落戸と共に一喝せられしは倍も氣の毒千萬の事あらずや。

カール何人ぞ。十八世紀の英國出版社會に於ける大橋佐平氏なり。佐平氏が堂々たる天下の奇傑にして一攫萬金を得て内へ出版社會に驚慌を起し政府をして特に法令を發布せしめ、外へ米歐に漫遊して到る處出版業の肝膽を寒からしめたるは人の皆知る處なり。曰く『日本大家論集』曰く『日本文學全書』曰く『新撰百科全書』曰く『支那文學全書』曰く『帝國文庫』——何ぞカールの輿論の

カールと大橋佐平氏

反撃を受けし五部の書と相似たるの甚だしきや。  
 ポープは嫉妬の尤なるものあり。此故に當時の最も公共心に富めるジャコブ、  
 トンソンをすら「渠は王が勳爵士を造るが如く詩人を製造したり开は名譽を興  
 むるにあらすして金錢を惠まんが爲なりかし」と嘲りぬ。而して此トンソンが  
 製造せし詩人とはドライデン、ジョンソン、ヤング若くはポープ渠自身等の如  
 き實に天與の詩人なりしに關らず猶ほ其冷諷の中に埋められしを見れば、誤植に  
 富める羅甸の文を印刷してウエストミンスター學院の書生に靴をもて蹴られし  
 カールを汚瀆の中に突落して快哉を歌ひしも怪むに足らず。  
 誰か佐平氏を以て唯利に敏き商人なりといふや。佐平氏の單り利に敏き商人な  
 るのみならず内藤某が所謂「仁者」にして天下の書籍を廉賣して普く智識を廣  
 むるに汲々たる一種の「Philanthropist」なり。他の「日本大家論集」或は「新撰  
 百科全書」を見て剽竊書肆なりと罵り「文學全書」若くは「帝國文庫」を證と  
 して古本綴直し所なりと笑へども是れ佐平氏の智識の普及に熱心なる所以なり。  
 ドナルドソンが書物の價値さのため讀書の範圍限らるゝを憂ひ故山より崛起

して倫敦の市場に出で一時出版社會をして憤懣せしめ有ゆる非議謗評の鴻量と  
 なりしが如き頗る相似たる者あれども、死に臨み其巨萬の富を擲けて一貧民院  
 を創立したるに及んで偶々其志を見るに足る。未だ佐平氏に於て道徳の美譽を  
 見ずと雖も其志あるに到ては勿論云ふまでもなし。佐平氏も亦人なり。徒ら  
 に他の板權に屬するものを剽竊し古本を綴直し、まかも間違ひだらけの租本を  
 濫刷し、單り生ける操觚者を乗合馬車の馬の如く苦めるのみならず、昔の下に  
 安眠せる古人の屍を蹴るの不敬を爲して休むものならんや。  
 カールはウエストミンスター學院々長の羅甸語演説を諷刺して運動場に牽摺出  
 され學生が熱罵亂拳の下に毆打倒せられ、「ウサントン侯裁判始末」を出版し  
 て貴族院に呼出され議長の前に平脚の如く三跪九叩きて罪を謝し終には「*Myself's*  
*Weekly Journal*」に於て「*Sin of Quilism*」なる題目の下に甚だしき攻撃を受く  
 るに到りぬ。其一節に云へらく「*The fellow is contemptible wretch a thousand wags;*  
*he is odious in his person, scandalous in his fame; ... more beastly, insufferable books*  
*have been published by this one offender than in thirty years before by all the nation*」云々

和田篤太郎

「ダウントレス」大橋！カールとドナルドソンを配合したるが如き外貌を具ふる爲に平沼某と全しく世に毀らるゝは酷も又甚し。『大家論集』よ、『日本帝國史』よ、『支那帝國史』よ、『新撰百科全書』よ、爾等は佐平氏を戕賊せし「パチルス」なり。佐平氏に罪あるにあらざ、罪は佐平氏の出版物にあるのみ。

博文館と對立して文學書——と云はんよりは小説の出版をもて聞ゆるは通四丁目の春陽堂なり。主人姓は和田、名は篤太郎、志城と號す。夙に文雅風流の道を弘むるに志厚くして初めて櫻田に業を創めし時より『系竹の栗』、『新入唐詩選』、『春之錦戀之書折』、『八重櫻里之夕暮』等の傑作名編を出版し近時に於ては殆んど小説専賣所の觀あり。之を英國に求むれば則ちヘンリー、ゴルバアンをらんか。

鷹城先生は骨ある士あり。此故に作者に屈するの腰をたざる代りに世間の兒守や愛經床の嗜好を見るの眼ありて色摺の表紙に粗悪の印刷體を説諭化する大才を有す。人は七錢の探偵小説を惜む事甚だしけれども此同じ人が『水沫集』或は『葉末集』……せしむれば功罪相償ふといふべし。

和田氏は曾て南翠、塩村雨先生の御用書肆なりしが、今は紅葉、浪六二大關の出版家元の名譽を戴けるは恰もトンソンがドライデンに於けると全じ。但しトンソンがローウエに依て、

*"Thou Jacob Tison, wert, to my conceiving,*

*The cheerfulest, best honest fellow living."*

と唱はれし如く操觚社會に敬愛せらるゝや否やに到ては問題外也。

トンソンを謳歌せしものは獨りドライデンのみにあらず。全じ出版を業とするダントンすら「トンソンは能く著者并に其述作を判斷するの識力を有し極めて正確に且つ頗る公平に鑑定して猥瑣の冊子を絶えて出版せず」と評したりき。

されば渠はドライデンの著書の外ミルトンの『失樂園』を公けにし初めてシエークスピアの全集を印行して世間の眼に觸れたりといふ。出版者も爰に到れば批評家の資格ありといふを得べし。

鷹城先生は日本の大出版人たりといへども未だトンソンの如き名譽あるを聞かす。否な、先生も『聞之世の中』を印行して世論を喚起し『三日月』を出版し

て新大家を紹介せし功あれば之を鑑識の明なしとすべからず。况んや亞米利加探偵譚の趣味を輸入し、『名譽實録』の智識を世に與へしに到つては天晴殊勝の振舞にしてコルパアンCorpánの小説のみを出板しながら終に一の傑作を紹介せし事なき比にあらざるあり。

博文館と春陽堂のはか文學書類を發行する書肆決して少からず。曰く學齡館、曰く崑山堂、曰く新進堂、曰く東京堂、曰く金港堂、曰く民友社、曰く上田屋、曰く吉岡書籍店——何れも皆堂々たる大出版業を營むものにして天下の文學を生産する事凡そ一年に萬を過ぐ。近頃我が繩張内に開店せし右文社すら毎月一回づゝ雑誌を刊行するのみならず既に十餘種の書籍を公けにせりと云へば日本の文運も又盛なる哉。

人はロングマン或はハーバリーの事業を見て日本の書肆の小なるを吐けども「君の様な人に来られては大變だ」と倫敦の出版者を辟易せしめし大橋佐平氏を初めとして和田篤太郎氏、上田銀治氏、吉岡哲太郎氏、原亮三郎氏、内田芳兵衛氏等悉く稀有の企業家にして之に依て獲得せし収益に多少の區別を認められ溢澤

書肆の主  
人と操觚

某若くは益田某に劣らざる商界の奇傑なれ。子ルソンがお伽話を出版せしに業を創めて四百五十人を雇使するに到りし事業に比すれば佐平氏が七十人の傭人を役するも極めてケチなるに似たれを抑も問男相場と全し原稿料を稽首百拜して有むたく頂戴する今の文學者に較ぶれば又頗るエラシク云ふべし。

書肆の主人の一般に大企業家なれば振山翻海の意氣込ありて著作者を小兒同様に禁止に弄び内心の内心にては飽くまでも馬鹿にして好加減に絞らせども表面

生と呼びて優遇業閑にあらず。此故に操觚者の貧乏人なれば暗に利を以てすれば必ず自由になる者と高をくぐりながらも禮を文士に欲くの拙策を執らずして敬して遠ざくるの工風を廻らずに巧みなり。若し夫れ數でこなす輻輳細工的著述に堪能なる著作家を遇するに到つては活板拾ひの小借を睨視するの眼を以て之を見る。

操觚者に對するに二法あり。一は金錢を以て其心を縛らんとし、一は朋友となつて懇意上の義理を結ばんとす。前者は賣物買物主義にて原稿は先方のもの金錢は己の物、買ひふが買ふまいが此方の勝手で、買つてしまへば焼いて喰はふと

表て喰はふと關ふものかといふ了見で、萬一不平を陳べる事があつても平氣の平三知らん顔の半兵衛で澄まし込む。

之に反して後者は何處までも先生々々と持上げ、随分調子に乗る時は君、僕の應對まで切込み、諸方へお伴をして駄洒落の聽手を勤め茶屋の會計役を仰せつかり、何事も圓滑に切廻して談笑の間に原稿料を直切るをもて得意となす。

英國の出板人は概ね有識の士にして著作者と對等の交際をなす。例へばフォスターがヂッケンスに於ける如き最も其關係を證するに足る。然るに日本に於ては全く其觀を異にして著述者は恰も他の出入職人と同じ待遇を受くるに甘んじ唯表面だけ先生號を奉られて得々たり揚々たり。

ジョンソンは古今に類少なき貧困作者の一人にして幾度となくケーザ、ドッツレイ、リチャードソン等の書肆より救はれたり。然れども是等の書肆一人としてジョンソンを禮遇するに等閑なるは無かりき。夫れケーザが無名の貧書生の手に成れる『倫敦』(の女作也)に向つて分に過ぎたる原稿料を投じ、ドッツレイが八年の長日月に涉り一宇書の出版を約束して其間資給を怠たらざりしに到て

は我々の國終に其比を求むるを得ず。

出板人が著作者の奴隷にあらざるは勿論なれども、著作者も亦決して出板人の奴隷にあらす。然るに出板人は表面に於て先生々々と呼べども心に於ては見るに奴隷を以てし金力を借りて飽くまでも願使せんとす。此故に偶々氣骨あるの士其願使を肯んせざる時は陽に尊敬の意を表して陰に力を極めて排斥す。面談叩頭荐りに太鼓をたたくものは書肆の眼より見れば大々大の文學者なり。

途に某小説家に遇ふ。問ふて曰く何處へ? 答へて曰く「お店廻りに……」。是れ書肆と作家との關係を證する好辞例にして、今の文學者なるものはお店の注文を受けて口糊する職人の一種なり。何ぞがアライルが所謂世道を補修し人心を指導する底の「ヒドロオ」を以て撰するを得んや。

然れども文學者の腰を低ふして書肆に出入するは、我が著述を出板して貰ひたさがる心にして、我が著述を出板して貰はんとするは唯金錢に代へんとする慾望のみにあらずして畢竟世好の低さを導かんと欲する志念切ければなり。

勿論強ちに人氣に投せんと事を勤むるにあらねど、賣行悪しき者を出板する書肆



人氣

なきをもて、世好の上進を計らんとすれば勢ひ俗人に阿る工風を爲さるべからず。書肆の氣に投じて首尾よく原稿料萬歳を歌いんとすれば、先づ此人氣を取る事を心掛くるが第一あり。

『人氣』は文學者が一念を注ぐ金のなり。首尾よく之を射透せば原稿料といふ景物に有附くを得。世に人氣を毒蛇よりも恐ろしがる無氣力漢あれども、人氣畢竟蜜の如し、一ト度賞斷すれば夫はく甘くてく耐へられたものであり。金が取れて、人にもてはやされて、まかも幾分かは或る影響を與ふる事を得て。若し『人氣』に投ずるをもて卑劣なる藝人根性となさばシエークスピーヤも此根性を有てる男なり。已れが下手なものを作つて世の喝采を受けぬをもて仕方がなしに『我は人氣に媚びず』といふは古今の大俗なり。然るに此大俗が偶々世に容れられし大詩人を評して直ちに世好に枉屈する期間的作家となすは其心のさもしさ推量られて氣の毒千萬ならずや。

ジョンソンは字典の編纂を終りし時人に語るらく、書肆は文學の保護者なりト。若し渠をして今の日本に生れしめば如何。渠は人氣の尊きを知らず、人氣に阿

書估は人氣の保護

書估不充分の病人

諷する事の却て名譽なるに心附かず、人氣の前に叩頭禮拜する作家の本分を忘るゝの故に、其『倫敦』其『ラセラス傳』の Vanity of Human Wishes 等必や惣ての書肆に排斥せられて空しく屑籠の中に葬むらるゝ運命に陥りしなるべし。渠は吐くべし、書肆は人氣の保護者なりト。

今の作家中にて最も商賣下手なる某曾てヤケ腹の氣味にて曰く、書肆の滅絶を計らざれば文學を如何にもする能はずト。又大理想を覆んで濶歩する某作家は曰く、出來損ひの本屋に賣れト。若し書肆にして出來損ひの著作を買てヒケラくと世を渡るものからは何千萬軒をたゞ潰すもいかで文學を上進するを得べき。今の書を估ぶものは多くは營養不充分の病人にして氣息を將に倒れんとす。何ぞ特に滅絶の速かなるを望まんや。

此羸弱なる書估の壽命長久を願ふ文學者は須らく出來損ひの著作をシノマタ製造して賣附けるべし。是れ今乃世に處する著作家として第一の仁徳なり。一世好を上進し二に書肆を救ひ三に自己の収得を増す。豈に是れ明治の聖代に恥ぢざる才人の事業にあらすや。

文學者よ、文學者よ、爾は「人氣」の僕隸となつて書估の前に三拜せよ。是れ決して恥辱にあらざ。縦合一步を譲りて恥辱となすも世好を上進し文學を發達せんが爲ならば此位な恥辱やはか忍ばれぬ事あるべき。文學者は先づ人氣奇妙頂來を念じて書肆のお出入となるべし。文學者は先づ人氣奇妙お出入となつて後の心得一二を説かば、

第二、自己が買れツ子ある事を吹聴すべし。例へば甲の書店に行けば乙の本屋から原稿を催促されて困ると云ひ、丙の出板人に遇へば丁の家のものを請合てゐると話し、戊の書估を訪ふ時は己の店から發市す筈と語り、庚の番頭に向ては辛の編輯所から復た頼まれたと披露し、壬の小僧に遇へば癸の家から原稿料の前借をしたと法螺を吹く。

書肆の催促と原稿料の前借は文學者の最も誇る箇條にして、文學者人に遇へば必ず「此頃は毎日催促されるから逃げてゐる」と御詫を吐く。是れ我は大家なりといふに同じければ也。

第二、原稿料は随分十層倍にして披露すべし。例へば實際十圓で賣れたものは

五十圓、二十圓で賣れたものは百二十圓と輪を掛けるが如く。

第三、成るべく本屋の御機嫌を取りて他人には自己の情も其書肆の黒幕宰相であるかの如く物語るべし。書肆の黒幕宰相——嗚呼、是れ絶代の榮譽にありずや。

其他に猶ほいくらもあれど、兎にかくこゝらの調子を飲込んで立廻れば、廣告は立派で、製本は見事で、而して評判の花やかなる書物が出来て、目出度く明治の大々文學者となれる事請合申す。

傑作とは何ぞ。印刷したる紙を綴ぢしものあり。文學者とい何ぞ。此綴本を作人なり。世間に何が一番容易く、一番安心で、一番金が儲かつて、一番名が賣れて、而して一番資本の入りぬものと云へば、恐らく此文學者あるべし。

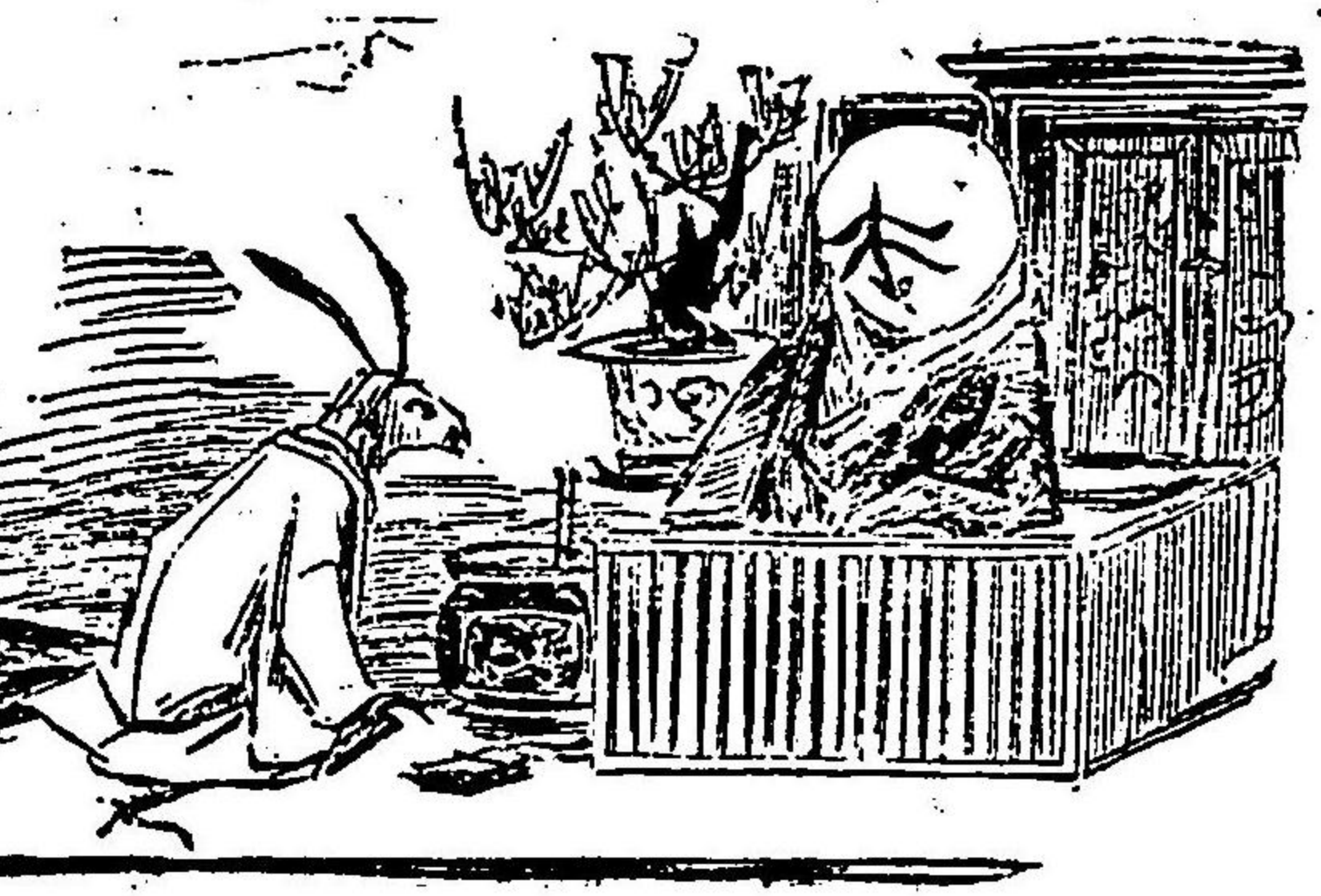
「ヨカク」の貽賣を見よ。派手な衣装をして、面白ひ歌をうたひ、可笑しい舞踏をして、ソシテお錢が取れて、其上に粹な乳媪や可憐ない兒守にチャホヤされるとは古今随一の果報者といふべし。

是にも増して文學者は一室の中に安居し白紙に無駄書をするばかりの事で、外



Happy insect, happy thou!  
 Dost neither age nor winter know;  
 But when thou'st drunk and danced and sung  
 Thy fill, the flowery leaves among,  
 (Voluptuous and wise withal,  
 Egienrian animal!)  
 Sated with thy snimmer's feast,  
 Thou retir'st to endless rest!

— Cowley.



に出で、は社會の師表と仰がれ王侯貴人に等しき尊榮を受く。其餘得を云へば  
 不相應なる富を獲収し美人の崇拜を辱ふす。翁と甘き商賣あらずや。  
 文學者を以て阜齋に比するものあり。曰く、阜齋に數種類あり、「イバツタ」「ヨ  
 クバツタ」「ヘイツクバツタ」「イチバツタ」「フンバツタ」「グスバツタ」「シヤチコ  
 バツタ」「デシヤバツタ」等の如しト。  
 白晝は躍り半夜は歌入を天賦となし草の葉に置く露を吸ふて空しく跳廻り竟に  
 秋風と共に枯行く身の果を知らざる憐れさよ。されど、輕やかに飛んで聲美は  
 しく綿々啣々休みあぐ吟じて浮れ暮す果報ヘルシヤの王より更に目出たし。  
 カウレイ歌ふらく。

All the fields which thou dost see,

All the plants belong to thee;

All that summer hours produce,

Fertile made with early juice."

天の玉醴を樂み萬頭の麥野稻田を我らもの顔に振舞ふて飛跳ねる幸運を撞にす

る卑益は亦是れ一種の豪傑たる哉。

或人が文學者をもて卑益に比せし何の故なるを知らず。さりながら寸に足らぬ身を以て天地の間に逍遙遊する無想の豪傑先生に比せられしは豈是れ一大傑譽と云ひずして何ぞ。 *Hyacinth animal!* 爾は稻と麥とに満足せず飛んで本屋の弗箱に行け。本屋は爾を款待し與ふるに黄金の靈水を以てすべし。縦令二三者より米搗卓益の符號を受くるも如かず此靈水を酌んで醉歌放吟躍り狂ふて浩然の氣を養はんには。

多くの詩人は社會を慘酷なるもの、如く歌へり。ドストエーフスキイの如き其尤なる者あり。然れども、日本の社會の中々に抜目かく名士を優遇するに吝からざるは錦織剛清君に謳歌せし一條にて分明ならずや。今最も分り易き様に社會が與へし文學者の報酬を算測せば、

一 『三日月』 ..... 總字數凡る三萬六千

一 冊定價二十錢にて發賣部數を一萬二千部と見積れば總高二千四百  
四一即ち一字七錢に當る

一 『井筒女之助』 ..... 總字數凡る五萬

一 冊定價三十錢にて發賣部數を一萬部と見積れば總高三千圓一即ち  
一字六錢に當る

天下に雷名轟ける浪六先生の爲め社會が仕拂ふ報酬は大抵一字六七錢内外なり。此算法にて見積る時の春陽堂の『探偵小説』に對しては一字四錢位、博文館の『少年文學』に對しては一字七錢内外を仕拂へり。而して最も有名なる錦織先生の『闇之世之中』に向て社會は實に一字概于十五錢を投じたりき。所謂一字千金の相場に行かざるも社會の文學者を禮するや盡せりといふべし。『藤原多助一代記』の如き發賣部數殆んど二十萬に達すると聞けば日本の社會は著作家を遇するに決して冷酷あらざるなり。  
乞ふ、一回頭して森岡外氏の『水沫集』を見よ。京童の言を信すれば發賣部數五百に超えず。『水沫集』は六百頁にして字數凡る四十萬なれば之を算測すれば一字僅に七八毛に該當す。噫、岡外氏が空前の大文學者なる事は上、天帝より下、水呑百姓に到る迄首肯して承認する處あり。然るに浪六先生の文字を買